

化してその中におのづから統一のあるのとは異なつて、早く既に連歌の鑄型を與へるが如き弊がないでもない。たとへば、一の懷紙の表の程はしとやかなの連歌をすべく、二の懷紙よりさやめき句して、三四の懷紙をば特に逸興あるやうにすべしといふてあるのは、樂に序破急ある如くに連歌をして最もおもしろみのあらしむべき最良の結構ではあらうが、いつもかうばかりにしたならば連歌は千篇一律のものと成つて、却ておもしろみは減するであらう。その思想の範圍詩材の選擇をも普く天地間に求むべきをいはないで、『萬葉』『日本紀』『風土記』『源氏』『伊勢』または『古今』以來の撰集にのみ限つたのも惜しい。要するに、良基の説は範を世人に示して連歌道の隆盛を促進したが、一方に於いては早く連歌をして持法のものとならせる傾向はあつたのである。『應安新式』とても亦そのとほりである。

良基の連歌は、その身が元來和歌の師範家たる二條の流派を承けついでだからでもあらうが、長短二句の關係も自然に短歌の上下句の關係を有するを免れない。例へば、

家の千句の中に、旅のたもと露とこそなれといへる

ふるさとに思ひおきたる人ありて

文和二年六月世の中しづかならぬ事ありて、美濃國小島といふ所へ行宮にて侍りけるに、同月彼處にて連歌し侍りしに、
をしまの里はたや松の風と侍るに、

旅にあるみのゝをやまのうき秋に

と附けた如きは、その一斑を知るに足るであらう。その風體大方二條流の和歌のやうに、優美典雅といふ外にとりいでたる特色なく、思想も平凡である。されば良基の連歌に於ける功績は、その創作のすぐれてゐるといふのではなく、その社會上の位置とその著書とが連歌をして隆盛の域に赴かしめたことである。

救濟良基等の歿後には、宗砌(一一一五)心敬(二〇六七—二一三六)兼載(一一三〇—一一五八)等の諸名家が續出して、連歌はいよゝゝ繁盛の運に會したが、宗祇法師(一一八—一二一六)の出づるに及んでその頂點に達した。

宗祇は姓を飯尾といひ、幼少の時に律僧となつたが、東常縁について古今傳授をうけ、また心敬兼載に従つて連歌を學んだ。但し、弟子の肖柏の説によると、宗祇の成功は宗砌に負ふところが多いといふことである。宗祇が和歌の方面に於いても一か

ど重要な位地を有してゐたことは、古今傳授の傳統から見ても推測される事であるが、連歌の方面に於ける位地は更に重要なものであつた。播紳の筵に列り、同志の會に出席しても、一座宗祇に及ぶものなく、いつも推されて宗匠となり、朝廷からも花の本といふ號を賜はつた。花の本の號はこれが始である。

當時の連歌は百韻を以て普通の形式とする。これについて最も流行したのは五十韻または十句とである。而して從來の連歌は一句一句では完全なる意義を成さず、多くは長短二句が連続して始めて一首の短歌の如きものとなつたのであつたが、今は一句一句が單獨に完全なる思想をあらはすと同時に、思想上もしくは縁語などの關係で前後の二句の相聯るものとなつた。これは連歌史の上からいへば頗る注意すべき革新で、且つ最も進歩したる革新である。從來長短二句で始めて完全なる思想をあらはしつゝ、推移し行くのに比べると、一句一句に完全なる思想をあらはした上に、長短二句が思想上もしくは縁語等の關係で推移し行くのであるから、その變化も更に多かるべく、その趣も更に深からざるを得ない。警句警語などの所謂寸鐵人を殺すの妙も、かくてこそ出づべきである。後世發句の獨立して發展したのも、この革新に基くとこが、多くなつた。

宗祇は實にこの革新の陣頭に立ち、一人である。其の良器は連歌の法則にして斯道中興の功をば收むべきも、その説くところは往々和歌の法則に囚はれて舊套を脱しない所がある。良基の作は鎌倉時代の柿本衆のとさまで異なる點が見出せない。宗祇はこれに慊らなかつた。宗祇はそこで後土御門院の明應四年(二一五五)内勅を蒙つて『新菟玖波集』二十巻を撰定した。當代の連歌を輯めたものである。その外『吾妻問答』といふのは、古今の連歌の變遷異同を論じ、本歌のとり様源氏の付様など、いろいろ連歌をするものゝ心得を示したものである。更にかれの連歌を見るに、著想常に意表に出で、句々の推移おもしろく、連歌そのものゝ要求する變化の妙を極む。見よ、その『獨吟十句』を。

なべて世の風ををさめよ神の春

花もたむけのゆふかくるころ

旅立てばかすむ山にもみちありて

かりねの空にちかき明けがた

誰が里のかねかとばかりきこゆらん

霜ににふけゆく月のさやけさ

枯野にもなほかげたのむ蟲の聲

一むらすゝきちりなつくしそ

措辭も輕妙である、自然である。もし強ひて難をいふと、思想の範圍が舊套を脱しない、なほ和歌者流と多く異ならぬ、而して聲調も壯大の氣に乏しく纖弱の風を免れぬことである。あれほどに句々の推移變化の巧を極めたものも、なほこの難のあるを免れぬとすると、連歌に向つて詩材の豊富を望み、聲調の壯大を求めるのは空想かも知れぬ。連歌の生命は句々の推移變化にのみあるのかも知れぬ。形式こそ自由であれ、用語こそ自在であれ、根本思想に於いて何等異なる事のない和歌者流の手に養はれた連歌は、形式以外、用語以外はたまた句々の推移變化といふこと以外に、新しい天地は無いのであらうか。もしさうだとすると、連歌の運命もはや察せられるやうな心地がする。

宗祇の著書は、以上の外に『愚句老葉』宗祇初學抄『老のすさび』などの連歌の書や、『白髮集』宗祇和歌集『宗祇自讀歌集』豆爾葉大概抄等の和歌の書もある。

宗祇の弟子に牡丹花宵柏あり、宗祇宗長等がある。中にも宵柏(二一〇二—二一一八)が最もすぐれてゐる。宗祇の『新式今按』といふものがある。その著に『伊勢物語宵柏抄』といふものがある。『新式今按』といふ所ですら、良基の『筑波問答』に比べて見ると、稍末に流れ法に拘はるか、の弊があつた。『新式今按』に至つては、その式目の煩瑣なる、拘泥する所の多き、殆ど全く連歌の自由を抑壓してしまつた。かくて、連歌は宵柏宗長等を名残として漸く衰微の境に入り、只わづかに神社佛閣などで祈禱追善などの用に供せられるのみとなつた。

連歌が衰微の境に入らざるを得なかつた事情はいろいろあつたであらう。その一は、思想の範圍が狹隘で、千篇一律になり易かつたこと。その二は、これを避けやうとして出來た式目が次第に煩はしくなつて、門戸を閉鎖することの恰も和歌衰微の事情に似たるものゝあつたこと。その三は、連歌師の心事陋劣にして、或は權門勢家に入出入して、只管その鼻息をうかつたり、或は物を賭けることが行はれて、思想の高尙を缺くものゝあつたこと。その四は、これらの結果、心あるものゝ漸くこれを厭ふに至つたこと。これらが重なる事情であつたらうかと信せられる。

宗祇の『新苑玖波集』には、かの栗本衆が主張した俳諧調の連歌は全く排斥して片言隻句も載することは無かつたに、荒木田守武(二一三三—二二〇九)山崎宗鑑(二一二五

一二二一三の出づるに及んで、斯壇は再び俳諧調の連歌の爲に占領さるゝに至つた。俳諧にはいまだ煩瑣なる式目がない、俳諧の天地はなほ自由である。守武も宗鑑も最初は宗祇など、修交のあつたものであるが、在來の連歌では到底爲すなき事を見てとつて、俳諧調を唱へるやうになつたのである。守武の著に『飛梅千句』二卷があり、宗鑑の著に『犬筑波集』一巻がある。守武も宗鑑も共に俳諧調の連歌を主張したといへ、守武は宗鑑に比べると、その風體が頗る異つてゐる。守武のは優美に上品であるが、宗鑑のは粗豪に野卑である。宗鑑の『犬筑波集』の中には卑猥で殆ど讀むに堪へないやうなものも見うける、守武の『飛梅千句』にはさせる難はない。殊に守武の別著『世中百首』の如きは、世に『伊勢論語』とまでもいはれて尊重されたのでも、守武の風格は察せられる。されども、守武の俳諧も宗鑑のも、その滑稽諧謔は極めて單純なもので、未だ識者を捧腹絶倒させることは出来ない。その滑稽は單に地口の如く、駄洒落の如きもので、眞にをかしいものではない、また俗世を警醒罵倒しようとする諷刺的のものでもない。彼等の滑稽諧謔とするところは思想の上ではなくて、主として修辭の上のみである。例へば、

な の り て や そ も く こ よ ひ 秋 の 月

（飛梅千句）

あ つ た ら 蜜 柑 く さ ら か し ぬ る

（犬筑波集）

あ つ た ら 蜜 柑 く さ ら か し ぬ る

（犬筑波集）

正月の茶の子に事をかきばかりの如きを見ても、そのおもしろみは單に縁語か懸詞かを用ひた點にあるばかりで、思想には何のをかしみもなく、そして平凡野卑なるものに過ぎない。吾人は、守武と宗鑑とが連歌の到底爲すに足らざるを見て俳諧を唱へたる見識をとる、されどもその滑稽のいまだ幼稚に、その機智のいまだ淺薄なるのを惜しむ、もしそれ、この二人の作にとるべきものがあるとするれば、或は發句の技倆か。

元日や神代の事もおもはるゝ 守武

笠を著ば雨にも出でよ夜半の月 宗鑑

守武宗鑑以後は俳諧の連歌が頗る流行し、江戸時代となつて、松永貞徳の出づるに及んで大成の域に入る。江戸時代に於いて、滿天下を風靡して流行を恣にした俳諧は、かくしてこゝに端を發いたのである。

第六章 謠曲及び狂言

我國には古來神事の際に舞樂を奏する風習があつたが、平安王朝時代となつて、更に神事の式後に、滑稽諧謔の技即ち今日の茶番狂言のやうな所作を演ずる事が行はれた。これを世に猿樂さるがらといふ。支那の散樂の轉じたもので、最初は後世の所謂手品輕業のやうな技などをも行ふのであつたが、後には専ら滑稽諧謔の所作のみを演ずるやうになつたのである。さるがう事といへば直に滑稽ざれ事の意と解せられるのでも、猿樂が滑稽諧謔を旨とした事は察せられるであらう。當時は未だ豫め脚色した曲などがあるのではなく、そのをりくゝの場あたりばあちに滑稽の所作を演ずるに過ぎなかつたが、それが段々と盛んになるにつれて、鎌倉時代の初期には既に猿樂を專業とするものさへ出づるに至つた。

その頃また別に田樂といふものがあつた。これも亦古くから始まつたもので、元は農夫の勞を慰する爲に笛鼓を鳴らして舞ひ遊んだのである。然るに、これも後には專業の法師が出て、その家を立て、本座新座など、號し、最初猿樂でやつた手品輕業のやうな事をも取込み、農夫の勞を慰する爲ばかりでなく、上流社會の娛樂にも供するやうになつた。後田樂が更に新たな舞の手を案出し、史的事實を一曲に脚色して唯演劇的のものとするに及んで、大に隆盛を極め、ついに猿樂を壓倒するに至つた。この史的事實を脚色したものを田樂の能藝、略しては田樂の能ともいふ。今日ではその技の如何に演せられたか、その史的事實の如何なるものであつたかは知悉する事は出來ぬが、北野物ぐるひきたのものがらひとか、法然上人はふぜんじんのうじんとか、小野小町おののこまちとか、實方じつかた、敦盛とんせいとかいふ題名の残つてゐるのに據つて見ると、後世の猿樂の能に頗る似寄つてゐたものであつたらうと思はれる。北條高時や足利尊氏は非常に之を好んだ。室町時代となつても、應永二十八九年おうえいにじゅうはちじゅうにゅうねん（一九八一、二）には祇園御旅所にて増阿彌が勸進田樂があり、文安元年ぶんあんげん（二一〇四）にも田樂能があつた事など『花營三代記』に見える如く、その頃までも猶ほ盛んであつた。

かく藝壇は田樂の能のみが獨り流行を恣にするの時に當つて、一方にはまた猿樂の能といふものが起つた。從來猿樂の家には、日吉の神事に奉仕するものに近江の山階下阪比叡やまかひのしもべの三座、加茂住吉の神事に奉仕するものに河内の新座丹波の本座攝津の法成寺座、大神宮の神事に奉仕するものには伊勢の和屋勝田主同わやかつたぬしどうの三座、春日の神

事に従事するものに寶生・觀世・金剛・今春の四座があつたが、永和の頃(二〇三五—二〇三八)に至り、今熊野の猿樂の時、觀世座の猿樂法師觀阿彌(一九九三—二〇四四)始めて將軍足利義滿の前に此の技を演じて大に値遇を得、還俗して三郎太夫清次と名を改め、其の子世阿彌(二〇二三)も亦義滿の値遇を得て元清と稱した。この觀世父子、猿樂の舞が田樂の能に壓倒せられて衰微の境涯にあるを慨き、憤然起つて猿樂の改善を圖り、在來主として演じたる滑稽の技を捨て、田樂の能とひとしく材料を内外古今の事實または傳説に採り、田樂の能を始め其頃行はれてゐたあらゆる歌舞の類を巧に折衷して舞ひぶりを定め、幾多の新曲を作り、樂器を改め、曲節も舞容も樂器も全然面目を一新したものを拵へあげた。これが田樂の能に反抗して出でた猿樂の能の起源である。最初はこの猿樂の能も田樂の能と對立の姿であつたが、寛正五年(一一二四)四日興行の糺河原勸進猿樂の時には、田樂法師は唯祇候したのみで、その技を演せなかつたといはれてゐる。かの文安元年に田樂の能のあつた時から、僅に二十年ばかりの事である。爾來田樂の能はひどく廢れて、つひには春日・日光等の大社にその趣を存するのみとなり、猿樂の能は恰も朝廷に雅樂のあるが如く、武家の式樂として賞讃せらるゝに至つた。是は猿樂の能に從事するもの、觀世・金剛・今春の四座に喜多を加へたもの、猿樂といふ。今の五流といふは、この寶生・觀世・金剛・今春の四座に喜多を加へたもので、喜多は後に出來たのである。その他、大社に奉仕して舊猿樂のみに従事してゐたものどもは、全く聞こえないやうになつてしまつた。

猿樂の能も田樂の能と對立して行はれた當時こそ、猿樂の能・田樂の能と區別して呼ばれる必要もあつたが、田樂の能の廢れるに及んでは、その必要がなくなつたので、單に能とのみ呼ばれることゝなつた。能樂といふのは明治になつてからの名稱である。江戸時代にはお能と呼ばれた。こゝに謠曲と題するものは、即ちこの猿樂の能に用ひられた歌曲の謂ひである。これも昔は單にうたひとのみいうてゐた。吾人はこゝに能の起源發達を略述し來つたが、舞としての能は吾人の深く携はるべき範圍でない、吾人はたゞうたひとしての能即ち謠曲の文學的方面を問はうとするのである。

猿樂の能が材料を史的事實または傳記等に採つた事は上にいうたが、その史的事實といふのも嚴格なる意味での史蹟でないのは勿論である。史的事實を幾分か詩化し傳説化したるものが多い。今日普通に行はれるものでも内外二百有餘番の謠

曲、ましてや『能之圖式』『翁草』所載の目録に見えてゐる如き千二百番の謠曲、これを一吟味してその材料しらべをせん事は吾人の今よくすべき所ではないが、大體をいへば『古事記』や『日本書紀』などから採つた神話もの、『源氏』『伊勢』『大和』等の物語、『萬葉』『古今』等の歌集から採つた戀愛、受苦しくは和歌の傳説に關する優にやさしきもの、『平家物語』『源平盛衰記』『義經記』『曾我物語』などから採つた勇壯殺伐なるもの、風土記または『今昔物語』等から採つた傳説的のもの、巷談俗説に基くもの、寺社の縁記由來に基くものなどである。その外支那の故事などもあり、當時の社會を反映せるものもあれど、多分は平安朝時代と鎌倉時代を舞臺とするもので、殊に前者に於いては小野小町、後者に於いては義經と曾我兄弟との事蹟が多い。和歌に關する傳説を材料としたものなどには、たゞ一首の歌を本として一曲を拵へあげたのさへある。『萬葉集』のかみつけぬ佐野の舟橋とりはなし親はさくれどわはさかれがへから「船橋」を作り、「後撰集』の

としふれば我が黒髪も白川のみづはぐむまで老いにけるかな

から「檜垣」を作り出した如き例はそれである。謠曲の數は多いとはいへ、いかに謠曲

の作者が詩材を見出し、或は如何なる形式であらうか、結構や脚色はどんなであつたか。その形式は劇詩としては未だしいところがある。劇詩の形式としては、その詞章のすべては、曲中の人物の口から發する對話、獨白乃至は歌謠でなければならぬのに、謠曲には作者の批評、詠歎、或は叙景叙事までも加はつてゐる。殊に吾人をして異様に感せしめる事は、作者の批評詠歎を曲中の人物の口からいさせることである。これは多分單調に流れることを防ぐ手段から來たものとは想像されるが、謠曲以外には殆ど全く見られないやり方である。これらを見ても謠曲が純然たる劇詩でないことは明かである。されば單なる叙事詩かといへば、叙事詩としてはかの對話、獨白、歌謠の如きは必ずしも曲中の人物の口から直接にいせずとも、間接にも描寫するのであるが、謠曲では必ず直接にいさせる。これが叙事詩とも違ふのである。つまりは叙事詩から一步を進めて劇詩に近づいたものともいへうか。

曲中の人物には勿論男あり、女あり、老若貴賤僧俗があつて、實に千差萬別ではあるが、これを分つてシテ、ワキ、ツレ、トモの數種としてゐる。シテとは曲中の主人公をいひ、ワキはシテを助けて活動させる人物即ち客ともいふべきもの、ツレはシテもしくはワキに附屬して働くものをいふのである。シテに附隨するをシテヅレといひ、ワ

キに附隨するをワキヅレ又はツレワキといふ。ツレの二人以上ある時は立衆たちじゆうといひ、ツレ以外更に價値の少ない人物をばトモといひ、子供の扮する人物をば子方こかたといふ。その外、能の種類によつては狂言師のつとめる役もある。それが、後にいふ複式能の中間を補綴する爲に出るものであると、間の狂言まのきげんといふ。併し、狂言師のつとめる役は、その間たると然らざるとを問はず、一曲の脚色にはさまでの關係があるのではなく、只僅に結構の上に幾分の相違があるのみである。それ故、狂言師の口にする詞章は大抵は略して、しかく（云々）とのみ書いてあるが常である。

人物の登場する順序は必ずしも一定してゐない。シテが先づ登場して、ワキが之に次ぐことがあり、ワキが最初に現はれて、シテが後に出ることもある。ワキは一曲の半ばで退場することは殆ど無いが、シテは途中で退場することがある。シテが一旦退場すると、次には必ず服装を變へて登場する。これを區別する爲に、前なるを前ジテ、後なるを後ジテといふ。前ジテ後ジテは別人なることもあれば、同一人なることもある。シテに前後の區別ある場合には、服装を改める爲に多少の時間がかかるので、自然舞臺面に空虚が出来る。この空虚を填める爲に出るのが、かの間の狂言師である。間の狂言は只一曲の筋を通譯俗解して語るにすぎない。それ故この間の狂言たる、謡曲や能樂に對する趣味の乏しいものにとつては多少の必要をも感ずるであらうが、一曲の脚色からいうて蛇足たることは勿論である。能の舞臺に幕を用ひるものであつたならば、この間の狂言といふものは全く無かつたらうと想はれる。とにかく、この間を境として、後ジテの登場によつて、局面は全く一變する。前後はおのづから二場に分れる。これがシテの一曲の終るまで退場することなきものに比べて、結構の上では勿論、脚色の上でも複雑に且つ變化あるものとする。そこで、これを單式複式といつて、區別するものもあるのである。さはれ單式複式といつても、兩者を比較した上での名目で、大體から見ても、謡曲といふものは結構の簡單なるもので變化に乏しいことが察せられるであらう。

さればその脚色の如きも亦至極單純なもので、數多の謡曲も殆ど所謂千篇一律と
いうてよい。まづ一個の旅僧があつて、旅路に行きくれて、とある一軒家に宿る。そ
この主人公といふのは、其處に何やら縁故のある故人であるが、娑婆の妄執に囚はれ
て中有に迷うてゐたのが假りに姿をあらはしてゐる、つまり一個の幽靈である。旅
僧はそれを幽靈とは知らないで、その故人の事業や最期の狀を聞いて感慨のあまり
に回向をする。やがてその主人公が引込むと、次には故人が昔あつた時の姿となつ

て立ちあらはれ、昔のまゝの事業や最期のさまをして見せる。かくて、長の間浮ぶ瀬のなかつた亡霊も、回向の力によつて成佛する事が出来たといふに終る。これを「田村」についていふならば、東國方の僧が都見物に上つて、清水寺に參詣し、今を盛りの櫻に見とれてゐる。そこへ田村丸の靈が花守の童子となつて現はれ、清水寺の由來や觀音の功德を説く。旅僧は頻りに感心して、花守を只人ではあるまいというて名を尋ねる。花守はそれには答へもせで、わがゆく方を見よといふまゝ、内陣の中へ消えてしまふ。旅僧はますます感心して觀音經を讀みあげる。程なく田村丸が現はれて、鈴鹿山の賊を平げた時のさまを見せ、これも偏に觀音の佛力であつたと語る。これを忠度について見ると、藤原俊成に仕へた某といふもの僧となつて西國を行脚し、須磨に到つて一人の老人に逢ふ。さまざまの問答の末に、一夜の宿をからうといふ。老人はこの花の陰ほどよい宿はあるまいというて、花の木かげに宿らんことを勧め、行き暮れて木の下かげを宿とせば、花や今宵のあるじならましといへる歌を唱し、その作者忠度の墓をさして一遍の回向を頼む。僧は讀經中老人の喜ぶさまを見て、怪んで尋ねると、御僧に弔はれようが爲に來たれる由を告げ、なほ夢中の告をも待ち給へというて消えてしまふ。暫くすると忠度は昔の姿と成つて立ちあらはれ、俊成が

「千載集」を撰んだ折に我歌を讀人不知として入れられたことを驚き、俊成の子の定家に作者の名を入れるように傳へてくれよというて、昔の合戦の物語をする。一二の例をあげて見れば、まづざつとかうである。その曲の種類によつて、曲中の人物と事件とに多少の出入ある事は勿論であるが、大體の脚色に至つては殆ど同一摸型を出でない。少くとも、謠曲中の重なるものゝ、その大多數とは、この模型によつて脚色されてゐるのである。

謠曲の材料には史的事實もあり、傳説もあり、勇壯殺伐なるもの、優美なるもの、その外さまざまのものゝある事は上に述べたが、その材料の如何に拘らず謠曲の殆ど全體を通じて、法力の廣大普遍なる、悉皆のものによつて成佛するといふ一事が、根本思想と成つてゐる。一首の和歌も佛法の眞義にかなひ、一句の連歌も菩薩の因縁に侍るべしと信じた世の中に、謠曲の根本思想として佛教思想が横溢すればとて、毫も怪しむには當らない。朝に千軍萬馬の間に馳突したる英雄も、ともすれば夕をも待たで一杯の土と成る。昨は幾多の生靈を屠り、今日は親愛なる骨肉を失ふ。かゝる亂世にあるもの、衷心人生を顧る時、誰れか心の寂しきと身の罪とを想はざるべき。かれらは能を見、謠をきいて、執着迷妄嫉妬邪淫殺生慳貪瞋恚ありとあらゆる罪業を

も廣大普遍なる法力によつて救はれ、解脱成佛するを見て、その趣味を満足さすると
 いふよりも、いかにその胸中の苦悶を慰めたことであらうぞ。管に人間が法力で成
 佛するばかりでなく、柳の幽霊でも松の精でも、およそありとあらゆる非情無心の
 のまでも成佛するのを見ては、かれらは如何に心中の満足を感じたであらうぞ。蓋
 し、一切衆生草木國土悉皆成佛とは、かれ等の常に耳にするところであるが、まのあた
 り之を能で見たり謠で聞いたりしては、今さらに法力の廣大なるに心を動かし、興味
 を感じたことであらう。實に謠曲に佛教思想のあらはれてゐる事は想像の外で、謠
 曲は最初から佛教の信仰を起させ布教の一助ともする爲に作られたのではないか
 と思はれる程である。就中、この一切衆生草木國土悉皆成佛の思想の甚深に現はれ
 てゐることは、從來の文學にも曾て見たことのない特色である。鎌倉時代の文學で
 も『平家物語』や『方丈記』に見えてゐるのは、たゞ現世を泡沫夢幻に比して作者の厭世
 觀を洩らしてゐるに過ぎない。平安時代の文學でも、隨分法力の廣大なるをば説い
 てゐるが、單に現世の果報を云爲するに止まつて、更に當來の解脱得道には説き及ば
 なかつたのである。謠曲でも世話物では現世の利益をいはないでもないが、主とし
 て法力によつて當來の救はるべきことをいふのは、我が文學にあらはれたる佛教思
 想としては、正に謠曲が破天荒であるといはねばならぬ。もしその和歌の體を説き、
 神の靈驗を説いたものもあるも、その根本の思想に至つては、更に佛力を説くのと寸毫
 も異ならぬのである。吾人は謠曲にあらはれたる佛教思想を見て、もろくの罪惡
 のかぎりを盡して現世に見離されたる亂世の將士が、せめては來世になりとも救は
 れたいと希ふ心の響をきく心もちのするものである。

謠曲の文章は語る部分と謠ふ部分とより成る。語る部分は俗談平語を以て書き
 あらはしたる散文で、さして評すべき特色を認めない。謠ふ部分は多く七五の調か
 ら成る韻文で、佳句麗語に富み、縁語かけ詞に富む。而もその佳句麗語は、いづれも和
 歌朗詠、白氏文集、文選、伊勢、源氏、平家等の物語に見えたる成句成語で、作者の獨
 創にかゝるものは少い。もし謠曲の文章からは是等の成句成語を除き去るならば、殆
 ど謠曲の文章は無いといつてもよい。故に、吾人は謠曲の文章に何等創作の技倆を
 認めることは出來ないが、その寸錦尺繡を補綴する巧に於いては驚かざるを得ぬ。
 殊に縁語かけ詞を用ひて、寸分の隙間なく一句一句と運び行くところ、宛轉滑脱さな
 がら盤上に珠を轉ばす如く、その巧妙は殆ど筆舌に絶する。想ふに、古人の佳句麗語
 をとりて我物とするは、文學衰微の時代に於いて常に見るところ、『方丈記』『平家物語』

『盛衰記』の如き傑作と稱せられるものに於いても既に多少その痕跡の認められ、『徒然草』『太平記』に於いても亦これを見る。就中和歌の方面では、本歌とりと稱して、公然と古人の作を換骨奪胎することさへ行はれたのである。さすれば、補綴釘鉋は鎌倉以來の常習、謠曲に至つてその巧を極めたともいはうか。さばれ、補綴釘鉋は飽くまでも補綴釘鉋である、いかに巧妙を極めたとして文學として誇るべき價値は無い。ましてや、謠曲には補綴釘鉋を恣にするあまり、文章としては殆ど無意義のものまでも佳句麗語とだにいへば補綴したところが有り、剩へ縁語かけ詞の濫用から文理の朦朧となつたところさへあるのである。これについて或人は次の如くいふ。謠曲は謠ひものである、人の目に見せて一語一句を逐うてその深意を味はせようとするのではない、耳に聽かせて快感を起させようとするのである。大體の意味に於いて通じさへすれば事は足るのである、その一部分に多少曖昧模糊たるところがあつても、聽くものが恍惚として快感を起せば、それでよいのである。謠曲は、むしろその曖昧模糊たるところに、眞に面白味はあるではないかと。これも一應尤ないひ方である。されども、これは謠曲を絶對無上によいものとして、辯護したいひ方ではあるまいか。文理明晰にして而も聽くもの恍惚として我を忘れるものに比べていづれぞ

といは、論者はなほそれでもといふまい。吾人は謠曲の文を見てその補綴釘鉋の妙に感じ、縁語かけ詞の巧に驚き、更に之を耳にして快感を覺ゆるものである。中にも道行の文と叙景の文とに、一段その巧妙の及ぶべからざるものあり、次第の語句に寸鐵よく俳句を凌ぐものあるを認める。而も謠曲は文學として之を見る時は、補綴釘鉋に成つて補綴釘鉋に害せられ、縁語かけ詞に成つて縁語かけ詞に害はれたものといふに躊躇せぬ。もしそれ、文學極衰の時に於いてこの文章あるを多とすといふものあらば、吾人といへども賛同の意を表するに當つて決して人後に落ちるものではない。

謠曲の分類については、或は材料の上より、或は組織の上より、或は性質の上より、或は目的の上より、或は登場人物の如何より、要するに種々の方面からする事が出来るであらう。從來能役者の社會などでは、神に關するものを神能と呼び、合戦を仕組んだものを修羅物といひ、その中でも戦に勝つたのをば特に勝修羅と稱し、シテに女の出るものを鬘もの又は女ものといひ、五六番組合はせて演ずる場合には多く三番目に据ゑられるといふので三番ものとも呼び、またワキの所作の多くて殆どシテの如き位置にあるものをば脇働といひ、翁の次に演せられるを脇能といひ、現在の事實と

して現はされるものを現在ものといひ、祝賀の意を叙べたものを祝言ものと唱へ、その外幽霊物・天狗物・釋教物・老女物・狂女物・怨霊物・源氏物・會我物など種々雑多の名目をつけて分類し、釋惠海のごとき神祇・釋教・戀・無情・慶賀・哀傷・述懐など和歌の分類に倣うたものもある。近頃になつては、材料の上より分類して神話・英雄譚・技術傳説・宗教傳説・童話及び世話の六種とし、目的の上より分類して舞祝賀・神社の由來・法力・武勇・恩愛・忠孝の七種とするもある。こゝには最も普通に行はれるところの名目に随つて、左の四類に分ける。

一 神事。廣く神事に關するもの。これを内容の上から細分すれば、左の二種となる。

(イ) 普通の神事ものにて、記紀等の古書に據つて神秘的事蹟を叙べたもの。大蛇・大社・玉井等。

(ロ) 神が假りに人間と現はれて神徳を叙べ、神社の由來などを語るもの。白鬚龍田・三輪・竹生島等。

二 祝言。天下泰平・國土安穩の狀を叙べて祝賀の意を表するもの。これも細分すると左の三種となる。

(イ) 松竹鶴龜等動物に托して祝ふもの。高砂・老松・鶴龜等。
(ロ) 名所又は故事に因みて祝ふもの。住吉・難波・氷室・養老・岩船等。
(ハ) 神仙山伏等に寄せて祝ふもの。金札弓八幡等。

三 幽霊。幽霊を骨子として、法力によつて得道成佛することを現はすものにて、人類のみに限らず所謂草木・國土有情・非情皆含まる。これを細分すると左の六種となる。

(イ) 武士に關するもの。幽霊ものゝ大部分は之に屬するもので、修羅の巷に馳逐せる武士も娑婆の妄執長く拂ひがたく、三界無安中有にさまようて解脱し得なかつたものが、佛者の回向によつて成佛する事をあらはす。敦盛・朝長・八島兼平・知章・實盛等、殆ど枚舉に遑がない。

(ロ) 歌人文人に關するもの。定家・江口志賀・忠度・白樂天等。これに屬するものも亦多い。

(ハ) 僧侶行者等に關するもの。雨月俊寛・東岸居士等。
(ニ) 賤山賤などに關するもの。松風・求塚・鐵輪・鶴飼等。

(ホ) 鬼神天狗等に關するもの。紅葉狩・安達原鞍馬・天狗・善界大會等。

(へ) 草木蟲類等に關するもの。遊行柳墨染櫻胡蝶杜若芭蕉等。

四 人事 普通の人事運命を叙し、俗説巷談等に基いて脚色したもの。男女間の關係、親子の愛情、主従の再會、敵討等を含む。これ亦四種に細分される。

(イ) 復讐を骨子とするもの。夜討會我望月放下僧春榮景清等。

(ロ) 武士に關係するもの。橋辨慶七騎落大江山仲光鉢木等。

(ハ) 物狂ひを骨子とするもの。これが人事物での大部分を占む。櫻川隅田川、富士太鼓木賊高野物狂等。

(ニ) 歌人舞妓に關するもの。草紙洗小町通小町祇王吉野靜卷絹等。

まづ大略かくの如くである。科學的分類としては、未だしい點も少からぬやうであるが、大體の種類は之れでも察せられるであらう。或はこれを以て發達の順序に擬するものもあるやうであるが、吾人は與みせぬ。一寸と考へるところでは、猿樂の大夫はもと大社の神事に奉仕したものであるから、能としても神事に關するものが最初に出來たかと思はれるが、將軍義滿に仕へた觀世父子によつて能が組織されたとすると、間もなく武家の式樂となつた事から見ても、祝言能が最初のものでなければならぬ。併しながら、神事能は結構の簡單なるものゝ多いのから察すると、さまで後の作とも思へない。大體は祝言神事曲並に人事の中の時代のものといふは世話ものといふ順に發達したものであらうか。

謠曲の作者については、『内外謠作者考』といふ書物によると、清次元清などが大部分を作つたものとしてあるが、詳細なる見證がなかつたので、從來是等は多分作曲者の意であらう、その思想の上より見ても、その文章用語の上より見ても、はたまた其の他の文學の大部分が僧侶の手に成つた當時の状態の上より見ても、作文者は他にあつたのであらう、猿樂太夫の輩の手に成つたものとは信ずる事が出來ない、五山の文學僧などの手ずさびにでも成つたのであらうかと推斷されてゐたのである。然るに、近年に至つて『世阿彌十六部集』とて世阿彌の手になつた著書の發見によつて、それが全くいりほがなる臆説で、作文者も矢張り清次や元清、殊に元清の手によつて今日行はれてゐる謠曲の大部分は出來たものであるといふことが知られた。即ち清次や元清は作文もし、作曲もし、舞振りをも工夫して、大成したのでなつた。勿論、現存してゐる、數百千番の謠曲これが悉く一時に出來たものでないことは明かである。室町から江戸の初へかけて漸次に出來たのが、かくの如く數百千番の多數にも達したのであらう。現に芳野詣高野詣明智柴田北條の五番は太閤御慰能として朝鮮陣の時

肥前名護屋の陣中にて出来たといはれ、羽衣は家康が駿府にある時に出来たといはれるのである。されど謡曲は再三いうた如く、殆ど千篇一律である、その中で二三十番を除けば、他は摸型によつて作られたに過ぎない。作の上に作者の個性が現はれてゐるとしも思へぬものに向つて、作者の詮索はさまでの必要を感じない。吾人は唯これまでの文學史に掲げられて來た推斷は、『猿樂傳記』などの後世爲にする所ある書によつて誤られてゐたことを告白するに止めておく。

吾人はこゝに謡曲を説くに當つて、その材料をいひ、その結構脚色を叙し、思想文章分類、作者にまでも及んだ。謡曲の文學的價值如何は更に讀者の問はうとするとこゝろであらう。されど、そも亦既に結構脚色を叙し、思想文章等を説くに當つていひ及ぼしたこともあれば、今更に詳説する必要もあるまいと信ずる。人或は謡曲を以て無上に結構なものとなし、頻りに有りがたがるものあれど、吾人は採らぬ。况や謡曲の多くは摸型によりて鑄造されたる結晶文學たるに於いてをやである。吾人はその文學極衰の時代に於いて、豫期以上のものを得たるを多とし、後世の文學に及ぼしたる影響の大なるものあるを多とするのである。謡曲そのものは早く結晶して、つひに何等の發展なしに終はつたとはいへ、江戸時代の文學の花たる浄瑠璃もこれあつた。然し、吾人は之に代るべきものを探して見れば、今もなほ一部の社會に於いては、是れに鑑賞せられつゝあるを見ては、文學的以外に別に大なる價值のあることを想はねばならぬ。而も吾人は敢ていふ、文學としては歴史的價值あるを認めるのみである。

謡曲の貴族的に眞面目なるに對して、平民的にして滑稽なるを狂言といふ。元來かの舊猿樂は滑稽を主したものであつたが、それが猿樂の能となつて全く滑稽の分子を失つた。そこで狂言といふことが新に始まつて、猿樂といふ名は新しい猿樂に譲り、昔からの滑稽を主としたものが、狂言といふ新しい名を得たのである。本來の系統からいへば、猿樂の名は狂言の専有すべきものであつたが、名も位地も新猿樂の能に奪はれて、狂言は能の附庸物の如くなつた。能樂の演せられるに當つては、必ず之に伴うて狂言も演せられるのではあるが、能樂の舞臺面の効果を大ならしめる爲に行はれる觀がある。狂言は能樂を俟つて始めて存在するか、如く見える。狂言の藝術としての位地や眞に憐むべきである。文學としての價值や如何に。狂言の作者の不明なることは、謡曲の作者の不明なるよりも更に甚だしい。狂言の祖先ともいふべき舊猿樂の昔に溯れば、當時は一定の脚本があるのでなく、その

をり／＼の場あたり（おまけに貧欲で癡病で無理の多い、あらゆる悪徳缺點をもつてゐる小人である。謠曲のうつつ僧侶は所謂大徳智識、狂言のうつつ法師は非學非修の賣僧。祈禱の効驗いやちこに天魔破句をも即座に降伏させるは謠曲に見える修驗者、猿の泣聲をしたり犬の眞似したりするは狂言に出るえせ山伏。鬼神天狗もかれでは強く、これでは弱い。要するに、謠曲と狂言とは好箇の對照である。兩々前後して之を舞臺に上せば、肩の凝る能樂、頤を解く狂言。一は他を得て舞臺面の効果大なるべく、他は一を俟つていよ／＼價值を増すであらう。而して踏襲摸倣を事として千篇一律なることは、謠曲も狂言も共に異なるところが無いのである。然るに、能樂のみ獨り重せられて、狂言の附庸視せらるゝは如何に。狂言よく人情の弱點を捉へて誇張過大に脚色し、人の頤を解かしめるものもあるも、多くは皮相淺薄、いまだ識者をして大に笑はしめるの價值あるものが無いのに基因するのであらうか。そも／＼また我が民俗の嚴格を尊ぶ滑稽の趣味を解するの餘裕なきが致すのであらうか。いはく二者共に然り。

をり／＼の場あたりに想ひついた茶番にすぎなかつた。さすれば、その系統を引いてゐる狂言も、急に最初から一定した脚本を作つて演じたものとは思へない。最初は舊猿樂でしたやうに、當意即妙の座興的に演じたものが、出來榮えのよかつたものは自然次回にも所望されるといふやうなことから、つひには豫め工夫を凝らし仕方もも考へて、或は狂言師自身これを筆にも書きとゞめ、或は文筆に親しめる知人などにも依頼して記し置いたものが、今日見るやうなものとなつたのであらう。今日傳はるものは殆ど三百番近くになつてゐる。狂言師に大藏流、鷲流、和泉流の三派があつて、その脚本に多少の異同はあるが、所謂大同小異といふもので、殆ど同じといつてもよい。但し、和泉流は江戸時代の初に至つて分派したものだといはれる。

謠曲の文章は古書の佳句麗語を補綴して莊麗を極めてゐるが、狂言の文章は當時の俗語そのまゝを何の飾りもなしに書きあらはしてゐる。一方を貴族的といへば一方は平民的といふべく、一方を保守的といへば一方を進歩的ともいはれよう。その内容とても、前者が史的事實を採つて眞面目に描くかと思れば、後者は社會の出來事なる喧嘩や失策話を滑稽的にあらはす。謠曲に現はれて來る武士は智仁勇を兼備した立派な豪傑である、狂言に出て來る大名は無智文盲で權威もなく禮儀もなく、おまけに貧欲で癡病で無理の多い、あらゆる悪徳缺點をもつてゐる小人である。謠曲のうつつ僧侶は所謂大徳智識、狂言のうつつ法師は非學非修の賣僧。祈禱の効驗いやちこに天魔破句をも即座に降伏させるは謠曲に見える修驗者、猿の泣聲をしたり犬の眞似したりするは狂言に出るえせ山伏。鬼神天狗もかれでは強く、これでは弱い。要するに、謠曲と狂言とは好箇の對照である。兩々前後して之を舞臺に上せば、肩の凝る能樂、頤を解く狂言。一は他を得て舞臺面の効果大なるべく、他は一を俟つていよ／＼價值を増すであらう。而して踏襲摸倣を事として千篇一律なることは、謠曲も狂言も共に異なるところが無いのである。然るに、能樂のみ獨り重せられて、狂言の附庸視せらるゝは如何に。狂言よく人情の弱點を捉へて誇張過大に脚色し、人の頤を解かしめるものもあるも、多くは皮相淺薄、いまだ識者をして大に笑はしめるの價值あるものが無いのに基因するのであらうか。そも／＼また我が民俗の嚴格を尊ぶ滑稽の趣味を解するの餘裕なきが致すのであらうか。いはく二者共に然り。

狂言は謠曲と共に武家の式樂となり、發達の徑路を同じくし、随つてまた種類をも同じくするところがある。例によつて之を分類するならば、左の如くにもなるであ

らうか。

一 祝賀的なるもの。これは概していへば國家の安寧を祝し御代の長久を祈るものであるから、形式上平和に終るものが多いが、またさうばかりでもない、これを分つと二種となる。

(イ) 平和に終るもの。松囃子・相合烏帽子・笑祖父・七福神等、頗る多い。
(ロ) 亂筆に終るもの。千町萬町等。

二 神靈的なるもの。鬼神などのこの世界に來りて種々の福利を與へるもの。いまだ祝賀的臭味を脱しない。これを細分すると二種となる。

(イ) 鬼・閻魔に關するもの。鬼の槌首・引朝比奈・鬼の繼子等。
(ロ) 雷神に關するもの。神鳴等。

三 人事的なるもの。これが狂言の大部分を占めて、その要部をなすもの。滑稽もこゝに至つて稍諷刺の意を帶ぶ。これを細分すると七種となる。

(イ) 片輪に關するもの。三人片輪・月見座頭・井礪川上座頭等。
(ロ) 大名に關するもの。鬼争萩大名・墨ぬり・靱猿・蚊相撲等。
(ハ) 僧侶に關するもの。布施坊主・魚說法・泣尼・水汲新發意等。

(ニ) 山伏に關するもの。柿山伏・犬山伏・蟹山伏・彌宜山伏等。
(ホ) 聲取夫婦に關するもの。鶏聲・音曲聲・金岡・泣聲・金法師等。
(ヘ) 遊興に關するもの。茶壺・富士松花・戦若菜・花折等。
(ト) 盜人に關するもの。連歌・盜人・子盜人・瓜盜人等。

四 謠曲的なるもの。眞面目なる謠曲に擬して滑稽趣味をあらはしたるものをいふ。鉢鼓・樂阿彌・二人座頭・通圓等。

かく分類はしたものの、なほ細分すべきものが無いでもない。殊に大名に關するもの、僧侶に關するもの、如きは、それである。今は唯概略に従ふのみ。

狂言は謠曲に比べては幾多の特色に富む。形式の稍劇詩に近いのが一、直ちに當時の世相をうつしたことが二、俗語そのまゝであらしたことが三、平民的なのが四。これその主なるもの。脚色單純、規模狹小、變化に乏しく、異材同工のもの多く、滑稽も諷刺も亦皮相淺薄、これその缺點。吾人は、狂言が文學極衰の時に當つて、よくも我が民俗の滑稽趣味を文學の上にあらはして一個不朽の形式となしたことを喜び、更に江戸時代に於ける演劇の素をなしたことを歡ぶ。而も狂言の文學的價値は歴史的に大なるのであつて、絶對的には猶ほ小なるものであると言はねばならぬ。

第七章 御伽草子

平安時代の末頃から物語の衰微するにつれて、繪巻物として物語の筋をば繪であら
はし、それに短い繪とその文章を添へたものが行はれた。讀んで心を慰める物語文
學が、目で見て娛ませる物語繪ときつたのである。されば、その題目も趣向も殆ど全
く古物語のそれを探つて繪にしたものが多い。その中でも、神佛の功德を叙べた寺
社の縁起が最も多數を占めてゐる。『華嚴縁起』とか『信貴山縁起』とか『北野天神縁
起』、『當麻曼茶羅縁起』、『石山寺縁起』とかいつたやうなものがそれで、いづれも神佛の
靈驗や高僧の奇特を叙べたものである。

これが鎌倉時代は勿論、室町時代となつても上流社會に行はれてゐたことは、今日
残つてゐるものゝ少からぬのでも想像される。されど、繪巻物は文學として見るべ
きものではない、繪には随分名筆の手に成つたものがあるが、繪ときの文章はあまり
に簡單で、且つあまりに幼稚であつた。然るに、この時代の末に至つて、繪ときの文章
が次第に發達して、つひに短篇の物語ものとなつた。世にこれを御伽草子といふ。
御伽草子の今日傳はるもの無慮四十有三篇。中について『鉢かつぎ』、『文正草子』、『小

町草子』、『梵天國』、『小教盛』、『浦島太郎』、『酒類童子』、『物臭太郎』、『淨瑠璃』十二段草子レリのき
島』等が最も有名である。

御伽草子の趣向は皆簡單である。大抵は古傳説や古物語を改作もしくは翻案し
たもので、或は大福長者のめでたい物語、或は繼子いぢめの悲しい話、或は滑稽、或は困
果應報といづれも幼稚なる兒童や世事に疎い人たちの慰みたるに過ぎない。随つ
て、御伽草子には教訓の意を寓してあるものが多い。寺社の縁起ものに佛神の功德
を叙べたのはいはずもあれ、さもないものも何かにつけては神や佛のありがたさを
説く。御伽草子には、

これたゞ長谷はせの觀世の御利生とぞきこえける。今に至るまで、觀音を信じ申せ
ば、あらたに御利生ありと申しつたへ侍りける。この物語をきく人は、常に觀音
の名號を十返づゝ御となへあるべきものなり。南無大慈大悲觀世音菩薩。(鉢
かつぎ)

佛神三寶の加護ありて、百廿年の春秋を送り、御子あまた出できて、七珍萬寶に飽
き充ちて、長生の神となり給ふ。(物臭太郎)
などの類は到るところに見出される。これ恰も能樂の看客が、娑婆の迷執に囚はれ

たる幽霊が法力によつて得道成佛するを見て興味を感じる如く、御伽草子の讀者も神佛の示験が自己の所信に應じて現實されるのを見て満足を覚え、興味を感じたからであらう。文學的趣味の乏しいことは改めて、ふまでもない。

昔にその内容が文學的趣味に乏しいばかりではない、文章も亦單に拙劣なる擬古體である。謠曲の文章は、補綴釘鉋とはいへ佳句麗語に富むものであつた、然るに御伽草子のは單なる摸倣拙なる補綴に過ぎない。その趣向が古傳説や古物語の焼き直しであつても、古語を以てこれを書きあらはさうとするのは容易の業ではない、語彙の非常に豊富な作者でも往々にして襪襪の出勝ちなものである、ましてや無學無定見の作者の手によいものゝ得られう筈がない。御伽草子の文章は正にそれであらうか。古物語中の名句をそのままに採つたかと思ふと、覺束ない俗語が交る、自他を混する、主客を顛倒する、首尾の一致を缺く動詞の活用を謬る、あらゆる缺點が續々として見出される。歌なども頗る拙い、中には意味の通せぬものさへもある。もし採るべき點をいふならば、たゞ句調の流暢といふことのみであらうか。

かく御伽草子は内容も文章も共に貧弱なものである、到底多大なる文學的價値を認めることは出来ない。されど、この貧弱なる文學も、江戸文學の源泉となつたこと

を想ふと、徒に看過することは出来ないのである。江戸時代の淨瑠璃は文學の花である、而もその時代の初期には、文運いまだ盛ならず、新詞曲を創作し得るほどの作者が無かつたので、多くは御伽草子の類をそのまま、淨瑠璃に語つたのである。寛文延寶の頃になつてより、井上播磨が語つた曲目を見るに、『兵庫の築島』『二王の本地』さては『十二段草子』を造りかへた『新十二段』などがあり、山本土佐のには『小敦盛』『鉢かつぎ』『浦島太郎』『酒顛童子』『梵天國』などがあつて、御伽草子を種とせるものが多く見える。近松巢林子の如きさへ、最初に作つたのには御伽草子を粉本とせるものがある。江戸文學の假名草子以下の小説の如きも、亦御伽草子に負ふところの多いことは明かである。かくて、御伽草子は文學そのものとして見る時は、價値の少ないものであるが、文學史の上からいへば大に注意せねばならぬのである。

この歴史的價値に富んだ御伽草子も、その作者は一向明かでない。『酒顛童子』は一名『大江山繪詞』ともいひて、兼好法師の筆のものがあるといふから、遅くとも南北朝の頃に出來たものであるし、『猫の草子』は本文に慶長七年といふ事があるから、徳川初世のものであらうと思はれるが、いづれも分明ではない。

御伽草子の外、またこの時代には古物語の系統を引いてゐる小説もあつた。『鳥部

山物語』岩屋能草紙』轉寢草紙』初瀬物語』嗟峨物語』あを葉の笛物語』付喪神詞』中書王物語』田村の草子』辨慶物語』秋月物語』橋姫物語』等、今日に傳はるものゝみでも二三十種の上に出る。是等の數多き作物も、系統こそは異なれ、御伽草子と大差あるものではなく、寧ろ御伽草子よりも一層擬古的摸倣的のもので、更に見るべき點がない。

第八章 漢文學

鎌倉時代この方荒廢を極めた漢文學は、室町時代に入るに及んで更に甚しくなつた。武人は戰鬪に忙しく、庶民は連年の紛亂凶荒に疲れてゐる、いかで漢文學のみが獨り復興の運に會すべき。後醍醐天皇の如き、一條兼良の如き、將軍義尙の如き、當代にあつては珍らしくも學事に志した方であるけれど、一般には殆ど全く顧みるものがなかつた。戰國の世の中となつては、當時博學と稱せられた公卿の、孟子をすら讀み得ざるものがあつたといはれてゐる。江村專齋の『老人雜話』に、老人、少年の時洛中に四書の素讀教ふる人無之、公家の中山科殿知れりとして、三部を習ひ、孟子に至りて本を人に借し置きたりとして終に教へず、實は知らざる也といふことが見える。當時漢

學の講習が一般にはいかにかり廢れてゐたか、想はれるではないか。

かゝる間にあつて、一縷の命脈を漢學の上に維ぎとめてゐたのは、上にもいうた金澤文庫と下野の足利學校と五山の禪僧とであつた。足利學校はその創設の時代が詳かでない、或は國學の遺制であらうといひ、或は小野篁の私設であるともいふ。從來久しく頽破に委ねてあつたのを、永享の末頃(二〇九九)上杉憲實之を再興し、宋槧の圖書を藏め、學田を寄附しなどして、日本唯一の學校となつたのである。文明(二一三〇)年中に至り、禪僧快元といふもの大に之が振興に力め、爾來禪僧が相ついで之を督することゝなつた。第七世九華の時などには、學徒が三千もあつたといはれる。學問極衰の時に當つて、その貢獻するところの如何に多大であつたかは、之を以ても察すべきである。されど、之を督したものが禪僧であつたとすると、禪僧が學問界に貢獻する所は、更に多大であつたといはねばならぬ。實に京都五山の禪僧は、宛も歐洲中世期の文明が耶蘇教徒によつて維持せられた如く、我が中世期の文明を維持するものであつた。

僧侶は鎌倉幕府創立以來或は祐筆となり、或は顧問となり、或は教授となつて文筆に従事し、人文の發達に資する所があつた。後醍醐帝に於ける玄慧法師の如きはそ

の錚々たるものである。されど、僧侶が眞に學問界就中漢學の攻究に貢獻する所のあつたのは、京都の五山文學の勃興するに至つてからである。五山の文學は正安元年(一九五九)元僧寧一山の渡來を以て始まる。一山の我國に來たのは、元の世宗忽必烈が我國を兼併せんが爲に、勸誘させようとして遣はしたのであつた。それ故、執權北條貞時も最初はこれを疑うて伊豆の修善寺に置いたが、程なく延いて建長寺を主らしめ、尋いで圓覺淨智の二寺に住せしめ、正和二年(一九七三)には更に京の南禪寺に住持たらしめた。一山大に當時の支那文學を鼓吹し、朱子の學風この時から我が學界に傳播するに至つた。一山の會下に虎關と夢窓とがあり、虎關の門下に中巖がある。虎關の著書は數多ある中に『元亨釋書』三十卷、『濟北集』二十卷が最も著はれ、中巖の著書は『東海一漚集』五卷、中について、中正子十篇が最も著はる。一山の學の虎關に傳へたものは、中巖以後更に聞こえなくなつたが、夢窓に傳へたものは、義堂より岐陽に至り、後世長へにその統を垂る。夢窓の會下には義堂の外春屋絶海、天錫、椿庭、芳庭、龍湫等あり、義堂と絶海とが最も有名である。義堂に『空華集』の著があり、絶海に『蕉堅稿』の著がある。義堂は五山の文宗、絶海は詩宗と稱せらる、而も義堂の詩は必ずしも絶海の下にあるものではない。義堂は經術詩文共に得たるものである。義堂の門下岐陽は東福寺の僧夢窓といへるものから、夢窓に傳へた。夢窓は博覽強記にして、文を善くし、中巖と名を齊しうした人で、その著に『早霖集』三卷がある。岐陽の著には『琴川錄』があるが今は傳はらない。不二遺稿二卷はその學を窺ふに足る。而して、岐陽の上にも更に最も注意せねばならぬのは、その和點である。和點の原本は今日傳はらないから、これを詳かにすることは出来ないけれど、後世桂庵の和點は全くこれに基いたものといはれてゐる。かれはこの和點を以て門下の一慶、惟肖等に授けた。惟肖は經史も子集も涉獵せざるものなく、特に文章を以て鳴る。『東海瓊華集』はその文集である。惟肖の門下は、數ある中に、景徐、蘭坡、了庵、桂庵が最も聞えてゐる。景徐の著に『翰林胡蘆集』蘭坡の著に『仙館集』『獨唱集』がある。景徐は文に優れ、蘭坡は詩にまさる。了庵には景徐、蘭坡ほどの文名はないが、永正二年(一一六六)に足利義澄の命によつて明に渡り、翌年の夏、錢塘に於いて王陽明に會した。その時王陽明は了庵の學術を稱したといはれる。或はいふ、了庵は王陽明の學を我國に傳へたものではなからうかと。桂庵亦博學高德、併せて詩文に兼達してゐる。著すところの書、『島陰漁唱』三卷、『島陰漁唱文集』二卷、『島陰雜著』、『南遊集』外に、『桂庵家法和點』一卷がある。いづれも桂庵が文思の豊富なると學術識見の深遠卓拔なるを示すものである。されど、こ

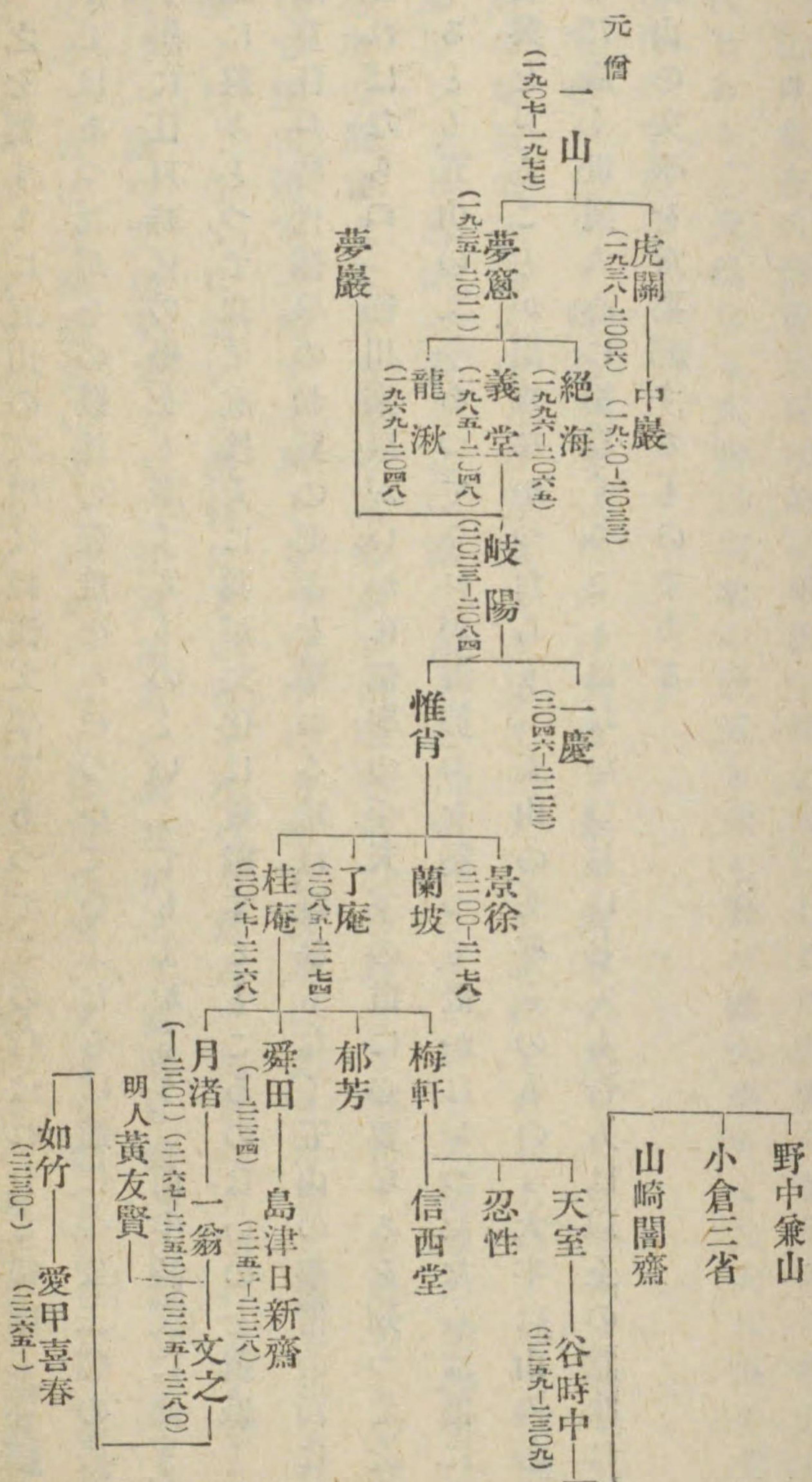
れまでとても詩文の堪能なるものには既に義堂絶海・蘭坡の徒があり、明人をしてその技倆に吃驚せしめ、經術識見に虎關・岐陽の輩があり、仰いで一世の宗師とするに足る。されども、彼等は皆いづれも山内の徒、世間とは全く没交渉であつた。彼等は鴻才碩儒であるにしても、彼等自身が獨り鴻才碩儒であるので、世の文化の上には直接何の關する所はないのであつた。桂庵に至つては然らず、その詩文も經術も識見も學徳も我が學界の俊秀なる一人たることはいはずもあれ、それが直に世の文化に關係したのである。漢文學をして世間と交渉する所あらしめたのである。

桂庵(二〇八七—二一六八)は山口の人、幼少にして京に上り、南禪寺の惟肖に師事して『四書新註』を讀む。嘉吉二年歳十六で剃髮して僧となる。長ずるに及んで、景徐了庵・蘭坡等と交り、互に砥礪刻苦して怠らず、内典外典皆通じ、位禪師に至る。應仁元年、後土御門天皇の勅を奉じて明に至り、憲宗皇帝に見え、又蘇州杭州の間に遊び、諸儒を訪うて程朱の新義を究め、居ること七年にして文明五年に歸朝した。桂庵大にその學を弘めようとすれば、時は恰も應仁の後わづかに數年、山名宗全・細川勝元は偶、此の年に死んでしまつたが、東西兩軍はなほ相持して散せない。こゝに於いてか、桂庵は石見に赴き、鎮西に遊歴し、終に鹿兒島に客死した。鹿兒島に居たのが最も長い。その間、高津氏の爲に盛んに宋學を講じた。大學章句をも刊行した。國字を以て四書の朱註を解き、和點の法をも述べた。その和點が『桂庵家法和點』といふのである。その新刊の『大學』といひ、和點といひ、朱學を世に導く上に於いて偉大の功果があつたことは、新刊の『大學』の如き程なく改版したといふのでも明瞭である。されど、桂庵の到るところに數多の門下を得て、朱學を移植した功績は更に大きい。

桂庵が石見にあつた時に南村梅軒はその學を受けた。門弟子の中の最も早きものである。之に次いで筑前の萬松山主書中、筑後の源東谷、肥後の白石兵部、源基徳、源生徳、隈部忠直及び月舟・玄叢の二僧が最も名のあるものである。薩摩は桂庵が後半生を送つた所として、ひとり日隅薩三州の士人が業を受けたばかりではない、四方の學徒千里を遠しとせずして來聚した。その重なる者をいへば、島津氏の一門に勝久・國久・忠廉・忠朝があり、重臣に新納忠親・伊知地季貞・鳥取政秀がある。緇徒の輩には、薩の市來龍雲寺の玉洞串木野冠岳寺の宗壽・伊集院廣濟寺の湖月・妙圓寺の愚丘・加世田保泉寺の舜田・楫宿大圓寺の説溪・山川正龍寺の郁芳・鹿兒島福昌寺の安琮・安養院の文傍・桂樹院の玄章があり、日向の飢肥安國寺の月渚・大隅の安國寺の雲夢・吉田長隆寺の耕月・了潭寺の悅翁がある。その外、諸國から遊學したものを擧げると、越後の長尾某が

あり、近江の佐々木永春があり、肥後の雪溪、肥前の自擇、筑前の大年、京都の巢松、天用、美濃の玄勤、上野の釣雪等、殆ど枚擧に違がない。而して、是等の英俊が學業成就して郷國に歸るや、大に師承の學を唱へた。こゝに於いてか、宋儒性理の學は漸次に四海に擴布して一大潛勢力を養ひ、慶長の末に至り、積年の騷亂一たび平ぐに及んで、俄然として勃興した。溯つて考へると、その功績は皆桂庵に歸せなければならぬ。伊知地季安が「國朝宋學の世に弘まる、亦首に桂庵よりす」というたのも、いはれの無い言ではない。

是等諸人の中、舜田の門に島津日新齋あり、月渚の門に一翁、一翁の門に文之、文之の門に如竹、如竹の門に愛甲喜春がある。舜田、月渚、郁芳は日薩の儒學を鼓吹するに於いては最も功のあつたもの、かの藤原惺窩の如きは直接その學を師承したのではないが、桂庵の『家法和點』文之の『四書新註和訓』を得て謄寫し、さては日新齋が明國から求めた朱學の書を得て發明する所のあつたといはれるのを見ると、間接には彼の學を大成するに與つて功があつたといはねばならぬ。南村梅軒は南學の祖と稱せられたもの、土佐の吉良宣經に聘せられて海南に赴いた。その門下に忍性、信西堂、天室は世に三史と稱せらる。天室の門に谷時中あり、時中の門に野中兼山、小倉三省、山崎闇齋は出たのである。以上叙べ來つたところ、その重なるもののみを擧げて、その傳統を表で示すと、大略次ぎの如くである。



之を要するに、五山の文學は純漢文學であつて、その行はれたる範圍も亦極めて狭小ではあつたが、その發達の程度のみについていふならば、遙に平安王朝の盛時を凌ぎ、優に江戸時代の壘をも摩するものというてもよからう。前半詩文に傾き、後半訓詁に終り、とつて以て直接大に我が文化に貢獻するところのないのを遺憾とする。遮莫、江戸時代儒學の勃興の起源を尋ねる時は、疑ひもなく五山の學僧の功に歸せなければならぬ。徳川家康がいかに儒學の平天下の道に必要なを知つて之を獎勵するとも、五山の文學あつてこれが潜勢力を養つて置かなかつたならば、俄に儒學の勃興を見ることが出来なかつたらう。五山の文學そのもの、大半は山内の學で、いまだ廣く世道人心に影響することはなかつたにしても、吾人は以上の意味に於いて五山の文學を重要視するものである。

第六編 江戸時代

第一章 總論

江戸幕府の治世三百年間は、明治の世を外にしては、文運の發展その極に達した時代である。燦然たる文物は空前の隆盛を致し、我が國文學もまた大に其の光彩を發したのである。

文學がしかく隆昌を來したのは、素より泰平安寧の然らしむる所とはいへ、また幕府の建設者家康その人の方寸より出でたことを忘れてはならぬ。即ち學問の用を大なりとし、治國の要を之に歸せんとしたのである。かくて、儒學の獎勵となり、法度典章の制定となり、古書の蒐集及び出版事業の勃興となつた。家康のこの意は幸にして歴代將軍の體する所となつた中にも綱吉將軍の如きは自ら儒を以て任ずるに至つた。こゝに於いて、諸侯はその旨を承けて、進んで文教のために力を盡した。されば、一國の文柄を掌るもの、江戸湯島に聖堂があり、諸藩に藩學の設立があり、一般庶民のためには都鄙共に寺小屋があつて、日用必須の文字を知らしめた。平安朝の昔、京に大學があり、諸國に國學があつたといへ、そは搢紳の徒の壟斷する所、庶民の如き

は遂に教化の一端にだに與る事が出来なかつた。然るに、今や教育機關の施設略、その途を得、智識は普く下流社會にまで及ばうとする。我が江戸時代文學が、全國民の鑑賞する所となつたのは此の故である。これを以て、かの平安朝文學が宮廷文學たるに止まれるに比すれば、その差殆ど雲泥の稱に値するのである。

印刷術の發達はこの教育の弘布智識の普及と兩々相俟つて起つた。家康の典籍の蒐集書籍の翻刻は、漸く出版事業の隆盛を促し、幕府の修史となり、また徳川光圀が彰考館の修史の擧となつた。加賀侯前田綱紀が孜々として倦まなかつた古書の蒐集、その眞意は亦こゝにあつたやうであるが、惜むらくは事行はるゝに至らなかつた。民間の書籍刊行は年一年その多きを加へゆきて、かの平安朝に於ける雄篇傑作も徒に轉々傳寫を以て行はれたと同一日の言ではない。

かくの如く、文化は一般に及ぼし、文學の鑑賞は上下に亘るとはいへど、當代の社會組織は我が文學をして自ら二大流派を生せしめた。蓋し江戸時代は我國に於いて階級制度の最も整頓せる時代である。身を賤隸より起して關白を贏ち得たるその人も、戰國時代の一度終るや、刀狩の名の下に階級制度を立てようとした。徳川幕府は其の方針を繼承擴充して、遂に一大社會組織を構成するに至つたのである。即ち

公卿あり、之に次ぐに武士あり、武士の間にもまた幾多の階級を生じ、大名に譜代、外様、の別、幕府直參の士に旗本、御家人の別がある。第三位に神主、僧侶、第四に百姓、町人、最下級に穢多、非人がある。幕府は日常の業務は勿論、衣食住の末まで、各自其の地位を守つて敢て他を侵す事なからしめ、或は法律により、或は階級間の制裁によつて、この制度の鞏固を計らしめた。かくの如きもの幕初より幕末に至るまで變る所がなかつた。果然趣味風尚も自ら二大流を成したのである。もし夫れ士分の家に香花茶湯、また圍碁の遊があれば、町人百姓の家には將碁、花骨牌の戲がある。琴の調は三味線の音と相對し、能樂は歌舞伎と相抗し、謠曲は淨瑠璃節と相分る。狩野・土佐は『伊勢』、『源氏』の堂上の儀容を描き、支那の景物を摸し、浮世繪、吾妻錦繪は遊女の粉黛と俳優の嬌態とを畫く。文學に於いてもまた然り、漢詩文と和歌と擬古文とは一類をなし、狂歌、俳諧と戯曲と小説とはまた一類を分つてゐる。前者を貴族文學といふべくば、後者を平民文學と稱すべきである。

これを内容上より考ふれば、貴族文學は意志の上に立ち、平民文學は感情の上に立つ。貴族文學は武士道と儒教とを以て根本思想とし、平民文學は享樂耽美を以て本領とした。二者の性質全く相離反し、氷炭も雷ならぬもの、されどもし幸にして融和

混淆せしむる事を得たならば、典型を離れ、傳承を捨て、平民文學を標榜する自由筆致清新の風趣を發揚し得て、しかも猥雜士君子に彈指せらるゝ虞なく、また古の據るべき者を取りて渾融進化大に貴族文學の特色を發揮して、しかも摸倣踏襲をこれ事とし萎靡沈滞に陥るの醜を見る事なく、完美の域に達したのであらう。然るに、二者はつひに融和するの期なく、しかもなほ融和の狀を裝ふに至つた。平民文學が往々教訓の假面の下に隠れたるは顯著なる一例である。これ實に文藝以外の原動力の壓迫の然らしむる所、即ち武士道と儒教との勢力及び幕府が執つた消極的方針に出でたのであつた。

抑當代に於ける社會の原動力は儒教であつた。素より大徳高僧の出で、佛教の振興に力めたる者はある、鳥原亂後國を擧げて佛教の勢力下にあらしめた事はある。されど、今は遂に一世の指導者たるべきものではない。佛教の厭世主義は幕政の方針と相容れざる所、而してまた有爲の士は多く佛門を去つて儒に入り、大に佛教の弊を説いた。藤原惺窩、林羅山の如きはそれである。山崎闇齋の如きは佛を出で、儒に入り更に轉じて神道を説くや、そのいふ所は朱子の學説を敷衍するに過ぎなかつた。さきには佛教の教理を以て神道の解説を取つたものも、今は却て儒教に據るのであつた。度會延佳が説く所の伊勢神道が周易に基けるも、其の一例である。幕府はその教化のすべてを儒教に委ねたされば、寺小屋に於いて教へるものも『六論衍義大意』また『四書』『五經』の素讀であつた。こゝに於いて漢詩漢文を擬して最高級の文學となし、また儒教の道徳を移して直に文學の理想となすに至つた。これ理に於いてまさに然かあらねばならぬのである。

儒教に伴ひて一世を支配しようとしたるものに武士道がある。山鹿素行の如きは、この二者の間に介在して、武士道をして完美なる發達を遂げしめたのである。この道の主とする所は、忠孝を重んじ、廉潔忍耐を尙ぶ、要は自己の感情を抑壓するにあり、即ち克己即ち禁慾。苟も雙刀を腰にするからには、戀愛を棄て、人情をも抛たねばならぬ。主君のためといへば可愛の兒女をも殺さねばならぬ。この精神の文學の上には現はるゝや、到るところ義理と人情の衝突を以て血を躍らし、涙を湧かしむるものがある。

この二個の勢力の横溢する所、已に平民の域を侵して一種の道德律を起さしめた、心學即ちこれである。また其の文學にも浸潤するものがあつた。馬琴の勸懲小説はこれである。然しながら、町人の城郭はつひに牢として抜き得なかつた。町人の

勢力は裏面より觀察すれば却て遠く武士の上に出でゝゐる。限りある収入を以て常に一定の體面を保たうとする武士は、大方町人の富の力の下に屈伏せざるを得なかつたのである。一攫千金しかも泰平の時を以てす、こゝに操座劇場の繁榮あり、かしこに吉原島原の歡樂がある。現代の謳歌現實賞讃の聲は、夙に浮世草紙に、八文字屋本に現はれた。道德も克己も何等の愚言ぞ。自由奔放情の誘ふがまゝに狂蝶の舞をなすのである。人生は畢竟醉生夢死たるべきもの、何等嚴肅の意氣があらう、洒落ちらし茶化しちらし戯れ遊びまた弄ぶ。三馬一九の諷刺小説も、狂歌川柳の滑稽も、青本洒落本の寫實も、皆この風尚より出でたのである。實にこの平民文學を除かせば、江戸文學は如何ばかり寂莫たる觀をなすのであらう。江戸文學の神髓は平民文學にあり、生命は感情本位の文學にある。

幕府の當事者は治國の政策上遂に唯美の文藝を許すことが出来なかつた。町人が豪奢放逸の風は、其の執る所の儉約質素の主義と相容れざるものであつた。元祿の華美に對する將軍吉宗、明和安永の遊蕩に對する松平定信、文化文政の所謂大御所様時代に對する水野忠邦、皆紀綱の伸張を計りたる明君賢佐である。即ち儒教を以て、武士道を以て、町人の富を壓しよとせざるを得たのである。その文學に於ける往々過酷に失するものも少なくない、西鶴の好色本の禁止以來その厄に遭ふもの相續いで出でた。感情本位の文學は最も忌まれて居た。また幕府は自家の存立上、苟も威嚴を冒し基礎を危くする者があれば、直に酷刑に處した。慶安二年出版の『古狀揃』はたゞ家康の書簡を録したる一事を以て、其の出版主は斬罪に處せられた。『太閤記』の類は家康の事蹟を記載した爲に屢、絶版の嚴命に接した。元祿七年『鹿の巻筆』の著者鹿野武左衛門が巷説を記したるが、事に坐して大島に流されたる眞に人をして呆然自失せしめる。されば、著作の徒は戦々競々として筆禍を避けようが爲に、現代を移して足利の世となし、江戸を轉じて鎌倉に托した。是等は深くいふを要せぬものであるが、遂には烟華青樓の委曲を盡したる洒落本にして猶教訓本と稱し、或は誨淫の書を著はしながら自ら教訓亭と號する徒輩、比々として然るに至つた。純感情の作『源氏物語』も改作せらるゝ時には、一種の道德的解釋と勸懲主義に便よき脚色を加へらるゝのであつた。即ち平民文學の木に竹を接いだやうな教訓主義勸懲主義は、要するに國家の權威が餘儀なくせしめたるものである。所謂戯作の徒は、その假面の下に隠れて、ひたすらに卑猥の筆を弄した。その愚や笑ふべく、その罪や憎むべきも、亦已むを得ざるに出でたのである。されば文藝の眞價は遂に知らるゝなく、文藝にたづさ

はる者をば道德の奴婢を以て目し、讀書の餘樂と稱し、或は遊戯三昧たゞ玩弄物と同一視した。江戸文學が遂に人生の眞義に徹到する事なく、深刻凄慘の趣なく、幽韻神秘の味なく、たゞ洒脫輕妙艷麗而して現世的零圍氣中に立ちたるは、即ちこの故である。

以上の二大流派は時と共に消長あり、或は抗し、或は携ふ。その跡を討ねて四大時期に分つ事が出来る。

第一期 自慶長八年(二二六三) 至延寶八年(二三四〇) 七十八年間

第二期 自天和元年(二二四一) 至元文五年(二四〇〇) 五十九年間

第三期 自寛保元年(二四〇一) 至天明八年(二四四八) 四十七年間

第四期 自寛政元年(二四四九) 至慶應三年(二五二七) 七十八年間

第一期は啓蒙時代と稱す。幕府が漸く其の基を築かうとして實際的經綸に追はるゝ時、到底未だ文藝の發展を望むべき時でない。併し、この間啓蒙を經、智識開發を經て、はじめて第二期の盛運に達したのである。故にまた第二期の準備時代とも稱する事が出来る。

第二期は元祿年間を中心として前後に亘れる所謂元祿時代。江戸時代中最も豪興の氣風の瀾漫せる時、平民文學の殆ど抑壓せられずして自由なる發展をなし得た時代である。一に發展時代とも稱すべきであらう。

第三期は前期の盛況を受けて秋風落莫の感に堪へざる時、されどまた次期に於ける倦土重來の準備はこの間に成つたのである。故にこの時代を化政前期ともいふべきであらう。今は他の見地よりして文運東漸時代と稱する。

第四期は文化文政を中心としたる前後八十年、直に移して化政時代と稱する。江戸時代の文明の最爛熟したる時代、泰平謳歌の絶頂に達した時である。平民文學が前の元祿時代に比して自ら別途の發達をなしたのである。

かくも分れたる四大時期は、更に他の觀察點より見ても行かねばならぬ、即ち東西の地理に就いてである。

第一期は京都中心の時代、これ從來文權の存したる歴史上まさに然るべき所である。第二期は大阪中心の時代である。當時江戸は未だ殺伐の氣に充ちて、街頭には喧嘩辻斬の沙汰のみ繁く、文藝としては纔に幼稚なる金平節に喝采する時、大阪には

西鶴があり、近松があつて、人々はすでに人情の熾微に泣いて居る。第三期は文藝の中心がまさに大阪を離れて江戸に移らうとする時である。文運東漸時代とはこの謂である。上方文明の移植は家康が夙に企圖する所であつた。林羅山の召聘は勿論、狩野探幽が幕府御繪所となれる、住吉廣通の子孫が土佐繪所となれる、其の他北村季吟が綱吉に聘せられ、或は近衛基熙が家宣に招かれて京式の禮法を教授するなど、上方文明は漸を以て江戸に移つた。第四期に至つて、文運の中心は江戸に於いて確定せられた。江戸特有の文明がその精粹を發現した時代である。この時京阪の文學は凋落してまた振はず、地を拂つたのである。併しながら、一現象の注意すべきものあるを知らねばならぬ。江戸は泰平の春に心浮かれて行遊吟詠日も足らぬ時、京都には悲憤慷慨の聲激しく、幾多の騷客は血涙滂沱たる文辭をなした。かくては文壇の中心も再び移つて京都のものと思はれたが、やがて尊攘開國の論囂々として起り、振古未曾有の大變革の前に文藝は暗黒の中に沈淪し、而して我が江戸幕府時代の文學も此に終を告げたのである。

第一期 啓蒙時代

第一章 時代の概観

文祿二年(二二五三)徳川家康未だ一諸侯たるに過ぎなかつた時、已に碩儒藤原惺窩を京から招いて『貞觀政要を』講せしめた。されば、その一度天下の覇權を掌握するや、まづ力を極めて文教の復興に當つたのである。しかも家康の好學は、尋常一様のものでない。近藤重藏の『御代々文事年表』にかう記してある。「天海僧正撰する『東照宮緣起』に、後陽成院の宸筆にも、新田大相國家康公は好勇恢武天下の名士なり、加之研精於文學、發志於經綸といへり。宸筆に所謂研精とは豈に尋常好書を謂ふの謂ならんや、深く御好學の厚きを嘉獎し給ふ所以なり」と。この好學の人にして治教のためにする、故にまづ學者を登庸拔擢し、銳意民衆知識の向上普及を計らしめた。林羅山は擢でられて儒官となつた。儒學の勢力が大に扶植せられて、さしも榮えた佛教の壘を摩するやうになり、修身齊家の説が三百年の聖訓となつたのは此に始まつた。

家康の招聘した重なる學者には、公卿では舟橋秀賢、山科言經がある、和學者では冷泉爲滿、飛鳥井雅庸がある、僧侶では相國寺兌長老、南禪寺三長老、東福寺哲長老がある。その中にも、金地院崇傳長老は最も内典外典に兼通して、羅山と共に幕府の施設に當つて献策する所が夥しい。家康がこれ等諸學者を擁して文教のために計畫したも

のが二つある。一にいはいく古書の蒐集、二にいはいく書籍の出版。

應仁の大亂以來兵燹にかゝれる書冊果して幾萬であらう、その纒に免れ得たものも空しく泥土に委し去つたのである。もし桃華坊文庫の慘狀におもひ至らば、いはうとする辭を失ふであらう。家康はすなはち公卿の筐底をも寺院の秘庫をも探索して古典籍を求めた。秘して出さざるものはすべて廢紙とすとは、當時公卿等に對しての嚴命であつた。その漸く蒐集せらるゝに及び、江戸城内富士見櫓に文庫を設けて之を保存した。時は慶長七年(二二六二)である。これ後に寛永の末年に於いて紅葉山に移されたる紅葉山文庫である。家康は更に五山の僧侶に令して典籍の筆寫をなさしめた。時恰も大阪の役、兵馬恫慄の際にもしばしも息むことなく、京都南禪寺に於いて謄寫に努めさせた。『舊事記』『古事紀』『日本後紀』『文德實錄』『三代實錄』『類聚國史』律令格式等をはじめとして、『百練抄』『江家次第』『北山鈔』『西山鈔』等は、皆その折りに傳寫したものである。

このやうに家康は典籍の散佚を防いだばかりでなく、更に書籍を刊行して世に普及せしめようとした。家康は世に信長老と稱せられて夙に博識の聞え高き足利學（後九世の御注釋を傳して代見の學校の主宰とし、木活字十萬餘を刻して書籍刊行の事を管領せしめた。慶長四年に開版せられた『孔子家語』を以て幕府開版のはじめとする。『貞觀政要』『武經七書』等の諸版が相踵いで出でた。その後開版事業を駿府に移され、羅山及び崇傳が代つて之が主宰となつた。慶長二十年に『大藏一覽』、元和二年に『群書治要』の開版があつたが、二者共に新鑄の銅活字を以てしたのである。活字版當時之を一字版と稱した。その法たるや、まづ支那よりはじまつて朝鮮にうつり、後我が國に傳來したるもの。『大藏一覽』刊行の際に使用せる銅活字は、或は文祿の役朝鮮にて獲たものと傳へられる。

これよりさき、朝に後陽成天皇がおはします。書籍梓行の叡慮篤く、文祿二年侍臣に命じて『古文孝經』を開版せしめられた、これ我が國木活字版の嚆矢である。『錦繡段』『勸學文』『日本書紀神代卷』『職原鈔』『五妃曲』等の諸版はやがて世に公にせられた。所謂慶長勅版とはこれである。後水尾天皇また先帝の叡旨を奉じて、銅活字を鑄造して『皇宋事實類苑』を開版せしめられた。

印刷事業の發達は實に近世文運の母である。勅版と駿河版との外に、幾多の私版も出ではじめた。文祿五年の『補註蒙求』をはじめとし、『易林節用集』また直江本が世に出でた。直江本とは上杉家の老臣直江山城守兼續が慶長十一年に開版したる『六臣

註文選』である。これ蓋し我が國銅活字の權輿である。されど國文學史上に於いて特筆すべきものは、角倉素庵の出版に係る角倉本ではあるまいか。『源氏物語』も『古今和歌集』もこれによつて世に知らるゝに至つたのである。慶長十三年に成つた『伊勢物語』の如きは、繪畫を挿みまた平假名を使用した點に於いて、書籍刊行上に一新紀元を劃して居る。近世俗文學書は大方これが體裁を模して出でたといはるべきものであらう。しかも繪畫の挿入及び漢字の振假名は、活字版をして舊時の整版に歸らしめた。角倉本が實にそれである。

活字版たると整版たるとを問はず、印刷術は月に進み、刊行書は日を逐うて續出する。漢書には訓點を附し傍訓を附して刊行したるものが出來、また『源氏物語』や『大和物語』の古文學には幾多の註釋書が出來た。とりわけて『徒然草』に至りては、廣く世に行はれた結果、その註釋書の多き、貞亨五年の『徒然草諸抄大成』に記するところによると、すでに十三種に及んだ。

我が文學はいかでか此の氣運に乗せずしてあるべき。その最も早くこれが潮流に棹したるものが漢學である。林羅山は夙に『四書新註』を講じたるに、その門に入るもの漸く多きを加へた。是に於いて博士船橋秀賢、大に罵つていふ、古來勅許がなければ書を講ずる事が出來ぬ、朝鮮にても然るを、何事ぞ處士の身にして新説を講ずる。斷じて許し難いと。これを家康に訴へた。その心事の陋や驚かざるを得ぬ。然るに、家康は「人各々好む所に従ふべきのみ、何をか傷むべき」と却て其の言を斥けたのである。

家康の此言はやがて因襲隨逐の弊を打破すべき曉鐘であつた。この自由精神は動きそめて、まづ束縛の弱き箇所を破り、漸を以て廣く全般に及んだ。漢學は措紳の手から處士にうつり、ついで俳諧は地下に榮え、小説もまた其の趨勢を逐ふに至つたのである。和歌は最も遅れたといふものゝ、亦革新のはのめきは見ることを得られた。

されど、幕府は未だ創業の際である、物質的文明の發達を計つて日も足らざる時である。文學また其の發展の基礎を定むるがための準備に忙殺せらるゝ時である。智識の普及は焦眉の急にして、其の期する所は一世の裨益にあり、童蒙の啓發にあつて、未だ純文學として見るに足るべきものを出すに至らなかつたのである。

げに啓蒙時代の文學は、いまだ特筆するに足るものがない。されど、そこには希望も見え、また期待すべき所も少なくはなかつた。その社會上の武辨粗暴の風俗また

質素簡樸の風習と相まつて、簡樸却て稱すべきものがある、まして其の間に一點清新の掬すべきものが多い。決して幼稚であるとのみいひ棄て、また實用的教訓的であるとの一言の下に却け去るべきものではない。

第二章 漢學の興起

江戸時代の漢學は、藤原惺窩を得て、はじめて其の發展の途に就いたのである。惺窩(一二二一—二二七九)名は肅、字は歛夫、惺窩は其の號である。中納言定家十二世の孫である。幼い頃から京都相國寺に入つて佛典を學び、俊秀を以て稱せられた。後宋儒の書を讀んで其の性理の說に服し、遂に佛教の仁種を絶し、義理を滅するに慊らず、還俗して儒に歸し、更に研鑽に力めようとして文祿二年明に渡らうとし、其の途中風濤を薩摩山川港に避け、偶然にも學僧桂庵が遣した和點の經書を得て歸り、こゝに朱子の學說を主唱した。然しながら未だ全く朱子一箇の見をのみ奉せず、なほ陸象山、王陽明をも容れ、また神道とも調和しようとした。その高節清操眞に一代の宗、諸侯就いて教を聽く者多く、家康の如きは夙に信頼する事篤く、特に師禮を以て遇した。荻生徂徠は狭量容易に人に許さざる者、しかも曰はく、王仁氏ありて民始めて字を知り、吉備氏ありて經藝始めて傳はり、菅原氏ありて文史誦すべく、惺窩氏ありて後人々言へば則ち天を稱し、聖を語る、斯の四君子は世々學宮に尸祝すと雖も可なりと。その著に二種の文集がある、一は林羅山及び菅得庵の撰、一は孫爲經の編にして徳川光圀の校閱せる者、その他『文章達徳録』『同綱領』『千代もと草』等、其の識見を知るべきものがある。

惺窩の門人數多ある中に、世にかくれないものを數へると、林羅山、那波活所、堀杏巷、菅得庵、四天王の稱がある。松永昌三、吉田素庵、三宅奇齋等、また其の門から出でたものである。中にも最も名聲藉甚なるは林羅山である。

羅山(二二四三—二三一七)名は信勝、字は子信、後薙髮して道春といふ、羅山は其の號である。博覽多識加ふるに豪俊の資、程朱の學は此の人を得てはじめて確乎たる基礎を固め得たのである。十八歳の時すでに宋學を京に講じ、二十二歳の時惺窩の門に入つた。惺窩羅山を見る事懇切、稱して林秀才といひ、其の蘊蓄を傾け盡して教授した。後惺窩の推薦を以て幕府の儒官となつた、時に慶長十一年(二二六六)。是に於いて羅山は力を盡して佛を排し、老莊を駁し、陸王を斥け、耶蘇教を難じ、一意専心朱子學の擴張を計つた。その朱子學に忠なるの餘、時に偏狹の見に陥り、其の論旨に矛盾を來す事も少くなかつた。羅山の子春齋名は春勝、その孫鳳岡名は信篤もまた父祖

の後を嗣いで儒官となり、かくて子孫世々其職にある事前後約三百年、幕府の學政を左右して居た。羅山の時に當り、幕府は未だ草創の際で、秩序定らず禮典も明かでない、羅山等即ち注記の職に居り、法典の制定に當つた。春齋が幕命を受けて撰述した『本朝通鑑』三百十卷、諸家系譜傳三百卷は、その卷帙の最も浩瀚なるを以て聞えてゐる。羅山の著述頗る多く、羅山詩文集百五十卷、其の他百五十餘種、春齋の著には鷲峰文集百二十卷がある。其の詞藻と識見とを併せ見る事が出来る。

羅山の學徒は其の數が甚だ多い。かやうにして、嘗ては搢紳世家及び五山僧徒の間に微々として生脈を繋いだ我が儒學は、漸く世に普及するに至つた。民間また幾多の著書が相踵いで出でた、その多くは平易簡明を主とした通俗の書即ち諺解和解の類であつた。また數多の私塾も起つた、その最も有名なのは京都なる松永尺五の講習堂である。講習堂はすなはち京學の學塾中の尤なるものである。京學は一に京師學ともいふ、惺窩によりて發源したる京師の朱子學を稱し、之に對して東學といふのは、その江戸に移つたものゝ稱である。

尺五(二二五〇—二三一五)名は退年、字は昌三、かの連歌俳諧を以て著名なる貞徳の子である。儒學を惺窩に受け、春秋館を設けて諸生に教授した。後、所司代板倉重宗によつて堀河の地を得、講習堂を開いた。堂は禁裏を距ること甚だ近い、これ尺五の號ある所以である。尺五人材の養成に力めること大方ならず、木下順庵、宇都宮遯菴等は皆其の門より出でたのである。尺五の歿するや、順庵に哭詩五十韻及び慰苦塊近體二首があり、其の三十三年忌辰に當るや、遯菴に先生學術建元勳、往昔門人聚若雲三十年來追遠日、獨披荒草問孤墳の詩があつた。

朱子學は以上略述した京學のみに止らず、他にも一大學統の存する事を記さねばならぬ。所謂海南學また略して南學といふのが是である。それが起原は大内氏の家臣南村梅軒にある、梅軒天文、中土佐に來り四書の義を傳へた、梅軒から天室、天室から谷時中に至つた。時中(二二五八—二三〇九)は名は素有、通稱大學、時中は其の字である。時中程朱學説を信ずる事深く、大に之を唱導し、また海南邊陲の地として書なきを憂ひ、四方に求めて家産を蕩盡するに至つた。これ南學の祖を以て目せらるゝ所以である。時中の門に小倉三省、野中兼山、山崎闇齋等がある、皆其の名が聞えてゐる。三省(二二六四—二三一四)名は克、字は政義、三省はその號である、徳行の人、憾むらくは遺著散佚して存するものがない。これに反して兼山は事業家、爲政家である。兼山(二二六五—二三三三)名は止、字は良繼、兼山は其の號である。土佐侯に仕へて要路に

居り、置兵の施設、藥草の栽培、蜜蜂の飼養、津呂の御崎の開鑿等、大に國政に資する所が多かつた。兼山また人を長崎に遣はし、船載の書を購求し、或は更に翻譯して、後進の便を計つた事が頗る夥しかつた。闇齋が宋學に入つたのも實に兼山の徳愼によつたのである。

闇齋(二七八—一三四二)に至つては名聲藉甚、南學中の一鴻儒を以て推すべきもの。その名は嘉字は敬義、闇齋は其の號である。京の人、初は妙心寺に佛典を修めたが、不羈衆僧の忌む所となつた。偶々土佐侯の公子に知られ、土佐吸江寺に移つて學んだ。されど、三省及び兼山と交はるに至り、程朱の説の信すべきを知り、谷時中に師事し、遂に蓄髮して儒に歸した。佛教の非を論じたる先儒の言を輯録したる『關異』はその際の著であつた。かくて後、江戸に京都に帷を垂れて講説した、從學の徒數千を以て數へらる、中に井上侯、會津侯の如き禮を厚うして師事した。著書に『經名考』『仁說問答』『文會筆録』『垂加文集正續』等がある。全集に『垂加草全集』及び『同附録』がある、これは門人植田成章の編輯したもの。

闇齋は凌厲の性、敢て尊貴にも下らず、弟子に對しては嚴肅殆ど君臣に於けるが如きものがあつた。彼は學究の態度をとらず、學ぶ力行を事とした。その朱子學を信奉することは甚だ厚いとはいへ、なほ能く國家を中心とする獨立思想を失はなかつた。嘗て弟子に問うていふ、孔子大將となり、孟子副將となりて我が國に迫り來らば如何すべきと。衆敢て答へる者がない。そこで闇齋は諭していふ、其の時には我等干戈を手にして國家を守護せん、これこそ孔孟の道であると。舉世漢土に心酔したる時此の言をなす、實に一卓見を具したる者である。これ即ちその晩年に當り、吉川惟足及び出口延佳の神道を傳へ、更に融化して一種の神道垂加流を創めた所以である。『風水草』は神道説を述べたものである。門人の玉本草齋はその説を祖述して『玉籤集』『原根録』等を著はした。その他板垣信直、梨木祐之等も之を傳へた。而してまた、その朱學の説は淺見綱齋、佐藤直方、三宅尙齋等が之を傳へた。後に綱齋の門人三宅觀瀾等、水戸侯に仕へて、修史事業に與つた。是に於いて、水戸學の基く所を顧みて、闇齋の學風の影響の大なるに驚かざるを得ぬ。

以上説く所はすべて朱子學派隆盛の概略である。こゝに一學派があつて、之に抗衡しようとする。近江聖人の稱ある中江藤樹が率ゐる陽明學派が即ちそれである。この學は明の王陽明(一一三二—一一八八)の主張する所で、朱子學の理氣二元に對して理氣合一を説き、朱子の博識に對して德行を主とした。故に此の派の人には多く

事功また力行の觀るべき者があつた。

藤樹(二二六八—二三〇八)名は原、字は惟命、藤樹は其の號である。祖父吉長は米子侯の臣、父吉次は近江小川村の農。藤樹は祖父と共に伊豫大洲に米子侯に仕へて居つたが、祖父の歿するに及んで、母に孝養を盡すがために、私に祿を捨て、近江に歸つた。かくて定省の暇に徒を集めて程朱の學說を講じた、然るに寛永十七年(二三〇〇)『王龍溪語錄』を得て稍心動く所があつたが、後四年に始めて『陽明全書』を讀破して大に啓發する所あり、本心を存養するを以て務とした。これ實にその三十七歳の時である。藤樹はたゞ論談講說を事とせず、なほ實踐躬行を主とした。母に對して至孝であつた事はいはずもあれ、温恭謙退一言一行を苟くもせず、至誠人を動かす、よく郷黨を導き、徳風今に流行するものがある。嘗て京師に赴く道すがら、轎中に心學を説いた、轎夫も其の言に感動して流涕やまなかつたといふ。其の人を薫する大率この類であつた。當時稱して近江聖人といはれたも宜なる事である。藤樹の歿するや、其の家を祠堂として徳本堂といひ、常に祭祀を絶たなかつた、世に謂ふ所の藤樹書院は即ちこれである。藤樹の著書に『翁問答』『鑑草』『孝經啓蒙』『論語鄉黨翼傳』『藤樹遺稿』等があり、後人の纂輯したものには『藤樹先生全書』及び『藤樹全書』がある。その名は

良繼、字は了介、備前池田光政の臣、學を藤樹に受けて之を事功に擧げ、一國の帷幄に參して治政大に力めた。後、致仕して京都に出でたが、從ひ學ぶ者の多きを加ふる程に、幕府の忌む所となり、遂に吉野に退隱した。晩年松平信之侯に從つて古河に居つたが、封事を幕府に上つて罪を得、禁錮の厄にあひ、幽囚のうちに歿した。其の著書は多くある中に『集義和書』及び『同外書』を推す。

之を要するに、當期の儒者は啓蒙の人、講說の人、或は事功の人で、未だ純詩文學の發達を期する事が出来なかつた。然しながら、惺窩には猶吟詠の誦すべきものがあり、羅山に至つては文辭の更に圓熟したるものがある。其の詩速吟、一夕よく百五十の次韻を得て韓客を驚かしたといふ。されど風韻の高逸なるものなき、人格の然らしむる所であらうか。春齋は韓使來朝毎に贈答したるもの、詩は一萬首、文は二千篇を數へたといふ事である。更に詩風の高きものを求めて二を得た、一は石川丈山、一は僧元政である。

丈山(二二四三—二三三二)名は四、丈山は其の字である。もと武門の出、元和元年大阪の役に東軍に屬したが、獨り竊に營を出で、敵を斬り、軍令に觸れて黜けられた。

後比叡の山麓一乗寺村に隱居し、詩僊堂にあつて、翰墨自ら娛んで居た。堂は漢晋より唐宋に至る間の詩人三十六人の像を寫し、また各の詩一首を録して楣間に掲げた。故に、其の名があるのであつた。丈山はすべて交友を絶ち塵外に超在して交はる者はたゞ林羅山、堀杏菴、野士包、僧元政等があるのみであつた。丈山の詩を蒐めたものを『覆醬集』といふ中に、『白扇倒懸東海天』といへる一首の如きは、最も人口に膾炙せるものの一である。朝鮮の權式は稱して日東の李杜となし、荻生徂徠も亦東方の詩杰を以て稱した。されど、其の詩は意氣の横溢を以てまされるのみで、閑雅の致に至つては殆ど之を缺如して居る。

僧元政(二二八三—二三二八)はもと彦根井伊侯の臣、出家して京都深草瑞光寺に隱棲した。故に時人稱して深草の元政と呼んだ。博學、疆記識和漢に亘り、詞章を善くし、また茶法にも通じて居た。かつて明の歸化人陳元贊と方外の交があつた。二人の唱和したものは、之を收めて『元々唱和集』及び『聖風唱和』に載せてある。一世傳へて之を推賞した。その他、元政の詩風は『谷口山詩集』、『草山集』に於て見る事が出来る。天真流露すべきものがある。これ陸放翁の高足袁中郎に私淑した故である。而して元政が其の趣に富んで居る集を『草山和歌集』といふ。

第三章 和歌革新の曙光

慶長十九年(二二七四)三月冷泉爲滿駿府に於いて家康に謁見した時、家康之に『古今和歌集』の秘説を聴かうと思ひ、まづ羅山にはかつた。羅山いふやう、堂上の説は未だ知らねども、大方は聴く甲斐もないものと。果然爲滿の所説は耳を傾くるに足らなかつた。越えて七月、爲滿が『古今』の講筵に際し、家康爲滿に人麿の事蹟を問はれた。爲滿の答ふる所、人麿は神仙である、神秘傳ふるものがないといふことであつた。羅山座にあつたが、之を詰問していふ『萬葉集』中に人麿といふのが四人ある、柿本人麿は歌仙とはいへ、古書に就いて研究したならば敢て知り難いものではない、斷じて神仙を以てのみ敬し遠くべきものではないと。この事實は最も適切に江戸時代初期に於ける歌道の状態を示し、歌道の革新が如何に漢學の發達に遅れたかを説明するものではなからうか。歌道の進歩のしかく遅々としてゐたのは、一に歌道の傳授所謂古今傳授といふ一大桎梏があつたからである。その古今傳授は依然として堂上方の掌握する所であつた。太宰春臺が少時和歌に志して、其の詠四百首に及んだが、一度古今傳授なる桎梏を思ひ起し、堂上方の威壓を知るや、急に詩に轉じた。これ爲滿

より遙か後年の事とはいへど、なほ未だ和歌の権力のいづれに存したかを推し得られる。

されど流石に堂上家には其の人がないではなかつた。中にも名聲世に隠れのないのは細川幽齋であつた。幽齋二一九二—二二七〇名は藤孝、三淵晴貞の子、出で、細川元常の養嗣子となつた。織田信長に屬したが、本能寺の變あるに及び、悲歎の極剃髪して幽齋また玄旨と稱した。天正十五年(二二四七)豊臣秀吉に九州の行營に従つた時『九州道の記』があり、十八年小田原の陣には『東國陣道記』の著がある。幽齋夙に三條西實枝より古今傳授を承け、二條師範家の命脈を繋ぐべき責を有して居た。慶長五年(二二六〇)石田三成のために居城丹後田邊城を包圍せらるゝや、後陽成天皇深く古今相傳の絶えよう事を慨かせられ、勅旨を以て兵を解かしめられた。その後高野山に隱遁したが、家康に召されて京都に住し、歌學を諸公卿に授けた。其の家集を『衆妙集』といふ、題號は後水尾院の下賜に係るといふ事である。風調は堂上師範家の舊套を脱せず、清新の致を缺如して居る。歌論の書には、家臣佐方宗佐が手録せる『幽齋聞書』といふがあり、また門人烏丸光廣が筆録せる『耳底記』がある。是等の所説は三條西實枝の言か、さなくば『詠歌大概』『八雲御抄』等を祖述するに過ぎない。

然しながら、當時の歌界は、この人を得てはじめて光彩を發する事が出来たのである。その門には秀才が少くなかつた。中院通勝(二二一八—二二七〇)は天正十六年幽齋より古今傳授を承けた、また『源氏物語』注釋書中有數の書たる『岷江入楚』を作つた。

その子通村以下相嗣いで世々和歌の家を以て聞えて居る。烏丸光廣(二二三九—二二九八)は學識の高きを以て師の推薦を得て幕府の歌學顧問となつた。歌學の書は傳はらぬけれど、和歌の家集に『黄葉和歌集』がある。光廣は才藻に富み、『仁勢物語』また『竹齋草紙』の戯書は、その著と傳へられて居る。その孫資慶には『秀葉和歌集』の著があり、歌學の意見としては資慶卿口授がある。資慶の子光雄には光雄卿口授がある。

幽齋門中で一異彩を放つたものは松永貞徳(二二三〇—二三一二)である。その傳は之を貞門の俳諧の章に讓る。この人、身は地下人として、早く幽齋の教を受けて歌學に通じ、詠歌に巧みであつたが、その最も力を盡したのは、斯道を民間に傳へる事であつた。歌學の著に『歌林雜話』一名『貞徳戴恩記』といふがある。幽齋實枝、里村紹巴等の行狀逸事を記述して居る。『歌林樸檉』は古歌の詞句を註したもので、當時至便のものと稱せられた。その和歌の家集を『逍遊集』といふ。

貞徳の學風は、その門下に加藤盤齋(二二八一—二三三四)を起して、『三部抄増註』新

古今増抄』等數種の註釋書を著はさしめた。北村季吟もまた其の門下で、盤齋より傑出せるものであつた。

季吟(二二八四—二三六五)は熱血を注いで古典の註釋をした。『源氏物語湖月抄』土佐日記抄』枕草紙春曙抄』伊勢物語拾穂抄』等平易親切、後進を益する事少くない。されど師説の祖述の外には創見の見るべきものがない。その註釋を敢てしたのは、その意蓋し和歌をよくするにはまづ古語を知らねばならぬ、古語を知つて後に和歌の精神に接しようとするのであつた。しかも季吟自らは遂に和歌の精神に接する事が出来なかつた。情熱なく、氣骨なく、たゞ功を歌學に收め得たのみである。

もしそれ眞情熱烈の詠を求めらるなら、それは後水尾院(二二五六—二三四〇)の『鷗巢集』であらうか。院は英邁の御性質、その幕府に對する憤慨の情は自ら迸つて高風三唱に値するものがある、決して尋常一樣の花鳥風月の詠ではない。『鷗巢集』以外諸臣の打聞の歌を輯集したものに『後水尾院御集』がある。また延寶中諸臣に勅し、二十一代集及び諸家集より類題の歌一萬二千餘首を選ばしめられた、これ『類題和歌集』である。爾後類題の歌集は之に倣うて相踵いで世に行はれた。

た。長嘯子(二二三〇—二三三〇)名は勝俊、豊臣秀吉の外族、小川秀秋の兄。關原の役起るに及び去就決せず、柔儒の行一世の嘲笑を招いたが、亂後京都東山の麓靈山に隱栖し、長嘯子天哉翁と號して、風雅の月日を送つた。長嘯子は元來和歌の道を幽齋に學んだもの、されど遂に堂上家の拘束に堪へず。

敷島の道すぐにしも踏みわけん人はよもぎのあさましの世や
と絶叫するに至つた。家集を『舉白集』といふ、清新の風、自由の詞、堂上派歌人の毀誦の中心となり、非難の聲が高くあがつた。尋舊坊の『難舉白集』の如きは其の一例である。されどまた、辯疏の言をなす『舉白心評』があつて、『難舉白集』を難じ、かねて長嘯子退隱の事實を稱揚して居る。

長嘯子の後を逐うて出でた者は下河邊長流(二二八四—二三四六)である。もと大和宇陀の人、中年より大阪南難波村に住して讀書に閑日月を送つて居た。學は和漢に亘り、しかも強記にして、『萬葉集』、『古今集』、『伊勢物語』の如きは一字一句をも誤らず暗記して居つた。狷介の性質で、意に適はざる時は來訪者にも會見せず、富豪の招聘にも應じなかつた。たゞ最も親交を重ねた者には僧契沖があるばかり。契沖がかつて

我を知る人は君のみ君を知る人もあまたはあらじとぞ思ふ

といひおくれるにも、其の一斑を推す事が出来る。徳川光圀その名聲を傳聞し、幣を厚うして招いたが、遂に従はなかつた。光圀更に紙筆を賜うて『萬葉集』の註釋を乞はれたが、それすら意の向くまゝに執筆したので、業を果さずに没した。契沖後にその志をついで之を全うした。長流の著に『歌仙抄』『洋水和歌集』『續歌林良材』『林葉累塵集』等がある。

長流は長嘯子の主張を追慕し、その堂上家師範家に對する態度に擬せようとした。實に『林葉累塵集』の編も『洋水和歌集』の撰も、その意は堂上家歌人の固陋の弊風を破り、これが廓清を計らうとするにあつた、即ちまづ和歌を堂上家より奪つて在野の士に移さうとするのであつた。

世につかさ位ある人は我ともがらにあらざれば、其の人々の歌に於いては稀にも之をのすることなし。たゞ位なき武夫の八十氏人を始として、あるは市に荷ふ商人、あるは山田に作る農夫、あるは木の下岩の上にありか定めぬ桑門の言の葉に、さるべき一ふしこもれるをば之を尋ね求む。

これ『累塵集』の自序に於いて記した所である。故に集中堂上派の詠を斥け、主として

武家以下庶人の詠を收め載せてゐる。長流は堂上派の歌風を觀て、これ末流の混濁したるに比すべきもの、今は宜しく源流の清きを汲むべきである。是に於いて力めて上代の和歌を研究した。その『萬葉』『古今』を諳じて、片言をも錯らなかつたのも、これに資せんがためであつた。然らばその詠は如何、果して、『萬葉』素朴の調を再現し得たらうか。その家集『晩花和歌集』また『自撰晩花集』に就いて見るに、大方

つひにわが着ても歸らぬ唐ごも立田やなにのふる郷の山
下野やなす野にしげる篠をとりて東男子は矢にぞはぐなる

の如く、たゞ『古今』『伊勢』の風貌を髣髴せしむるのみである。之を堂上派に比して、遙に清新を許し得るに過ぎぬ。長流の識見は蓋し遠く時流を抜いた、しかも歌人たるの天稟あるにあらず、その詠は期する所にはなかつた。然しながら、功を歌界覺醒の第一歩に占めたる一事は、遂に忘るべきものでない。

要するに、この期に於いては、和歌は未だ覺醒の域に達せず、たゞ革新の曙光のほのめきを認むるに過ぎなかつた。眞の革新は長流の友契沖を得て始めて期待する事が出来た。また戸田茂睡の呼號に負ふ所も多かつた。茂睡の『梨本集』は元祿十一年の撰に係る、すなはち之を次期に繋ぐべきである。

第四章 貞門と談林の俳諧

天文十八年(二二〇)九荒木田守武卒し、二十二年山崎宗鑑歿した。さらぬだに卑陋猥雑に陥りはてた俳諧の道は、今やこゝに其の指導を失うて、遂に世に捨てられんとする状態に陥つた。松永貞徳が世に出で、俳道振興の衝に當り、所謂中興の主を以て推されたのは此の時である。その俳風を古風の俳諧と稱し、また貞門の俳諧ともいふ。

貞徳は宗鑑の歿後十八年元龜二年(二二三)京に生れた。父を永種といひ、連歌師宗養について連歌を學んだ人で、また里村紹巴と同門の友であつた。貞徳若い時分から歌學を九條玖山公、細川幽齋等に學び、また父と紹巴とについて連歌をも究めた。早くから連歌の執筆などをしたが、人々が連歌の席の後でいひ捨てる俳諧などするのを聞き覺えて、いつか之に心を専らにするに至つた。傳へいふ所によると、慶長三年八月、前攝政久前公より俳諧一道の宗匠花咲翁といふ名を與へられたと。これ十七歳の時、しかも當時已に堂々たる一家をなしたものと思はれる。その風漸く世に及ぼし、寛永十年(二二九)門人松江重頼が『犬子集』を編した時には、諸國より到來の句は千五百に及んだ。

貞徳は多才多能往くとして可ならざるはなきもの。その著の夥しくある中に、俳諧に關したるものには『新增犬筑波集』一名『淀川』がある。宗鑑の『犬筑波集』に批評を加へたものである。また『油糟』といふのは、『犬筑波集』の前句に自家の附句をなしたるものである。これによつて、宗鑑と貞徳との俳風の異同を知る事が出来る。

宗鑑

霞の衣すそはぬれけり
さほ姫の春立ちながら尿をして

おほぶくやのみ過す神達

霞の衣すそはぬれけり

貞徳

天人やあまくだるらし春の海

大ぶくを座敷うちへやこぼすらし

春立てふむ雪汁やあがるらん

げに貞徳は宗鑑宗武の滑稽を取り奇智を取つた。しかも連歌の用語の優美且つ雅致あるものを取つた。貞徳はもと和歌の人、されば當時の歌人の生命たる言懸け縁語は、また貞徳が慣用手段の一つであつた。故に、その滑稽も畢竟言語上の遊戯洒落に過ぎない。されば未だ守武・宗鑑を距る事が遠くなかつた、然しながら貞徳の俳諧

史上の功績はこの方面ではなくて他に存する、俳諧『御傘』の著がそれである。格を連歌にとつて俳諧の法式を定め、天下の俳人をして其の歸趨を知らしめた。貞徳はいふ、俳言を用ひよ、即ち和歌連歌の用語以外の語を用ひよと。またいふ、一句に理あれよと。その意は一句一句に獨立の意義を有せよ、前句附句相より始めて始めて何の意なるかを知るが如きものたる勿れといふにある。またいふ、前附同意を禁せよと、それは俳諧の變化をば多種多様ならしめんとの義である。貞徳の説く所はたゞに俳諧の上にもみ止らず、一般文藝の上に貢献する所も實に多大であつた。

然しながら、貞徳が歌學に通達せる事が、遂に俳諧の法式をば煩瑣に陥らしめた。蓋し貞徳は俳諧を以て、面白き事あるとき興に乗じていひ出し、人をも娯ばしめわれも樂しむ道とはいひ居るものゝ、その深意は人を驅りて歌道に入らしめようとしたのである。俳諧を學ぶには『徒然草』、『三代和歌集』を参考とせよ、進んで中古の物語をも研究せよといふのも其の謂である。これやがて貞門を自縛し、委靡振はざるに至らせた所以である。

さはれ貞門の俳風は天下を靡かした。貞徳が八十三歳の長壽を以て歿した承應二年(二三一三)の頃には門葉諸國に遍く、明暦三年(二三一七)刊行に係る高瀬梅盛撰の『鸚鵡集』には句數九千九百九十九作者千二百九十四人の多きを載せ、その作者は九州奥羽のはてにまでも及んだのである。これ實に貞門に幾多の秀才が輩出して師説を繼承し、その弘布に力めたからであつた。その中に所謂貞門の七俳仙が最も世に聞えた。

七俳仙とは誰ぞ、『俳諧噓草』の著者野々口立圃(二二五九—二三二九)、俳才縦横遠く師の上に出で、また『犬子集』を編して貞門の興隆に盡力したる松江重頼(二二六七—二三四〇)、これはこれはとばかり花の吉野山と咏じ、其の調の後の蕉風に近きをもて知られた安原貞室(二二七〇—二三三三)、守武の『獨吟千句』に擬して千句を聯ねた鶏冠井令徳(二二四九—二三三九)、貞徳の殊寵を得て其の秘傳を受けたと稱せらるゝ山本西武(二二六六—二三三八)、幕府より連歌道をもて招聘の命をうけた高瀬梅盛(二二七三—二三六二)、博學多識師の歌學説をついで古文學の註釋に努力した北村季吟、即ちこれである。

その他、江戸には齋藤徳元がある、はじめ江戸に於いて俳書を刊行した『俳諧初心抄』の著はそれである。かゝる状態にある以上は、直に貞門は衰微に傾いたといふ事は出来ぬ。然しながら、時勢の推移は、遂に大阪に於いて一新體を起さしめた。談林

風の俳諧といふのが、すなはちそれである。

談林とは何ぞ。田代松意が『談林十百韻』の序によれば、もと松意等同人が俳諧會合の筈を以て俳諧談林と稱したとの事、それがやがて佛教の講學所の稱なる梅檀林に附會して檀林とも書くのである。その祖は即ち西山宗因である。宗因二二六六一二三四二名は豊一、肥前八代の城主加藤正方の家臣、正方と共に連歌を里村昌琢に學んだ、寛永九年(二二九二)主君の奥州に貶せられるに及び、致仕して京都に來り、剃髮して宗因と改め、連歌師となつた。時たま、貞門の俳風が熾盛なる時、宗因亦その風體を學んだものか、寛永十三年松江重頼に相會してより俳諧に心を專にするに至つた。然しながら、京都は到底その羽翼を張るべき地ではなかつた。そこで、去つて大阪に移り、連歌の判者天滿天神の月並の宗匠となり、梅翁と號した。貞門の缺點を看破し、旗幟を新にして、滑稽を標榜したのは此の頃からである。その著に『千句集』『釋教百韻』『五百韻』『天滿千句』『阿蘭陀丸二番船』等がある。宗因は法式を墨守しなかつた。俳言必ずしも用ひるの要を認めぬ、前附も同意も時に應じて用ひるも妨げぬと。殊に自由の詩趣と不羈の用語とを專にしたるは發句であつた。

申し申し六歳が申し女郎花

花むしる。一見せばやと存じ候

頭巾寒うして北に峨々たる青山なし

白露や無分別なるおきどころ

その句、貞門が言語上の遊戯をもつて足れりとするのとは稍趣を異にして居る。人生を詠じ、自然を吟じて、ともあれ其の機微を穿たうとするに近き、また古句の運用、漢語俗語を使用してその語彙を豊富ならしめた如き、貞門に比して傑出せる點である。宗因の門下多士儕々たる中に、大阪には井原西鶴が居る、縦横の俳才をもて大矢數とて一日に千六百句また四千句を詠じて世人を驚かした。京都には菅野谷高政が居る、新調の鼓吹に力めた。江戸には田代松意が居る、延寶三年宗因の東下を請うて談林十百韻を連ね、爾後頻りに斯道の發展に就いて計畫する所があつた。談林の勢しかく盛なるや貞門との爭端を生ずるに至つた。延寶六年(二三三八)高政の『俳諧中庸姿』を出して頻りに貞門の法式を罵ると、貞門の中島隨流は『破邪顯正』を出して之に對した。岡西惟中の『破邪顯正返答』が出づるや、隨流はまた『猿とりもち』を出した。この論争は延いて元祿にまで及んだ。元祿五年(二三三五)隨流が『貞徳年代記』を出すや、弄松閣只丸は『只揃』を著はして之を罵倒した。是等の論旨はともあれ、創

作に於いては貞門は遂に談林の敵ではなかつた。勝利は談林の掌中に歸し、その俳風は一世を率ゐた。然しながら、談林の末流に至つては、粗放の修辭、難澁の風調、殆ど見るに足る者が無い。天和貞享の交には、其の蕪雜を厭うて、竊に他を欲する者も少くなかつた。加之談林には、早晩衰微すべき他の理由が存して居る。此の派には、つひに確たる法式を有しない、故に多少の才氣ある者は、直に判者たる事が出来るのであつた。随つて點者の數は多きを加へ、其の收入は減少し、はては富有の子弟に阿附して、幫間然たる者とならざるを得なかつた。宗因の歿後、直に西鶴が他の方面に轉じたのも、この間の消息を傳へるものでなからうか。されば、談林の末流の墮落しゆくも、之を救ふの策がなかつたのである。

第五章 古淨瑠璃

淨瑠璃とはもと『平家物語』を基とし、歌祭文等を撮合して作りなした叙事詩の謂である。その歌祭文とは、謠曲、舞曲、また佛説を題目とした一種の謠物なる説經及び山伏の祭文より一轉化したるものであつた。淨瑠璃の濫觴は、室町時代の末葉に於いて、『平家物語』に擬して作つた『淨瑠璃十二段草子』であるといはれる。

十二段草子とは、源義隆が倉田王丸と呼んだ時、駿馬を出で、奥州に下らうとする。次、三河、矢野の宿の長者の家に宿を取り、長者の女、淨瑠璃と云ふものに相逢ふ事。十二段に綴つたものである。その十二段に分けたのは、即ち『平家物語』の十二卷に倣つたものといはれて居る。作者は、織田信長に仕へた小野阿通であるといふ説があるが、信すべき證據を有つて居らぬ。

天文九年(二二〇〇)の守武千句の中に

いとゞだに座頭まがひの杖つきの

淨瑠璃かたれともしびのもと

今宵はや時はうし若ふけはて

とあるを見、また『宗長日記』享祿四年(二一九一)の條に、駿河の國宇津の山の旅宿にて、小座頭の歌、淨瑠璃を歌つたのを聞く記事があるので見ると、淨瑠璃の名稱は遠く天文

享祿の頃より存し、且又その流行は遠く邊鄙の地にも及んで居た事が知られる。

そのはじめに於いては、淨瑠璃を語るには、只扇を叩いて拍手を取るのみであつた。その餘風は遠き後までも、陸奥淨瑠璃として残つて居た。然るに、永祿中であらうか三絃が傳來し、文祿頃には石村檢校が本手破手の詞を定め、更に慶長の頃、澤村檢校が琵琶の平家に倣つて三絃を以て淨瑠璃を合せ弾くに至つた。これより詞章の如何

を問はず、三絃に合はせるものをすべて淨瑠璃といひ、やがて冷く此の音曲の名とはなつた。この三絃を使用した一事が、その詞章をして韻文の方面に大に進歩せしめる所のあつた事は、忘るべからざることである。

さはれ、詞章には未だ一の獨立したものなく、舞の本の中の『那須與市』『四國落』『元服會我』『小袖會我』『夜討會我』『和田酒盛』『景清』『大織冠』『伏見常盤』『堀川夜討』『敦盛』『滿仲』『高館』『百合若大臣』『八鳥』『入鹿』の如き、或は御伽草子の『御曹子鳥渡』『文正草子』『酒顛草子』『鉢かつぎ』『物臭太郎』『子敦盛』の如き、或はそのまゝに、或は多少の改削修正を施したるのみで、之を語つた。殊に『梵天國』の如きは、御伽草子に出でたものであるが、貞享元祿期に及んでも、なほ淨瑠璃の祝言には必ず之を語つたのである。

澤住の門人に目貫屋長三郎といふのがあつた。攝津西宮の傀儡師引田某を語らひ、淨瑠璃に合はせて人形を操る事を始めた。これが操芝居の濫觴である。はじめ散文的であつた詞章が、さきに三絃を得て韻文的となり、今また操を加へて戲曲的に發達する事を得た。この新文藝は大に時好に投じ、女流にも六字南無右衛門左門よし高等出で、四條河原に芝居を興行し、能狂言と駢馳し、その太夫は受領して禁闕にまでも召さるゝ者あるに至つた。さうして未だ作者を以て稱すべきものなく、從來の如く舞曲、御伽草子を反覆するのでなければ、太夫等が其の時々に自分々々で作り出したものばかりであつた。「都めぐり」は長三郎の作といはれ、阿彌陀の胸割は南無右衛門の作といはれて居る。

この新興の文藝は、新興の地なる江戸に據つて、はじめて特殊の發達をなすべきものであつた。澤住の門人で出藍の聞えある薩摩淨雲は、寛永の頃京より江戸に下り、中橋廣小路に於いて一流を語りはじめた。十二段を折半して六段となしたのは、その創意である。これより從來の新曲たる短い端淨瑠璃は、いつかその影を收むるに至つた。淨雲が語る詞章は、多く北條宮内の筆に成つた。憾むらくは其の正本が今傳はらず、たゞ當時の状況から推して、素朴の風體であつたことを知り得るのみである。その門に四天王の稱ある杉山丹後、櫻井丹波、薩摩長門、虎屋源太夫の名手があつた。

櫻井丹波は初名を和泉太夫といふ、江戸の剛健素朴の風尙に伴つて、節も振りも勇壯を極めた。二尺ばかりの鐵棒で拍手を取りながら語つた。「親丹波毎日岩をたゞきわり」といふ附合の句に、その狀を髣髴する事が出来る。その子の和泉太夫も、また毎日人形の損失を厭はず、人形の首をひき抜き、また打割り打ちつぶして語つた。こ

れ等の語る所は、荒唐無稽の英雄談で、その多くは坂田金時の子金平といふ勇武絶倫の士を主人公とし、之に配するに渡邊綱の子武綱を以てし、それ等が各謀反者又は變化怪異のものを取り拉ぐ武勇の行爲を叙述したものである。されば、その正本を金平本といひ、その節を金平節といふ。『金平化粧問答』『金平千人切』『金平法問答』『金平黒能』等はその傑作である。その作は千篇一律情緒の優しきものなく、誇張のあとの人をして厭はしめるものがあつた。この金平本の作者は岡清兵衛重俊であつた。清兵衛は詞才があり、また戦記の類を殆ど皆から暗記せるので、古事の引用に得意であつたといはれて居る。貞享四年(二三四七)の頃は、已に病歿したものとやうである。四宮彌四郎もまた其の執筆者の一人であつた。實に當時豪放の關東氣質は、なほよくこの金平本に血を躍らし、群衆相争うて鼠木戸におし寄せて來た。元祖市川團十郎の荒事は金平節を模したもので、また金平牛旁、金平糊等は、その武張つたことや或は強味のあることから取つた稱であつた。この趨勢は杉山丹波の子肥前椽の門弟江戸半太夫の江戸節、また半太夫の門弟十寸見河東の河東節など、優柔暢美の曲節を起す時までつゞいて居た。

保守的なる京都は、かくも江戸の淨瑠璃が隆盛を來せる間にも、なほ敬々として保はなかつたが、虎屋源太夫が寛文元年(二三二一)に江戸から上るに及んで、こゝにその流行を見るに至つた。大阪も之につれて漸く盛になつた。源太夫の弟子に井上播磨掾(二二九二、二三四五)があつた、通稱市郎兵衛、京の人、音聲大にして謠曲に通じ、江戸萬歳の節から悟入して一流を立て、寛文中大阪に下つた。『頼義北國落』『源氏筑紫合戦』『頼光跡目論』等に喝采を博し、大阪人でその口眞似をせぬ者はなかつたといふ。正本には文辭の未だしき所もあるが、天稟の音聲でよくそれを補ふことを得た。さきに淨雲によつて六段物となつた淨瑠璃は、この人に至つて五段物となつた。或はいふ、之は能の番組に擬したものであると。近松門左衛門もまた此の人のために、『天鼓』『甲賀三郎』『頼朝七騎落』等の諸作をなした。

源太夫の門に伊勢島宮内があつた。その宮内の門弟に宇治加賀掾(二二九五、二二七二)があつた。初名嘉太夫、當時流行の播磨節と謠曲の節とを折衷し、それを和げて一流を立てた。即ち加賀節また嘉太夫節といふのがそれである。その織巧婉美の曲は大に京の嗜好に迎合した。評する者はいふ、よはく、たよくとして美しいと。加賀掾また淨瑠璃正本を刊行し、始めて節譜を附けて上梓した。近松門左衛門も加賀掾のために、『徒然草』『主馬判官盛久』『當流小栗判官』『世繼曾我』の作をした。この

三人は實に元祿期隆盛の基礎を開いたものといふべきである。

延寶五年(二三三七)正月加賀掾が脇として抱へたものに、五郎兵衛といふがあつた。『西行物語』の二段目と藤澤入道夜盜の修羅とを語つたが、生得の大音で、甲乙相揃ひ、場内に響のぬ隈もない。聽衆の歡喜は大方でなかつた。この五郎兵衛こそ後に名高い義太夫であつた。義太夫はかくして立ち、近松門左衛門は已に立つた。幼稚であつた我が淨瑠璃の作、たゞ叙景道行にのみ稍苦心の跡を認むべき拙劣の正本は、こゝに漸くその趣を改めようとした。場所の變化時間の變化の急激にして不自然なるは、近松門左衛門を得てはじめて見るべきものあるに至つた。故に近松を以て一期を劃し、その以前の作を古淨瑠璃と總稱するのである。

第六章 假名草子

泰平の時に際して、しかも印刷術は發達した。室町時代以降筐底に潜められた幾多の草稿は、かくて相踵いで世に出でた。即ち御伽草子の類は大概その初期に於いて刊行せられたものである。正保三年(二三〇六)には『十二段草子』、明暦元年(二三一五)には『文正草子』及び『舞の草子』、萬治元年には『鉢かつが』の刊行を見る事が出来た。新なる小説もこれにつれて世に起るに至つた。こゝに小説とはいふものゝ、純文學としては未だ許し難きもの、たゞ趣向と構造とを小説に假りた教訓史實地理引法傳道の書に過ぎない。

その中にて最初に現はれたのは軍書の類であつた。興亡成敗の跡未だ新たにしないで、しかも當時に於いて多大の興味を催すべき織豊時代の史實は、追憶回顧のために、又毀譽褒貶のために、幾人かの筆に載せられた。小瀬甫庵の『太閤記』、太田一牛の『信長記』の如きはその一である。これ等は皆史實に忠ならうよりは、寧ろ世間の耳目を娛ますべき巷説を取り相像を以て潤飾したものである。たゞし、純粹の實歴談には、石田三成の臣山田志摩の女の見聞録たる『おあん物語』、大阪伏君の侍女なるものゝ見聞録たる『おきく物語』があつた。

地理に關するものには、中川喜雲の『京わらべ』がある。烏丸光廣の著と稱せられる『竹齋草紙』、淺井了意の『東海道名所記』、『江戸名所記』がある。風土景物を叙すると共に、輕妙なる滑稽をも交へて居る。殊に『東海道名所記』には、樂阿彌陀佛といふ一僧と、その道連の旅の男とを設けて、諧謔の言辭行動をなさしめる、蓋し當時に於ける巧妙なる脚色であつたらう。これらが後の『膝栗毛』等に於ける粉本となつたことは注意せ

ねばならぬ。

滑稽を主としたものの中に於ける尤なるものは、安樂庵策傳の『醒醉笑』である。四十餘類の下に、各數條の笑話を載せてゐる。これ即ち後の滑稽本の鼻祖たるものである。著者の自序及び板倉重宗の奥書によれば、徳川時代に於ける小説刊行の嚆矢であると思はれる。その他『枕草紙』に擬した『當世尤の草紙』がある、また『伊勢物語』に倣つて記した『仁勢物語』がある。『仁勢物語』は鳥丸光廣の作といふが、詳かでない。

而して、当期の小説の珍とすべきものは、『イソップ物語』の翻譯『伊曾保物語』である。この書は頗る世に行はれたものと見えて、慶長活字本以來數種の板本がある。しかも鎖國の方針は、遂に此の書を以つて、西歐文學移植の絶筆とせざるを得なかつた。翻譯者の氏名も翻譯の由來も不明であるは、遺憾に堪へぬ。またこの物語の影響の點も尋ねるよしが無い。たゞ爲永春水の『繪人教訓近道』中に、これに取材したと思はれものがあるのみである。

もしそれ一部の小説たる趣向を具へたものを求めんか、それは物語草子の脈をひいたものである。その著しきものに『恨之介草子』があり、『薄雪物語』があり、『藻屑物語』があり、『堀江物語』がある。『堀江物語』は男色の意地を旨としたので、井原西鶴の『本朝若風俗』卷三の四と同一取材に出で、居る。『薄雪物語』は園部左衛門が薄雪姫と契をこめた事、また姫の死後左衛門がその菩提を弔ふために佛門に入つた顛末を記してゐる。結構は平板であるが、記述の體裁は男女往復の書簡を以てしたのを特色とする。この書世にもてはやされた事大方ならず、刊行本の種類も多く、また模倣の書も少なからず出でた。『新薄雪物語』『錦木』『小夜衣』『雲の梯』などはそれである。

『恨之介草子』は葛のうらみの介が人目の關の繁さにおのが思ひ人雪の前に相逢はぬことを悲しんで悶死したのを、雪の前が傳へ聞いて自刃せる始末を記して居る。『堀江物語』は月若丸が悪龍に助けられて、父の讐を報い得たる顛末を叙述して居る。これ等は皆その行文こそ優美なる中古文の脈を逐うて絢爛を極めたものであるが、結構の平板なると情熱の缺之せるとは、甚だ飽足らぬものと思はれる。されど、これ等を以て當時に於ける小説の特有なるものといふ事は出来ぬ。實に当期小説壇の代表者を以て目すべきものは假名草子である。

假名草子は最もよく時好に投じ、また風潮に觸れたものである。若しその内容取材を以ていは、教訓また弘法の書である。併しながら、啓蒙を目的とするこの書も、さすがに文辭の優美なるをつとめて、趣味の喚發を求めたので、とにかくに小説とし

て取扱ふ事が出来る。その名稱は、學問無き當代の民衆に讀み易きやうに平易通俗なる假名文體をもつてしるした故に、附けられたのである。

この先驅をなしたものは、寛永十九年(二三〇二)刊行の『可笑記』である。作者如備子は、本名湯津式部、武士のなれの果といはれる。この書は幾多の短篇の説話を集めたものであるが、その中に筆鋒鋭利なる諷刺を含んで居る。この種の書は、もとより他にないではないが、後人多くは範をこれに取つた、されば近世戯作の祖と稱せらるるに至つた。

これについて鈴木正三の『因果物語』と『二人比丘尼』とがある。正三(二二四九-二三一五)はもと三河の武士であつたが、隱遁して著述につとめた。『因果物語』は因果の纏綿たることを示すために、世上の事實めかして數多の事例を作爲し彙集したものである。『二人比丘尼』は夫を失つた一女性が、なげきの餘りに夫の戦歿した跡を尋ねて、はしなくも骸骨の歌をきき、また一庵に同棲して居た女が死ぬる間もなくその遺骸が變り行く様を見て、眞に世の無常を悟り、孤庵の老尼のもとに走り入つて、念佛修行するに至る事を記したものである。その意は蓋し人生の如夢如幻の觀念を示すにあると思はれる。

これ等よりや、後れて『誰が身の上』『小さかつき』が出た。共に山岡元隣の著である。元隣(二二九一-二三三二)は伊勢の商賈であつたが、學に篤く、夙に儒學の研鑽に心を盡し、また北村季吟の門に入つて國學を學び、殆どその堂に入つた。著述は甚だ多いが、大方は古文學の注釋書である。たゞ文學的作物としては、前記の二書があるばかりである。二者はいづれも隨筆的の古いもの、その世にもてはやされたのは主として寓意によつてゝある。即ち神儒佛の三教一致を説ける點にある。そして『誰が身の上』には『可笑記』に私淑した痕跡が歴然として見える。『小さかつき』では、その巧妙なる比喩談を取るべきであらう。

以上の諸作家中、高く群を抜いたものは、淺井了意である。されど、その傳は詳かにする事が出来ぬ。たゞ諸國を流浪した一事は、『東海道名所記』の著述を以て推すに足りる。了意は別號を松雲また瓢水子といつた。元祿四年に八十歳前後で没したものと思はれる。その著述の多いが中に、啓蒙書としては『孝行物語』『堪忍記』『本朝女鑑』『大和二十四孝』『新語園』『法林樵談』等が聞えて居る。また隨筆體のものに『浮世物語』といふのがある。その體裁が已に小説をもて許し得るものとすれば、それは一篇連關の方便として主人公浮世坊といふ架空人物を設けた點にある。即ち人生の

あらゆる境遇を経験し盡した一侏儒が、諸大名の間を遊説して、滑稽諧謔の中に諷刺し教諭する有様を記述して居る。要は世人の運命の定つてゐることを知らずで逸樂に耽けるのを諭すにある。蓋し、その趣味の存する所は、同じ人の作なる『曾呂利狂歌咄』と同一のものである。

なほ了意が小説壇上に於いて重きをなす所以を考へると、それは『御伽婢子』の著があるからである。この書は『剪燈新話』中の幾條を翻譯して、また交へるに同一様の怪談巷説を以てしたのである。その旨とする所は勸懲の舊套に陥つてゐるとはいふものと、趣向の巧妙なると行文の流暢なるとを以て、俗に文學的作物として推稱することが出来るのである。されば、當時世人の喝采を博すること一方ならず、随つて此種の流行を來し、諸種の模倣の書を出し、その風は元祿以後にも及んだ。即ち『新御伽婢子』『古今百物語』『諸國新百物語』『拾遺御伽婢子』はかくして出たのである。文化文政度に於ける京傳・馬琴の怪談小説もこゝに起れるものといふべきである。また明治の落語家として高名であつた圓朝の十八番の一であつた『牡丹燈籠』も實はこの書の一話説を取つたのである。

啓蒙時代に於ける小説の叙述は、これを以て終らねばならぬ。要するに、教訓に累を及ばされた傾向小説は、決して小説の上乗たるものではない。殊に内容の蕪雜を極めた事は、厭忌すべき極である。しかし、これが後の浮世草子を起さしめたことに思ひ及ぶならば、その陳吳たるの功は忘れることが出来ぬ。

第二期 元祿時代

第一章 時代の概観

啓蒙の時代はすでに終つて、一般知識の普及は漸くその實を擧ぐる事を得た。これを典籍の上に見れば、幾多の講義物が出で、字彙（カ）で、節用集の類が相踵いで出た。黄楊版は早くも用ひられて、袖珍本も行はれた。通俗平易を以て聞えて居る宇都宮遯菴の著書も、標注家を以て知られてゐる松下見林・毛利貞齋・黒川道秋等の著書も少なからず世に流布せられた。かくの如く、いまや文藝は發展の素地をなし得た。に、しかも上には文藝の保護者その人をも得た。その第一に指を屈すべきは將軍綱吉である、即ち將軍自ら毫を揮つて大成殿の扁額をしるし、また林鳳岡をしてその道服を脱せしめて儒者の體面を保たしめた。されば、諸侯にも文教に力も致すものが相ついで輩出した、殊に特筆せざるを得ないのは水戸侯徳川光圀である。

光圀は家康が基を開いた當代初期の學術を大成したものといはうか。修史局即ち後の所謂彰考館を設けて『大日本史』及び『禮儀類典』『扶桑拾葉集』等を編纂した。その『大日本史』を編するや、標榜するに大義名分の闡明を以てしたのである。かの神功皇后を皇妃傳に加へたる、弘文天皇を本紀に收めたる、また南朝を正統となしたる、所謂三大特色の如き、傳承を事とした世に、しかも幕府の近親たる地位にあつて之を立言したのは實にその卓絶せる識見に驚かざるを得ぬ。光圀が『大日本史』編纂の動機は、林春齋が著した『本朝通鑑』の中に、我が皇室の祖は吳の太伯の後であると記したを見て大に發憤したのであるといはれる。實に國民的自覺といはうか、我が國體の尊重すべき所以を知つた國民の自覺は、やがて後の國學を興起せしめ、また元祿文學のすべてに亘つて躍如たるものあらしめたのである。

光圀はまた『萬葉集』が高閑に束ねられて顧られざるを慨き下河邊長流に囑し、ついで契沖に托して、その注解を作らしめた。『萬葉集代匠記』はかくして成つたのであるが、和歌界に於けるこの一現象は、たまたま以て元祿文學の最も重きをなす特色の一を示して居る。習慣の打破、束縛の脱却、その創意的にして建設的なる事、即ちこれである。これを事例に於いてすれば、伊藤仁齋、赤松菴、生徂、徂の漢學に於ける、契沖、荷田春滿の國學に於ける、松尾芭蕉の俳諧に於ける、近松門左衛門が戯曲に於ける、井原西鶴の浮世草紙に於ける、皆その顯著なるものである。

元祿文學の他の特色は、平民文學といふ事である。前期の文藝は過去の殘影を以て京都に現はれた。今や移つて大坂のものとなつた。江戸は八百八町たゞ整頓の緒に就きそめたに過ぎぬが、大坂は商業の中心地、富有商賈の集れる所、周防山口と交通して夙にその趣味性を涵養せる堺町民の移住せる地、わが平民文學はこの地を得て大に發達するに至つた。されど、大坂のみか、元祿の世は遂に町人の世である。誰か紀文、奈良茂の豪奢、淀屋の分限に驚かぬ人があらう。清水の舞臺に石川六兵衛の妻が難波屋十右衛門の妻と衣裝競をしたる、嵐山に緒形光琳が蒔繪したる竹の皮を惜しげもなく河水に投じたる、肝つぶれる業ではないか。人生の享樂はこの時に極つたのである。それ唯現世である、今様である、浮世である。浮世繪と浮世草紙はいふまでもない、楊枝にも、囊にも、笠にも、藏にも、住家にも、皆浮世の名を冠せない者はない。されば平民文學たる元祿文學は現代謳歌の表現にして現實讚美の象徴である。その謳歌の聲が三ヶ津に溢れるはいふ迄もない、中にもその焦點たるものは二つ、その一は劇場にして、他の一は遊廓である。

京に坂田藤十郎芳澤あやめが出で、優婉の藝をもつて鳴り、江戸に市川團十郎があつて剛健の技を以て聞えてゐる。定紋うつた櫓の美々しさ、かの四條橋畔の莖張の小屋掛は昨日の夢となつた。操座また極度の發達をなして、これに對峙してゐる。人形のひく手さす手に人は恍然として酔心地の中に在つたのである。もし元祿文學にして、近松門左衛門を缺いたならば、その寂寥はいかゞであらう。

京の島原、江戸の吉原、大阪の新町は、今や宛然たる喜見城を現出して居る。抑、武士道は意志の鍊磨より來る。その峻烈秋霜のやうな制裁の下をしばし遁れて、思ふがままに嬉遊する事が出来るのは遊廓である。京の女郎に江戸の張を持たせ、長崎の衣裳着せて、大阪の揚屋に遊びたしとは、誰しも口にする所であつた。何時も何處も變らぬ誠こそ戀の道、されば當代文藝の源泉は、大方こゝから發したのである。

しかもなほこれ等粹客が或は大門を打ちたる、或は蕎麥を買ひ占めたる、或は幾百の小蟹に金泥もて比翼紋を描いたなど、豪興自ら喜びて他に負けじ劣らじとする廓の懸引き、即ち通客の意氣地や、また千金を顧みず權貴に屈せざる傾城の意氣地や、これ等元祿世相の一特徴であつて、また當代文藝を活躍せしめる所以である。げに元祿文學は同じ平民文學とはいふものの、天明のそれと比べると、彼の柔弱はなくして、よく豪健に彼の技巧に陥るの弊もなくして、よく眞情を吐露して居る。優美のうちにまた雄偉の面影をやどしてゐるは、實にこの平民の氣魄の然らしめる所である。

元祿文學の他の特色は、感情の横溢といふ點にある。元祿は感情の世である、少くとも平民文學に現はれたのは感情偏重の世相である。否、さらに將軍綱吉の初年と晩年とに於ける政事の激變を思ひ見ると、遂にこれ感情の時代であつた。こゝに吾等は尙武と勤儉とまた法律道德とを以てせる禁壓の力にも屈せず撓まざる民衆の生々活躍の聲を聞くことが出来た。自由の行動をとる人生の喜悅の聲を聞くことが出来た。されど、その聲は感情の解放によつてのみ放たれたのであつた。それも、教養僅かに八十年、知識の活動のこれに伴はなかつた故とはいへ、眞に遺憾の極であつた。されば、予輩は元祿文學によつて人生の光明に接し歡樂に酔ふものゝ、その歡樂の極といふ哀傷の如きは、深き自省を缺く當代の人の遂に與り知らざる所、まして人生の矛盾社會裏面の疑問の如きは、すべてこれ風馬牛であつた。西鶴の如きは、おもふに筆おのづとそその一端に觸れたに過ぎなかつたのであらう。

これを要するに、當代の文學は、活動的なる點に於いて、積極的なる點に於いて、創意的なる點に於いて、その眞價を見るべきである。されば、各自個性を發展して、幾多の

新様を見た。その弊は知識の未だしくて、隨うて内省の淺薄なる點、深刻を缺ける點に存して居る。されど、この弊はひとり當代の缺陷のみならず、我が國文學全般に亘れるものである事を記憶せねばならぬ。

第二節 漢學の隆盛

五代將軍綱吉は儒狂をもつて目せられた程の好學の君であつた。されば學者の優遇登庸はいふまでもない、自ら諸侯を召して殿閣に經書を講ずる事も少くなかつた。上の好むところ下これより甚しきはなく、諸侯も亦これに倣ふもの多きを加へた。折りから明客朱舜水と陳元贊とがたま／＼來朝歸化した。舜水字は之瑜、明の衰微するに及んで我邦に投じたのであるが、やがて水戸侯に聘せられて賓師の禮をもつて遇せられた。その文集二十八卷は皆水戸侯光圀父子の編輯に係れるもの、しかも光圀毎卷署名して門人といへる、世にいみじき美舉であると稱せられた。元贊字は義都、尾張侯に徵されてその學政に當り、後また京でも、江戸でも、諸名士にして風雅の交を結んだものが多くあつた。中にも僧元政と唱和した『元元唱和集』は夙に世に傳唱せられた。蓋し元政が中郷に私淑するに至つたのは、元贊が誘導した故であらう。かくの如くにして、二客の流風餘韻は、暗にまた我が元祿漢文學界の一勢力をなしたのである。

この時林家には鳳岡(一六四四—一七三二)がある。名は信勝、羅山の孫で、春齋の子である。これよりさき、羅山私に書院を忍岡に建て、弘文館と名づけ、孔子及び十哲の像を安置奉祀して居つたが、元祿四年に至り鳳岡は幕命を奉じて之を湯島に移して官祀とした。同年、鳳岡また命をうけて髮を蓄へ、大學頭となり、名をも信篤と改めた。これ、鳳岡がかつて、儒は人の道、人の外に儒の道なし、ざるを制外の徒となすは非理である、と主張した言の嘉納せられたのである。惺窩、羅山の徒にして、なほ圓顛であつた積弊は、こゝに於いて始めて息む事が出來た。鳳岡は銳意『武徳大成記』を修め、服忌令を定むるなど、官府の纂輯に力むる所があつた。されど、林家は學權の壟斷をこれ事として、敢て新研鑽に入るものでなかつた。故に談論の旺盛はこれを他に求めねばならぬ。

一代の通儒に木下順庵(一六二一—一六九八)がある。名は貞幹、號は錦里、また慎齋といたうた。講書堂下の出で、朱學を信ずる事が篤かつたが、なほ進んで古註をも併取した。或はいふ、順庵つねに『十三經注疏』を手にし、また自らいふやう、之を熟讀するにあ

らずば經に通せりとなさずと。加賀侯に聘せられて江戸の邸に居り、後また幕府に召されて修史にたづさはつた。順庵はひとり識見の高いばかりでなく、辭藻にも富んでゐる。『錦里文集』は以てその醇正の風格を知る事が出来る。韓人の對馬に至るもの、必ず順庵の文を求めたといふ事である。かの倨傲なる荻生徂徠にして、なほ錦里先生出で、扶桑の詩皆唐なりといふに至つた。

その門下には俊才の士が甚だ多かつた桃李門に満つといはれた。その中にも五先生、十哲、二妙の目がある、何れも實用の才である。柴野栗山のいふやう、盛なるかな錦里先生の人を得たるや、大政に參與するは源君美在中室直清師禮、外國に應對するは雨森東伯陽松浦儀禎卿、文章には祇園瑜伯玉、西山順健、甫南部景衡、博該には神原玄輔、皆瑰奇絶倫の材なり。その他、岡島達之至性、岡田文之の謹厚、堀山輔の志操、向井三省の氣節、石原學魯の靜退、亦た得易からざるものにして、師禮の經術、在中の典刑、實に曠世の偉器、一代の通儒なり。夫れかくの如き數子の資を以て終身先生の訓を奉遵服膺して、敢て一辭も異同あらず、先生の徳と學とを想ふべきなり」と。

木門の正統を繼承したものは室直清師禮(一六八一—一七三四)である。直清は鳩巢と號し、師禮はその字である。はじめ加賀侯に仕官したが、後に同門新井白石の推舉によつて幕府の儒となり、八代將軍吉宗の優遇をうけた。『六諭衍義大意』五倫五節名義』は皆その命を奉じて撰したるものである。享保中、徂徠が古文辭學を唱へて一世を風靡せし際、これと相對峙して學界の重鎮であつたのは、京の伊藤東涯と江戸の鳩巢とがあるのみであつた。鳩巢は堅く朱學を信じた。されば、當時異說の紛々として起るを見て、これを憤慨し、みづからもかやうの中に翁が道德もなく材力にも拙き身をもて是を支へんとするは誠に大厦の一木といふべし」といひ、奮つて名教の維持につとめた。その詩に至つては、よく醇正の風を保ち、中にも五言排律は豪健を以て擬せられた。その文集に前篇十四卷、後篇二十卷、補遺十一卷がある。鳩巢にまた『駿臺雜話』の著がある。蓋し和漢混和文の上乗であらう。それに就いては次節に説くこととする。

當時貝原益軒(二二九〇—二三七四)もまた博洽をもつて聞えてゐる。益軒名は篤信、字は子誠、筑前の人、黒田侯の臣である。はじめ陸王の學を好み、やがて朱陸兼用の意もあつたが、寛文五年三十六歳で、陳猷章が『學蔀通辨』を讀むに及んで、陸氏の非を悟り、盡くその舊學を棄て、朱學に専心し、『近思錄備考』、『小學備考』の著述がある。されど、正徳四年(二三七四)八十五歳の時、『大疑錄』を著はし、朱子の學說に對する疑惑を録し、朱

子の理氣二元論を斥け、理氣合一を主張した。さはいへ、益軒の偉大なる點は、訓蒙にあり、社會教育にある。諄々説いて俺ます、淺俗また避けざる態度にある。所謂十訓の書は、この意味に於いて和漢混和の文體を取つて居る。

かくの如く、順庵は新古註の併取を志し、益軒も亦朱學に對して疑を懐くとはいへ、なほ朱子學の統を承くるものである。而して、その朱子學の堅壘に堂々として迫るものは、實に伊藤仁齋と荻生徂徠との二人である。

さはれ、仁齋を説くにさきだつて、まづ山鹿素行に就いて一言せざるを得ぬ。素行(二二八二、二四五)名は高興、字は子敬、因山と號し、軒を素行と號した、陸奥會津の人。寛文六年『聖教要録』を著はし、漢唐宋明の諸説を論破して、古學の取るべきことを唱へ、はては舊師家たる林家の學風にも反抗せんとする色があつた。この學派の衝突により、遂に素行は播州赤穂に配流せらるゝに至つた。されどそは寧ろ素行が兵學者として名聲世に藉甚し、その門に弟子の禮を取るもの實に二千人の多きに出づるを以て、はしなくも幕府の忌憚にふれたからであつた。素行はもと兵學に精通して居るが故に、儒教を以て武士道を闡明し、前人未發の言を『要録』中に載せてゐる。これ實に『山鹿語類』と共に歩士道の聖典と稱すべきものである。素行の赤穂に在る配流の十年

と、その以前に賓師として仕へたのを合せて、前後十九年の久しきに亘つてゐるが、その流風餘韻はよく發して大石良雄の義學をなさしめたのである。かくの如くにして、素行は古學の祖を以て目すべきものであるが、その説くところは未だ斷片の論述に過ぎぬ。その一系統を具し、一學派を樹立したのは伊藤仁齋を以て嚆矢とする。

仁齋(二二八七、二三六五)名は維楨、字は源佐、京の人である。處士を以て居り生涯仕へず、堀河に古義堂を開いて子弟を教養した。はじめ『李延年問答』を熟讀したる餘りに思を性理の學に潜めたが、後にその説が孔孟の眞面目を去ること遠きを疑ひ、大に考究に力め、遂に一系統を具したる一學説を成して古學の一派を開いた。まづ朱子學説の理氣二元論を破して一元論を取り、宇宙は一元氣の活動より成つてゐる、即ち宇宙の間、死なく、靜なく、惡なくして生あり、動あり、善ありとて、今の所謂活動主義に近き言をなした。さらに道を以て仁義とし、禮智は仁義より出づるものとした。この四者に就ては、宋儒の之を性となすを排し、性は人毎に異なるけれども、道はすべてに亘つて通ずる、人は孟子の所謂四端を具へて居る故に之を擴充すれば即ち、仁義禮智に至ると説いた。仁齋はまた、『大學』は後人の著、『中庸』は後人の筆の擡入せる者の多いというて遠け、言辭を極めて『論語』を揚げ、『孟子』は『論語』を敷衍せるものであるとし、ま

づ『論語』『孟子』を讀破して天地間の理を知り、後『五經』によつてその應用を領すべし、これ實に直に孔孟に接する所以であると説いた。或は仁齋の説を以て剽竊に出づとする人あるが、その人となり知らぬものゝ見である。仁齋は寛仁溫和の君子、人に接するには一に至誠を以てした。母の病に侍すること三年、諸侯の招聘にも應ぜなからず、一日も奉養を廢することがなかつた。その生徒に教へるにも實踐躬行を以てし、許氏月旦評に擬して、その人物性行を評して之を奨勵するなど、専ら德行を琢磨するに力めた、随つて深く意を辭藻に致さしむる事がなかつた。されば、みづからの文章に於いても正大見るに足るものもあるけれど、大方は平穩に過ぎ、時にまた和臭に堪へぬものが多い。されど、仁齋また譯文會を創めた事があつた。古文を假名交り文に書き改め、更にそれを原文に復して、文辭の鍊磨に資したのであつた。

その子の東涯(二三三〇・二三九六)名は長胤、字は原藏といつて、父の所説を守つて銳意堀河古義堂の經營に當つた。かくて爾後子孫世々家學を繼承して、敢て家聲を失墜することがなかつた。されば、太宰春臺かつて師の荻生徂徠と對比して、仁齋に及ぶべからざるもの三あり。學師傳に由らざる一なり、仕へざる二なり、子東涯ある三なり、物先生此に一あらざるというた。

東涯は文辭の巧妙を以て實に父を凌ぐものがある。されど、溫厚の資性は遂に氣魄乏しく、たゞ文に疵のないのを以て足れりとせざるを得なかつた。その著に『紹述先生詩文集』『紹述遺稿』がある。また初學の便をはかりたる『用字格』和漢の熟語を収録したる『名物六帖』、文字音訓の異同を記したる『操觚字訣』等の著がある、皆行文の資料たるべきものである。

京學は、仁齋東涯を得てまさに盛なる時、江戸に荻生徂徠があつて古文辭學を唱へはじめた。徂徠(二三二六・二三三八)名は雙松、字は茂卿、徂徠はその號である。その社號を護園といふ、萱葉町に住居した故に稱した。その姓は物部、故に自ら修めて物氏といふ。はじめは兵學を以て柳澤吉保に仕官した。徂徠かつて仁齋が説く所の古學を駁し、『護園隨筆』を著して朱學の回護に力め、大にその名を知られた。後に、その學風は一變して、古學を唱道し、朱學を斥けた、しかもなほ常に仁齋に挑むところがあつた。蓋し學説の異同によるといふよりは、寧ろ個人としての憎惡が然らしめたのであつた。徂徠が仁齋の説に服して書を贈つた時、如何なる故か、仁齋は答へなかつた。傲岸徂徠の如きもの、如何でか之に堪へ得られやう、爾來機ある毎につねに攻撃の矢を放つた。『辨道』『辨名』『論語微』は、即ち仁齋が『童子問』『語孟字義』『論語古義』に

對抗しやうがための著述であつた。もとより、徂徠は温厚篤實なる經學者ではない、縦横辯難の論客である、故に滿腔の霸氣到るところに論争を來さざるものなく、随つて字士新右川麟州、蟹養齋、森東郭、五井蘭州、中井竹山等をはじめ、徂徠の學說とまたその性行とを非難するもの生前にも死後にも多くあつた。

徂徠の學說は、おもふに荀子に出でたのであらう。その説くところの道とは、禮樂刑政である。先王の道は天地自然の道ではない、先王の造るところである。その先王の道とは實に治民の要具である。かく功利主義の樹立した徂徠は、政治を主として、修徳を第二次のものとするに至つた。

徂徠は古文辭學を主張した。程朱は古文辭を知らぬ故に、『六經』に通ずるところがない、今文を以て古文を見る、いかでか先王孔子の教を闡明する事が出來やう、古文辭を學んで後にはじめて古道の復興をはかる事が出來得るのであると。徂徠がこの主張をなすに至つたのは、李王等いはゆる明の七才子が先容をなせるものあるによるのであつた。李王とは李攀龍、王元美の二人である。二人の文は古詞古句を補綴する擬古體を旨とした。徂徠はこの文章上の主張を經學にまで及したのであつた。故に徂徠は一面に於いては修辭を以て研究の對象とした。されど、その作るところ

の文の如きは、經史の成語を用ひ、時に或は艱澁讀むに堪へざるものがあるが、その氣概の横溢せるは、當時天下獨歩を以て稱すべきものであつた。かくの如きは、徂徠一人をまつて始めて然るべきのみで、その徒に至つては遂に體を成さない、護園派の人たる太宰春臺をして、なほ糞雜衣と叫ばしめるものがあつた。徂徠は詩に於いてもまた李王の後を襲ひ、擬古の體を主とする、また『唐詩選』を誦して措かない、故にその詩風は純たる唐詩の趣を具して居るものであつた。

徂徠はもとより經義を説いた、説いたけれども敢て實踐躬行を力めない。天下の經綸に就いては飽かず上下するけれど、その身の修養に就いては毫も顧るところがなかつた。自らいふやう、熊澤蕃山の知と、伊藤仁齋の行と、之に加ふるに我が學とを以てせば、東海はじめて一聖人を出すべきであると。その意の存するところが察せられる。されば、常に宋儒及び仁齋の徒を道學先生と稱して、嘲罵の的となした。雨森芳洲はその子の顯允をその塾に託したが、そこに子弟を寄するの危険なるを慮つて、つれ歸つたといふことである。しかく門下を率ゐること寛大で、清濁併せ吞むの概があつた。その學則に、學寧ろ諸子百家曲藝の士たるも、道學先生たるを願はずと。故に、門下よりは幾多の無賴遊蕩の兒を出すに至つた。その後、學徒分れて二となる。

一は詩文に越れるもの、これその本系である。一は經學に力むるもの、これ旁系である。太宰春臺は前者の雄、嚴毅自ら持して德行一世に高い、學は徂徠に承けたけれど、修養の點に於いては仁齋に私淑して居つた。服部南郭は後者の覇、その徒甚だ多く、次期に於いて詩文の精彩を發揮した。

第三章 和漢混和文

漢學は幕初以來徳川氏歴代の獎勵を蒙り、我が國未曾有の隆盛を極めた。されども、漢文は専門家ならざるものが容易に解せらるべきものではない、故に文教を弘布する必要に迫られた漢學者は、恰しくも一種特殊の國文を草して、その需に應じた。國語に漢語を混和せる文章が即ちこれである。文法上多少の疵瑕を有して居るに拘らず、亦好箇の國文である。縦横自在なる筆勢、跌宕雅健なる文體を以て、深遠なる學理を闡明するところ、往々國學者の散漫に失せる文に優つて居ることが多い。

一體和漢混和文とは、文學の特殊の種類ではなくて、文體の上から見た名稱である。されば前時代に於ける軍記物も亦一種の和漢混和文に相違ない、されどかの軍記物にあつては、ひたすら修辭の絢爛なるを求めて、對句疊句を重ね、範を四六駢聯文に取つてゐる。和漢混和文はさうではない。その骨法は多く唐宋の文體に求めて、必ずしも詞藻の美を要めなかつた。

前期に於ける林羅山の著書の中に『大學和字鈔』の如き混和文體の述作があつた。その文章はいまだ生硬を免れなかつたが、彼の道春點と唱ふる『四書』の訓點が、後に出でた後藤點または一齋點に比して、遙に國語の格に合つてゐるのを見ると、その如何に國文に通じてゐたかを知る事が出来る。

熊澤蕃山の著書三十餘種、悉く混和文を以て記してゐる。『集義和書』『集義外書』等を主要なものとする。蕃山の文章は暢達にして明瞭である、しかし惜いかな平板無味である。

伊藤東涯の『鄒魯大旨』『訓幼字義』『學問關鍵』『唐官抄』いづれも和漢混和文を以て記述したものであるが、『輜軒小錄』『秉燭談』といふのが混和體の文章として最も勝れてゐる。

東涯と時を同じうした荻生徂徠は、もとより文辭に富んでゐた。『政談』『南留別志』『護園談餘』等は混和文を以て記したものである。その高足たる太宰春臺の著『經濟錄』『獨語』も亦混和文をもて書かれてゐる。

その他、學者雲の如く起り、儒學の隆盛眞に空前絶後を極め、古學者あり、朱子學者あり、陽明學者あり、政治家あり、操觚者あり、著書に、編述に、仁義道德を叙し、經世治民を説いたので、随つて和漢混和文も亦大に發達した。その中で、貝原益軒、新井白石、室鳩巢の三人が最も傳ふべきである。

貝原益軒については前節すでに之を叙した。その著書一百餘種皆實用を主として、平易なる和漢混和文を用ひ、婦女童幼にも理解し易からしめた。されば、その文は謹嚴にして懇切であるものゝ、また冗漫重複に失する嫌がないでもない。『初學訓』『童子訓』『大和俗訓』『養生訓』『家道訓』『樂訓』『君子訓』『武訓』『文訓』『五常訓』の所謂十訓の如きは、處世の道を説いて周到を極むること、老人が兒孫を捉へて諄々と説く趣がある。益軒の所説は、個人の徳性涵養の必要をいふと共に、完全なる人格の養成を旨としてゐる。教育者として偉大なる益軒は、家庭教育を重んじ、世務の通曉を主眼とし、悟性の開導を主とし、思想の獨立を求めた。その識見のいかに當代思潮の東道たるべきか、知られる。益軒はまた暇があると則ち名所舊跡を探つて、足跡を印せざるところ殆んどなかつた。『大和廻り』『京廻り』『岐蘇路の記』等は雅醇を以て聞えてゐる。『日本釋名』と題せる書は、わが國語の性質根源を説明したもの、もとより牽強

附會の辯が多いとはいふものゝ、實にわが國に於いては、言語學に關する書典の先驅であつた。

新井白石(二三一七二三八五)通稱は勘解由、初の名は璵、後に君美と改めた。幼にして岐嶷聰敏、長ずるに及んで大志を抱いた。曰はく、大丈夫生きて封侯たらずば死して將さに閻羅王となるべしと。順庵の門に入つて經史を攻究し、努力衆に超えた。天和二年古河の堀田侯に、仕へたが志を得ずして退き、元祿六年徳川家宣がまだ甲斐にある時に徴されて儒員となり、その將軍職を拜するに及び、随つて幕府に入り、累進して從五位下筑後守となつた。その待遇は一侍講たるに止まらず、内外政務の顧問として獻策するところが多くあつた。朝鮮の來聘使接見の際、彼我の名分を正せる、惡貨鑄造の改善について、勘定奉行萩原重秀を彈劾せる、さては林信篤と將軍家繼の服喪の事を論じたる、世に名高いものである。將軍吉宗が統を承くるに及び、致仕して老を明窓淨几の間に養ひ、享保十年に卒した。

白石博學洽聞にして識見甚だ高く、その施すところは専ら實用の方面であつた。木門に居た時から、師の問に答へて、天下有用の學をなすというてゐた。嘗て儒の本義を説いていふやう、

聖人の道は人道なれば、人間日用常行の外に出でず。人とは何ぞ。君臣父子夫婦兄弟朋友より天子卿大夫士庶人なり。道とは何ぞ。孝悌忠信禮義廉耻理世安民等の道なり。智仁勇といふも、仁義禮智といふも、語かはりて實は同じ。此の外に出で、道を行はば、廣大微妙を極むといふとも、徒らに無用の論にして、實行といふべからず、子思孟子より以下いまだ此の弊を免れ難し。

と。されば白石の所説は飽くまで功利實用にして、心性理氣の説の如き、宗教の如き、形面上の考察は、全く無用の論として看過したのである。故に白石は、政治家として、外交家として、また理財家司法家として、よく幕府の諮詢に應じて、一々之を『六經』に質し、史乘に照らして應答した。さはれ、文學上に於ける白石の偉績は、なほこれにも勝れるものがあつた。著書實に二百餘種、巧妙なる和漢混和文を以て記述したものが多い。年の若い時分には俳諧にもたづさはつて、桐蔭といふ俳號があつた。詩は盛唐詩人の風格を摹して、詩趣溫雅にして華麗に、頗る清新の趣に富んでゐる。江村北海は彼れの詩を評していふ、天受敏妙、ひとり藝苑に歩す、錦心繡腸、咳唾珠を成し、曠語韻に諧ふものといふべし。これを異邦の古詩人中に索むるも、未だ多く得べからざるものなりと。その著書の中、國文學史上に於いて重要な位置を占むるものは『藩翰譜』『讀史餘論』『古史通』『折焚く柴の記』である。

『藩翰譜』は白石が甲府にあつた時、君命を奉じて撰んだもの、慶長五年より延寶八年に至る八十餘年間に於ける列侯三百三十七家の史實を詳述してゐる。その文章は適勁にして明瞭、よく錯綜せる事實を縦横に描寫してゐる。川田甕江かつて『藩翰譜』を評して、叙事の明晰奇雋、司馬遷の壘を摩すと言うた。これわが國叙事文の上乗にしてまた混和文の至粹といふべきである。

『讀史餘論』は正徳二年春夏の交、將軍家宣の命によつて、わが國古今の治亂興廢を論じた講本である。文致は『藩翰譜』よりも劣つてゐるが、論旨燃犀能く史論の體を得てゐる。或はいふ、北畠親房の『神皇正統記』を模するところが多いと。されど、わが國の大勢九變して武家の世となり、武家の世又五變して徳川氏に及ぶ所以を論明したる、治亂興亡の機微に通ずるものでなくては、到底なし能はぬことである。『藩翰譜』に於いて、その史眼を具する事を認められたものは、この書を見るに及んで、いよくその感を深くする。頼山陽が『日本史外』を著はした時、その所論に於いて『讀史餘論』を参考したこと、この少くなかつたのも、畢竟これが爲であつたらう。

白石の史眼の高きは更に『古史通』があつて之を證してゐる。『古史通』は語源を本と

して我が古史の事實を闡明したものである。「神代を知るには、まづ古語に通せよ、しかも史實は『古事記』をもつて信憑せよ、たゞし神名地名のみは、しばらく風習に従うて『日本書紀』によれ」と。『古事記傳』以前に於いてこの言ある、加賀侯松雲公をして本邦第一の書を以て推稱せしめたのも、ことわりといはねばならぬ。

『折焚く柴の記』は、白石の自傳を記した書である。その記事波瀾多く、また變化に富めるものゝ、惜しむらくは叙述の冗漫を避け得なかつた。しかし混和文體の中に雅文の趣を具へてゐる故に、流暢誦するに足るものがある。

その他『東雅』の國語の歴史及び語源を述べ、『東音譜』の綴字法を述べ、『同文通考』の假字を述べたのは、語學上の意見を知るに足る。『采覽異言』『西洋紀聞』等は外來語研究の先驅をなせるものである。これ等の所説は、よし幼稚なるにもせよ、尙ほ白石が言語學者として貢獻するところの少なからぬを認めることが出来る。

白石と同門の儒に室鳩巢のあつたことは已に述べた。鳩巢は幕府に仕へたが、享保十二年以來脚疾を患ひて、再三老を養はんことを乞うたが遂に允されず、邸宅を駿河臺に賜はり、なほそこに住居する事を許されたので、世に駿臺先生と呼びなされた。その著『駿臺雜話』『鳩巢小説』は混和文として有名である。

『駿臺雜話』は、病間に門人弟子を集めて講論したものを叙した隨筆で、やがて將軍吉宗に奉つたのである。記する所は正道を明かにし、邪説を辨じ、すべて學問の大綱に係り、又世俗の諺、卑近の語といへど、平生の事に通じて觀省の益ともなるべき事どもを採りあつめて述べたものである。その文章は和漢の故事を引用することが多きに過ぎ、ために意味の晦澁を招いた跡はあるが、要するに森嚴にして而も興味に富んでゐる。著者本書の例言に於いていふやう、國語大やう古雅に従ひ世俗の卑しき語を避くると雖も、事情近く人聽に切なれば、たとひ鄙語にても、そのまゝ取用ひて擇びすつるにいとまあらずと。本書實に雅俗の語をかきつらねて、流暢なる筆致である。

『鳩巢小説』は『鳩巢逸話』ともいひ、その見聞録である。文章は『駿臺雜話』と同様である。この時雨森芳洲(二二八一—二三六八)がある、木門五先生の一人である。師の推薦によつて對馬侯に仕官した。芳洲は支那音及び朝鮮音に通達し、その使節に對應するに、自在を極めたといはれてゐる。また詞藻に富み、辭章明晰優麗である。師順庵の才藻の卓絶せるを稱して、後進の領袖というた。芳洲また八十一歳で始めて和歌に志し、『古今集』を讀むこと一千回、三年の間に詠するところの歌一萬首に及んだといふ。著書の中に『橋窓茶話』及び『多波禮具佐』がある。混和體の文章を集めたもので、雅

文の調を帯びてゐる。

これ等の人々の外、中井登庵の『とはすがたり』、柳澤淇園の『雲萍雜志』等も亦世にその名の聞えてゐるものである。

元祿時代はかくの如くにして過ぎた。今叙述の便に隨うて、こゝに天明寛政以降の和漢混和文に就いて記さうとおもふ。文運東遷時代に入り、化政時代に入るに及んでは、漢學者はますます出で、漢詩漢文に堪能なる者はいよゝ多きを加へた、されど、和漢混和文に巧なるものは比較的になくなつた。たゞわづかに中井竹山の『草茅危言』、湯淺常山の『常山紀談』、菅茶山の『筆のすさび』、成島司直の『徳川實記附録』、太田錦城の『梧窓漫等』、朝川善庵の『善庵隨筆』、橋南谿の『東西遊記』、藤田東湖の『常陸帶』等の數種があるのみである。おもふにこれ、國學者と漢學者との間に漸く溝渠が穿たれて、二者相反目誣排するに至り、漢學者は國文の長を棄て、破格反則の文をなし、國學者は漢文の雄健を顧みずしてひたすら軟弱朦朧に走つた故であらう。

漢學者以外に於いては、伴嵩蹊の『近世畸人傳』、閑田次筆の『富士谷御杖の』、北邊隨筆、山崎美成の『名家略傳』、『提醒紀談』、『耽奇漫錄』、『三養雜記』がある。

化政時代の戯作者中には、學識の豊富と共にこの文體にも長ずる者が少くなかつた。曲亭馬琴の『燕石樓志』、『玄同放言』、『京雜の記』、また種彦の『用捨箱』、『還魂紙料』等は、この文體を以てせる隨筆書である。皆縦横の筆致を見ることが出来る。

第四章 和歌壇の廓清

前期すでに木下長嘯子及び下河邊長流が、和歌の革新を説きはじめたことは、曩に記述した。而して、言たまゝ江戸の先覺者戸田茂睡の上に及んだのであつた。

茂睡(二二九五—二三六六)初名は恭光、長流に後るゝこと六年、契沖にさき立つこと十一年に生れた。もと本多家に仕官せしも、天和元祿の際老を告げて世を遜れた。梨のもと、また、もとのぬ橋と號するは、その居所によつて呼んだのである。性質淡如名利を外にし、みづから詠じていふ。

塵の世と思ふ心のつもりては世のかくれ家の山となるらん
時の人よりて、かくれ家の茂助と稱した。元祿五年、當時の詠を集めたる和歌集『鳥の迹』を撰び、十一年世にその名の高い『梨本集』を出した。これ即ち江戸に於ける劈頭の歌學書で、言々中世以來の歌學傳授の弊風を論じて痛快を極めてゐる。

何れの比よりか、歌の詞に制といふことを云ひ出し、五點の詞主ある詞よむまじき詞、遠慮すべき詞、後成の好み讀むべからずと宣ひし詞、定家の不庶幾と宣ひし

詞にくしといふ詞いとしからずといふ詞を云うて、詞に多く關をするて人起き難きやうに道を狭くすることは、以ての外の邪道、歌の零落すべき端かと思へども、歌の道不案内なるに善き師もなければ、斯様に人のおもむきぐるしき關にをさへられて通りにくく、たま／＼心指のあるものも中がへりするやうなる事にて、道の正しく廣く行はるゝわけも知らねば、覺束なきに此の一冊を思ひ立て、不審をしるすものなり。

またいふやう、

歌は大和言葉なれば、人のいふといふ程の詞を歌によまずといふ事なし、萬葉集を見るに、今の歌の難に俗語といふ詞幾程もあり。

と。げにその論旨は、一に師範家説の打破を志すのであつた。これよりさき、寛文五年、茂睡はすでに同一の論を宣言した。『梨本集』は實はそれを布衍したのである。茂睡はかくの如く論難の筆をば揮つたものゝ、未だ歌はかくあるものぞと教へる事はなかつた。たゞその意見を實現しようとするは、これを長流と契沖にまたねばならなかつた。されど、これは彼れに聞いたのでもなく、彼れまたこれに學んだのでもない、氣運は彼此を驅つて、東西相應するに至らしめられたのである。鎌倉時代以降に論した詞壇は、かくの如くにして復興の端を發くに至つた。

僧契沖(二三〇〇—二三六一)姓は下河、十三歳で高野山に登り、學行具さに至つて遂に兩部大阿闍梨の僧正となる事を得た。下山の後、大阪生玉の曼陀羅院に住して居たが、幾程もなく去つて諸方に行脚し、還つて妙法寺に住した。晩年大阪の高津にかゝれて圓珠庵といふに餘生を送つた。

佛典に通曉せる契沖は、もとより悉曇學に達してゐた。その學の智識を以て我が國語學を見る、誰か所謂定家假名づかひの杜撰なるに驚かざるものがあらう。假名遣の研究はかくして起り、その結果として『和字正濫抄』は成つた。契沖はまたその友長流が徳川光圀の囑をうけて完成するに至らなかつた『萬葉集』の注釋を試みた。『萬葉集代匠記』はすなはちそれである。わが『萬葉』の高調はこゝにはじめてその光彩を發し、わが古典の學は漸く復興の緒に就くことを得た。契沖はなほ『萬葉』を注釋した餘力を以て『古今餘材抄』を著した。『古今集』の注釋書としては精緻を極めたものゝ一である。その他『勢語臆斷』があり、『源注拾遺』があり、『百人一首改觀抄』があり、また『厚顔抄』がある。

契沖は一代の學匠であつた、しかし直に和歌の天才と稱することは出来なかつた。

と。この聲は、實に漢學がわが國民性を破壊しようとし、また我が古道が世に顧みられないのを慨いて、放たれたのであつた。これより先すでに垂加道はある、しかしそれとも正しくは邪道である、異端である。わが神ながらの道は、つひに闡明すべき時がないのであらうか。國體を明にし、古道を明にする、これまで第一に着手すべきものでないか。國史と歌文との研究の如きは、畢竟皆これに到達すべき手段に過ぎぬと。この旨を以て春滿は『皇學創啓』を草して幕府に上り、京に國學を建設せん事を請願した。事は幸に允許せられたが、その運びに至らぬうちに春滿は病歿した。

春滿の養嗣子に在滿(二三六六—二四一一)があつて家學を繼承した。その歌學の書に『國歌八論』がある、歌壇の積弊を極論して堂上家に對抗した。八論は歌源論、翫歌論、擇詞論、避詞論、正過論、官家論、古學論、準則論より成つてゐる。その「古學論」にいふやう、

定家卿といふ人出で來りてより後は、今の世に至るまで、かの歌學者流の人、いかなる故によりてか、かの卿を歌の聖の如くに尊信す。然れども、かの卿歌學を得たりとも見えず。いかにとなれば、古學の意を得ず、古語の義を誤ること、かの卿

堂上派が神と仰ぐ定家を嘗り得て痛切を極むといふべきである。在滿は和歌を以て詞花言葉の翫びであると見る故に、まづ詞を擇ぶべきことを説いた。その理想とするところは、瑰麗幽艶なる新古今風であつた。この論は當時の和歌壇に少なからぬ動搖を起して、幾多の論難辯疏の書を出すに至つた。田安宗武の『國歌八論餘言』、賀茂真淵の『國歌八論餘言拾遺』、國歌臆說、大菅圭の『國歌八論斥非』をはじめとし、後には本居宣長の『國歌八論評』及び八論斥非評、伴蒿蹊の『國歌八論評』等を出した。

この論難は、遂に在滿をしてその仕官してゐた田安家を辭するの止むなきに至らせた。在滿が辭する際に薦めたのが賀茂真淵である。真淵は春滿の門に出でたものの、その田安家に召聘せられたことは少なからず文運東漸に與るところがあつた。この事は次章に於いて説くこととする。

當時かくれなき歌人が多くあつた。田安宗武はその一人である。吉宗將軍の第二子で、松平定信侯の父である。有職聲律に精通し、また歌道に堪能で、『天降言』、『國歌八論餘言』、『歌體約言』等の著がある。真淵召聘後、『萬葉』風の雄渾なる歌風をよくする事を得た。似雲といふのも當時に聞えた歌人である。西行の遊跡をたづねて居住を定めず、時の人に今西行と呼ばれて、西行に姿ばかりは似たれども心は雪と墨染の

袖と詠じた風流僧であつた。有賀長伯も亦その頃の歌人である、『和歌八重垣』『初學和歌式』『歌枕秋の寐覺』の著者として聞えてゐる。

女流にしては井上通女、『東海紀行』『歸家紀行』『往事集』などによつて、その名が知られてゐる。祇園梶子は、京都祇園南林茶店の女で、家集『梶の葉』の著者である。十四歳の折り、『歳暮戀』と題して『戀ひく』てまた一年も暮れにけり涙の氷あすや解けなん」と詠じ、一代の感賞を博した。その女の百合子また和歌に巧で、『百合家集』といへる家集に廣く行はれた。

第五章 蕉風の俳諧

延寶の末、貞門の俳諧はすでに廢れものゝ中に加へられ、談林派もその末流が輕佻に流れ、佻儻艱澁に陥り、また漸く世人の倦厭を招いた。こゝに於いてか、新俳諧は遂に興らざるを得ない。

攝津伊丹に上島鬼貫(二三二一—二三九八)といふものがあつた。はじめ談林の俳人松井宗旦に學び、その吟幽奥自然を捉へ得たのであるが、貞享二年の春に及び、まことの外に俳諧なしと悟入するに至つた。さばれ、惜むらくは此の人たゞ一人醒めたるのみで、他に及ばすところがなかつた。そのいふ所は芭蕉の標榜する所と同一様である。二者師弟の關係があるのでもなく、相知相識の間柄でもない、その契合は一に風潮の然らしむるところであつたのである。

松尾芭蕉(二三二一—二三九八)通稱は忠左衛門、名は宗房、芭蕉はその號である。伊賀の人で藤堂家に仕へたが、主君の歿するに及び出奔して京都に赴き、北村季吟に就いて國學、連歌及び貞門の俳諧を學び、傍ら伊藤坦庵に隨つて漢籍を講習し、李白を追慕して桃青と號した。寛文十二年京を去つて江戸に下り、同門の一友小澤卜尺の家に寄寓したが、後深川鯉屋杉風の芭蕉庵に居住することゝなつた。芭蕉を以て號とするのはこの時に始まつた、時に延寶二年である。當時西山宗因はなほ世にあつて、談林派の勢甚だ盛であつたが、芭蕉の句調もまた大にそれに類するものがあつた。

あら何ともなや昨日は過ぎて河豚の汁の如きは、その一例である。されど、宗因の歿後談林派の詩材枯槁して徒に怪奇に流るゝを見て、遂に幽玄閑寂の想を旨とする蕉風一派を創始した。蕉風また一に正風ともいふ。天和元年(二三四一)

枯枝に烏のとまりけるかな秋の暮

といふ詠のあつたのは、すでに談林より蕉風にうつる過度時代たるを示し、貞享三年

二三四六に

ふる池に蛙飛び込む水の音

と詠するに至つては、全く蕉風にうつり得たのである。この風格がその室に入つたのは、元祿四年(二三五一)京都嵯峨の落柿舎に於いて撰んだ『猿蓑』について見る事が出来る。古池の句敢て何等の奇あるのでもない、たゞこれを芭蕉が清淡の閱歷に照し、更に蕉風が閑寂の發展の上にあはせ見て、はじめて一味の妙が湧くのである。これ芭蕉が老莊の學を修めて虚無恬淡の極意を解し、また妙心寺派の高僧佛頂禪師について臨濟に參し禪味を會得したに因るのである。かくて、貞享以後は暇があると杖を四方に曳き、一蓑一笠足跡殆ど全國にあまねく、到る處に吟詠を残した。それは夙に西行に私淑して居た故である。かゝるうちに、その風格また一轉し、高く悟りて俗に歸るべしとて、高遠の思想を卑近の題材の中に求めようとするに至つた。その傾向は元祿七年に成つた『炭俵』に於いて著しきものである。これ蕉風の最も圓熟せる境に到達したものであつた。人生を以て旅と觀じた芭蕉は、つひに旅にして歿した。時は元祿七年十月十二日、處は大阪の客舎。江州粟津の義仲寺に葬る、風蘿坊、天々軒、是佛坊等の別號がある。

芭蕉の俳諧は、はじめ貞門の優麗から、中頃談林の滑稽に入り、終に出で、幽玄閑寂の一派を成したのである。そも幽玄閑寂とは如何なるものであるか。幽玄といへるは、露骨淺薄でなく、餘韻の嫋々たるものあるをいふ。芭蕉古風の俳諧との差別を説きて。

發句は昔より様々變はり侍れども、附句は三變なり。昔は付物を專にす。中比は心付を專とす。今はうつりひゞき句位を以て付るをよしとす。附句は大木倒すが如し、鏝もとに切こむべし、西瓜きるが如し、梨食ふ口つきの如し、付心は薄月夜に梅の句へる心こそめでたけれ。

といつた。付物・心付の露骨なるを排して、うつりひゞき句位といふ如き、又は薄月夜に梅の句へるといふ如き、幽玄なる附方を採るべしといふのである。

句は七八分にいひつめてはけやけし、五六分の句はいつまでも聞きあかず。といふも、亦露骨淺薄を排して餘韻の多くあらう事を欲したのである。閑寂といふは、句の材料骨子たるべきもの、閑適清寂なるの謂である。蕉風が老佛の虚無恬淡さては禪味より來る所ありといはるゝも理である。

寂と、朧と、細みと、この三者相よつて、はじめて幽玄閑寂の趣に達すべしといふので

ある。芭蕉の弟子去來はこの三のものを解していふやう、
寂は句の色にあり、栞は句の餘勢にあり、然れども趣向も詞器共に選ばずんばあ
るべからず。

またいふやう

栞は句の姿なり、細みは句意にあり。

と。芭蕉はまた不易流行といふ事を説いて居る。

萬代不易あり、一時の變化あり。この二個究るその本一なり。その一といふは
風雅の誠なり。不易を知らざれば實に知るにあらず。不易といふは新古によ
らず、變化流行にも拘はらず、まことによく立たる姿なり。

一はこれ永劫不滅の美にして、一はこれ隨時推移の風尚である。人情悲喜の至極を
歌ふのは不易である、清新奇抜の辭を以てするのは流行である、即ち一は内容に、一は
外形について云ふのであらう。この二者相具して、花實は兼ね備はるのである。蕉
風の一體はこのやうにして成立した。しかも蕉風の重きをおくは、寧ろ萬代不易で
ある。それは芭蕉その人の個性の然らしむる所であつたらう。その幽玄閑適はつ
ひに新町島原吉原にあこがれ行く人々の趣味と全然反する所である。蕉風に遊ぶ

の士が多く士林桑門の騷客たるは、蓋しこれがためであつた。

今や口を緘して容易に開くことのなかつた芭蕉が言論の方面を去り、その實際の
吟詠を觀察してその一斑を見よう。

梅が香にのつと日の出る山路かな

芭蕉

處々に雉子の鳴き立つ

野坡

家普請を春のてすきにとり付て

野坡

上のたよりにあがる米の直

芭蕉

宵の内はらくとせし月の雲

芭蕉

藪越はなす秋のさびしさ

野坡

花の雲鐘は上野あさ草か

夏草やつはものどもの夢の跡

墳も動け我がなく聲は秋の風

荒海や佐渡に横たふ天の川

或は嶄新穩健、或は纖巧艶妖、或は豪壯、いづれもそれらの趣がある。されど、ひとへ

などは、今に傳誦する所である。その詠をあつめた書に『玄峰集』があり、その撰に『其袋』がある。

許六(二三一一二二三七五)は近江彦根の士、蕉風の擴張に最も努力した。予短才末練なりと雖も、一派の俳諧に於いては、大敵を受けて一方の城を固め、大軍の眞先かけて一番に討死せむとする志、鐵石の如しと、自らも豪語した程であつた。その著『歴代滑稽傳』は俳風の變遷を説き、俳人の略傳を叙して、氣焔當り難きものがある。別著『風俗文選』は蕉門の俳文を輯めたもの、大に世に行はる。

去來(二三〇三一―二三六四)は京の俳壇の牛耳を執つて居た。不易體の句は多いけれども流行の句は少い、たとへて言ふ時は衣冠束帶の正しい人が遊女町に立てるが如しと評せられた。その高古の風體なることを見るべきである。その句をあつめた集に『去來句集』があり、俳論を載せたものに『去來抄』がある。

丈草(二三二三一―二三六四)は近江湖南の風光を愛して、粟津の龍ヶ岡に佛幻庵を結んで住んで居た。玉堂和尚の禪意を傳へて、その風體冲澹清雅なるものがあつた。『寐覺草』一編はその超俗の感慨を見るべきものである。

鶯や茶の木鳥のあき月夜

時鳥啼くや湖水のさゝ濁り

踊子のかへり來ぬ夜や葦

以上四哲は蕉門の雄。故に選びて一言したのである。されど當期の俳壇にあつては、なほ忘るべからざるものが二人がある。一は俳論家支考、一は鳴立庵の開祖大淀三千風である。

支考(二三二五―二三九一)は美濃の人、霸氣に富み、傲然人の上に立たう事を力めた。越人・露川と論争して、自ら晦冥して假死を装へるなど、性行殆ど狂人に近いものがあつた。されど、縦横の奇才は元祿五年『葛の松原』を公にしてより、『續五論』『西華集』『東華集』『南無俳諧』『夏衣』『白馬奥儀解』『俳諧十論』『發願文』『十論爲辨抄』『俳諧古今抄』等の刊行相踵いで出で、殆ど送迎に遑なからしめた。中にも『續五論』は滑稽華實・新古旅戀の五論に分つて説いてあつて、自らも一字一涙と稱した。『俳諧十論』は俳諧の傳、俳諧の道、俳諧の徳、虚實の論、姿情の論、俳諧の花、修行地、言行論、變化論、法式論の十論より成り、支考が俳諧に對する意見を餘蘊なく披瀝したもので、その所説往々牽強附會に流れてはあつたが、また實に俳論書の白眉たるものである。

支考はまた美濃派の開祖であるが、その俳風いつか四隣を靡かし、遂に乙由の伊勢

風をも併合した。世にこの格調を上方風といふ。それは江戸座が雪門を蠶食して江戸風といふに對しての稱であつた。

大淀三千風(生死未詳)はなほ葛飾風の祖山口素堂と同じやうに蕉門の出でなく、また談林の流でもなく、特有の風體を有してゐる。もと伊勢の人、遍歴の志を抱き諸國を行脚したが、仙臺に卜居する事十五年、その風大に行はれた。後年西行の舊跡鴨立澤を再興し、鴨立庵の開祖となつた。その著に『日本行脚文集』仙臺大矢數『松島一色兩吟集』がある。三千風の後は漸く振はなくなつて、鴨立庵を繼ぐものは依然としてあれど、俳風はつひに蕉風に合はせられた。

第六章 狂歌の發達

狂歌の淵源は、これを『萬葉集』の戲吟歌、『古今』以降の俳諧歌、また諸戰記物に現はれてゐる落首に於いて見ることが出来る。されど、狂歌の漸く盛になつたのは室町時代の末葉であつた。永正五年正月に會合して成れる『永正狂歌合』、また傳土佐光信畫の『七十一番職人盡』など、相踵いで出でたのである。

徳川時代に入つては、俳諧の流行と共に狂歌も亦行はれた。細川幽齋、鳥丸光廣、木下長嘯子、皆狂歌があつた。松永貞徳も其の多才多能を以て狂歌にも長じ、よく滑稽體の一體を得た。『貞徳百首』、『貞徳狂歌集』等は、即ちその詠を集めたものである。

涼しさを卷きこめて來る文月は一葉の風の散らし書きなり

など、その風體を見るに足る。その頃また淺井了意の編纂せる『狂歌咄』といふのがあ

る。曾呂利新左衛門の手記した狂歌を蒐めたものである。貞徳について、寛永年中京都男山八幡の社僧に豐藏坊孝仍、瀧本坊昭乗があり、大阪に淀屋介庵といふがあつた。これより稍後れて、京都建仁寺の住僧永雄といふがあつた。世に雄長老といふのは是で、家集に『雄長老百首』がある。江戸に貞門の俳人で石田未得といふもあつた。その家集を『吾吟我集』といひ、よく諸題をそなへて、またよくよみかなへたりといはれてゐる。後の唐衣橋洲が私淑した人である。かつて逢戀とて、

だきしめて今宵は我をしめ殺せ逢ふにかへんといひし命ぞ
と詠んだものが、最も人口に膾炙してゐる。

未得が同門の半井卜養、また縦横の狂才端倪すべからざるものがある。即吟即詠多く推敲を経ることがなかつた。橋洲の著『狂歌初心抄』に半井卜養風とて、
布袋殿しんかんしんとして御座る内にははいもひもしんも有り

を擧げてゐる『卜養狂歌集』『卜養狂歌集拾遺』の家集がある。

明暦萬治のころ、豊藏坊信海といふもの、孝仍の子で、昭乗の門に出で、出藍の聞えがあつた。その風體を世に玉雲流と稱したのはその別號を王雲翁と呼んだからである。この人の詠が、當時に於いて最も傑出してゐた。

何にやら似たもの人のあだ口はまこと浮世の嵯峨の松茸

といへるは、よくその體を説明するものである。その家集を『狂歌鳩杖集』といふ。

信海と殆ど同時に、浪花に生白庵行風といふがあつた。其詠は拙くて傳ふべき程の者はないが、『古今夷曲集』及び『後撰夷曲集』の撰があるので知られてゐる。『古今夷曲集』は蓋し狂歌撰集の先驅たるもの、一で、寛文六年(二三二六)に刊行したものである。併諧歌をはじめ當時の狂歌を選び、和歌撰集の體裁に擬して編纂したものである。寛文四年、良純法親王に狂歌を奉つたゆかりで、靈元帝より夷曲のさまあるまじきにあらず、夷歌なれば詠人の名乗の事もおのが心にまかすべしとの勅許を得て編輯し、やがて叡覽の光榮に接した。これ實に當時に於いては、狂歌の價值を高からしめたものであつた。

以上は元祿以前啓蒙時代に於ける狂歌界推移の概観である。要するに、未だ微々

たるもの、到底併諧の敵ではない。その作に於いても、言語上の遊戯以外には思想の滑稽を認め難く、隨うて價值頗る低い。然るに信海行風の歿後、京都に正親町公通が出で、大阪に鯛屋貞柳が出で、始めて光彩陸離たるものとなつた。これ正に元祿の盛時、かくの如くにして元祿文學に狂歌の一章を設くることを得たのである。

正親町公通(二三一三—二三八三)は權大納言である、戲號を風水軒白玉と呼ぶ。また俳句をよくし、狂句をよくし、狂詩をもよくした。

夕がほにかけし言葉の露よりやひかるの君の名めで聞えん

晝がほの花は宰予が夢のうち蝶となりても見るやしら露

その詠多くは典故あり、譬喩あり、題名またおほく古歌古詩の題名を襲用した。その家集を『雅薙醉狂集』といふ。各詠皆旁註を加へ、字義を説き、歌意を明かにした。その卷頭の歌に

天地のひらけ初しを大根にて國歌さかゆく花の春かな

これに附記していふやう、

狂歌神國の道を第一とし、或は物理を感じて讀ぬ。又させるふしもなければ、その體いやしからず、古歌古詩故事を用ひてもけやけからず、大方によみなしたる

もあり。又巧過て理窟らしきもあり。又一座の逸興輕口にて狂の狂なるもあり。讀人よくよく心をつけて見分給はれかしこ。

されば、その滑稽未だ極致に達せず、いまだ解頤の境に至らず、たゞ博學の面影を見るに過ぎぬ。これまた遂に公卿の狂歌たるを失はぬものである。

松尾芭蕉また狂歌を詠じた。

などてかくいそがしいとて二階から落ちての後は隙になりけり。

風になびく富士や三里に灸すゑて行衛も知らずありく西行。

など即吟の一例である。されど、これはもとより一時の座興、深く意を留めたのではない、たゞ俳諧の滑稽をしばし他の形式を假りて詠じたまでである。

鯛屋貞柳(二三一四—二三九四)は永田氏また榎並氏といふ。名は良因、大阪御堂前に住し、代々製菓を業とし、鯛屋は其の屋號である。かつて信海に狂歌と書法とを學び、二世信海と號した。その友の奈良古梅園が、大さ二十斤餘の墨を造つて、靈元法皇に奉つた時、貞柳が

川ならで雲の上まですみ登るこれは如何なるゆえんなるらん

と詠んだので、油煙齋(一)に由縁齋の號を得た。『難波家づと』『續家づと』はその著書の中、最も多く人に知られてゐるもの。『置みやげ』『拾遺家づと』なども皆その狂詠にあつたものである。

散ればこそいとゞ櫻はめでたけれ、けれどもさうぢやけれども

ふじの山夢に見るこそ果報なれ路銀もいらすくたびれもせず

二首未だその一面をだに知るに足らぬ。されど、かれは狂歌を見ること猶和歌に對すると同一であつた。かれは師信海の教を奉じたのである。その教にいふ「箔の小袖に繩帶したる姿に作れ」と。そは優なるも戲を離れず、狂なるも賤なるべからず、雅俗の混用よろしきを得よといふのである。換言すれば、優美なる言語の間に粗野なる言語を混ぜよといふのである。即ち貞柳の狂詠は時に内容上の滑稽を有すといへど、未だ全く弄語の域を脱する事が出来なかつたのである。されど、貞柳に至つてこの道の基礎はじめて完成することを得、後の安永天明をまつて一箇獨立の文學となすに至つた。

貞柳の門には傑れたものが少くない、中にも桃縁齋貞佐がある、玉雲翁三世と稱した。また栗柯亭木端がある『狂歌真寸鏡』『狂歌拾遺笑草』『貞柳狂歌訓』等の著があつて世に知られてゐる。されども、つひに先師の遺鉢を傳へるまでに至らず、狂歌壇上

は徒らに朔風の吹きすさぶに任せて、荒涼たる觀を呈した。

第七章 淨瑠璃の活躍

近松門左衛門(二三一三—二三八四)本姓は楳森、名は信盛といひ、號を巢林子または平安堂ともいふ。その經歷は未だ確的に知ることは出來ないが、しばらく傳ふる所をすれば、長州萩の人、幼少の頃に肥前唐津の近松寺に入つて剃髮し、古洞と號した。然るに程なく京に出で、還俗して一條家に仕へ、位階をも賜はつて従六位となつた。博く朝典に涉り、かねて古學を修めた。その後また幾もなくて職を辭し、名を近松門左衛門と改め、淨瑠璃歌舞伎狂言作者となつた。

延寶五年(二三三七)京の歌舞伎芝居萬太夫座に於いて、藤壺の怨靈が藤の花から忽ちに大蛇と變ずる趣向を立て、喝采を博した。また淨瑠璃太夫井上播磨掾宇治加賀掾のために淨瑠璃を作つた。貞享二年かつて相知れる義太夫即ち後の竹本筑後掾が大阪道頓堀に操座を起すや、加賀掾のために作れる舊稿を與へたが、三年(二三四五)二月はじめて『出世景清』を作つてそが開運を祝した。時に門左衛門は三十四歳であつた。その淨瑠璃の革新は此に始まり、斯界も亦こゝに空前絶後の偉觀を呈するに至つた。これよりさき、加賀播磨のためにせる數種の作は、所謂古淨瑠璃と同一様のものか、或は金、平本の跡を襲うたものに過ぎなかつたが、今や『出世景清』は體裁大に改まり、全篇を五齣とし、首尾一貫して脚色整然たるものとなつた。かつては怪力鬼神を語つたものが、今は専ら題材を人事に採つて、時に人情の機微に觸れようとするものがある。されど、この作は辭想共に未だ傑出せるものではなかつた。

元祿三年に門左衛門は京都を去つて大阪に下り、竹本座に入つた。竹本座は操人形を演ずる劇場である。操人形の演技に合せて語る淨瑠璃の作者として、劇場裡の人となつたのは、門左衛門にとつては如何ばかり便宜の事であつたらう。蓋し、かれが述作上の工夫は、これによつて得る所が少くなかつたと思はれる。この頃から諸作漸く圓熟の境に入つたが、爾來専ら義太夫のために淨瑠璃を作つた。その數およそ百種餘。『雪女五枚羽子板』『國姓爺合戰』『曾我會稽山』を世に三傑作といひなすが、『冥途飛脚』『心中天網島』『女殺油地獄』などが却て稱すべきものと思はれる。

門左衛門が始めて淨瑠璃に筆を執つてから、享保九年十一月に、その最後の傑作たる『關八州繫馬』を遺して逝けるまで、前後四十有餘年、就中後の三十年間は、かれが獨特の技量を發揮せる時期であつた。

門左衛門の淨瑠璃はこれを二種に分たねばならぬ。その材料を史上の事實に採

つたものを時代物、當時の出来事に採つたものを世話物といふ。門左衛門もはじめは専ら時代物をのみ作つたが、晩年に至つて多く世話物を作つた。時代物の材料は『源平盛衰記』『平家物語』若しくは謠曲などから採つたが、就中謠曲から採つたのが最も多い。時代物の諸作は事件の變化を主とするので、その人物は只普通性を有するのみで、個性の發展を認め難く、随つてその人物の行動も、事件の變化も、すべて宿世の運命によるのである。然るに、世話物は大にこれに異つてゐる、即ちそれは人物主因となつて一篇を成す。故に、世話物の人物は普通性を具へてゐる中に、その人物に特殊なる個性の發展するを見る。吉凶禍福幸不幸は皆人物の性情によつて生ずるのである。かくて世話物の人物は活躍し、時代物の人物は拘束される。世話物の人物は現實、時代物の人物は模型である。現實なる人物は一舉手一投足に境遇を作為し、模型なる人物は境遇に應ずべく作られてゐる。同じく門左衛門の作で著しき徑庭の存するのは、畢竟この理に基くのである。吾人は門左衛門の上乗なる世話物を見る時は常に一小天地に遊ぶ想がある。時代物の諸作はた結構壯大にして、想像の縦横なる、行文の圓熟せるを認むといへど、到底世話物の作の全體に於いて完備せるものあるに及ばぬ。

されど、今日でこそ吾人は然か評するものゝ幼稚であつた當時の民衆は、却て變幻無限なる時代物を喝采したのである。當時の見物は、未だ人情の機微に觸れるよりは、寧ろ耳目の驚駭を欲した。世話物の哀しさに泣かうよりは、寧ろ切狂言の餘興として、たゞその機敏なるを喜ばうとした。わが門左衛門は決して民衆に阿附したのではなく、なかつたけれど、辭想共に苦心を重ねたのはこの時代物である。『雪女五枚羽子板』にては、寶器の靈驗、雪中の生理、女子の勇戰、變生男子を取り來つて、俗衆と共に歡呼の聲をあはせ、『天智天皇』にあつては、金輪五郎今國の首を他人の體について再生せしめ、逆賊を滅さしめて、觀客の同情を棄てなかつた。更にまた『日本振袖始』の如く、遠く題材をば神代の昔に取るものゝ、未だ時代の特色を描寫するに至らず、現はれてゐるのは元祿の世相なるものである。義經、曾我兄弟、名は古きを假りてゐるけれど、そのなすところは當時の遊冶郎と異なることがなかつた。さる中にも、傑作として推すべきものは、『曾我會稽山』『國姓爺合戰』『傾城反魂香』『關八州繫馬』等である。

門左衛門の世話物を作つたのは、元祿十三年(二三六〇)に、竹本座の『長町女腹切』に始まる。これ彼が四十八歳の時である。蓋し、おのが經來つた浮世の辛酸と社會の觀察とは、漸くその詩才を圓熟せしめたのであらう。

世話物の材料は多く下層社會にとつてゐる。傾城遊女と放蕩兒とか、さうでなければ性格のこれ等に類した武士の上である。かくて、その寫すところは義理と人情との衝突である、仍ち人間各自の性情に基く外界との衝突を描いたのである。門左衛門は、この二者の調和をば心中を以て表はした。げに世話物にあつては、『女殺油地獄』一篇を除く外は、大概獻身熱烈の戀愛をうつつした。嚴肅なる社會制裁のもとに、なほ戀愛の遂行を求めようとする。さすがに時代の道德を守つてゐる門左衛門は、直に戀愛の勝利を唱へることが出来なかつた、それが心中を拉し來つた所以も一にこゝに存してゐる。即ち情死の已むなきに至つた男女は、形の上の失敗者で、心の上の成功者である。兩々相抱擁し、完爾として死に就く時、眼底にこの世はなく、一蓮托生これこそ眞の勝利者でなからうか。而してこは一面に於いて當時行はれた浄土信仰の觀念が與つて力ある事を記せざるを得ぬ。その心中物は『曾根崎心中』にはじまる、それは元祿十六年(二三六三)五月の興行であつた。『天網島』の如き、事は十月十五日に起れるに、淨瑠璃はすでに十二月六日操座に於いて興行せられた。されば、聽衆觀客は皆恍然として酔へるが如きものであつた。故に、世には門左衛門の心中物が出たので、當時情死する者の數を増加したといふものもあつた。情死を誘致したものは必ずしもかれの淨瑠璃には限らざることであるが、如何にその時流に歡迎せられたかを知るに足る。『曾根崎心中』堀川波の鼓、『冥途の飛脚』槍權三重帷子、『心中天網島』女殺油地獄、『心中宵庚申』等を以て世話物中の傑出せるものとする。

或はいふ、西鶴は觀察し、近松は同情すと。河内屋與兵衛は『女殺油地獄』に於ける兇暴最も憎むべきもの、されどなほ讀んでゆくうちには憫察の涙に堪へなくなり行く。『天網島』に於ける治兵衛は一箇の痴漢である、されどその胸裏に入るとなほ同情同感を禁ずることの出来ないものがある。實に門左衛門は罪惡を罪惡と視ることがなかつた。罪惡に即して人生を觀、現實の世相を察し、然る後これを醇化して理想の眞相に接せようとする。現實に即してしかも超世し、生死榮辱を眼下に瞰ようとする。吾人が門左衛門の諸作に接して、光明喜悅の感が湧くのはこれがためである。よしやそれが深省を缺き、内觀未だしきものあるとはいへ、耽溺蕩逸なる元祿の世にこの人ある、眞に文壇の一大異彩たるものである。

門左衛門の文章は謠曲などから學んだところが多くあつた。天爾乎波を省き、俗語を用ひ、情景兩ながら缺ける所なく、縦横自在眞に非凡の才筆であつた。靈元上皇嘗て『最明寺殿百人上臈』を讀まれて、石曼卿が『蝶遺粉翼輕難拾、鶴墜霜毛散未轉』といへ

るを翻譯し、蝶の翼のおしろいを、草にこぼして梢には、鶴の霜毛をぬぎかくる、雪は花より花多きといへるのを嘆賞せられて、かくの如き才智を以て和歌を詠じたならば、秀逸さだめて多きことであらうと宣はれたといふ。

その文辭流暢音律の妙がある、就中道行の條の如きは、婉曲圓滑にして才華の煥發するを見ることが出来る。『難波土置』に「近松が道行は何となく句がらけたかく、やゝもすれば歌書の體源氏」などのうつりありて、優美なること格別なり。それに目なれ、今時の道行は一向評議に及ぶべからず」と記されてゐる、誠に尤なことである。『曾根崎心中』の道行に、

この世の名残り、夜も名残り、死に行く身を譬ふれば、あだしが原の道の霜、一足づつに消えて行く、夢の夢こそ哀れなれ。あれ數ふれば曉の、七つの鐘が六つなり、残る一つが今生の、冥途の鐘の聞きをさめ、寂滅爲樂と響くなり。

といへる一節がある。荻生徂徠はこれを見て、門左衛門が妙この中にあり、外はこれにて推測るべし」というた。

門左衛門と同時に錦文流といふがあつた、小説壇上に縦横筆を揮ふの外、また淨瑠璃にも數種の作がある。『徳天皇萬年草』『男色加茂侍』等がそれである。門左衛門の流風をうけたものに竹田出雲、松田和吉、長谷川千四、三好松洛があつた。皆竹本座の附屬の作者であつた。

出雲(二三五一—二四一六)は千前軒と號し、竹本筑後掾退隱の後をついで竹本座の座主となつた。享保八年に始めて『大塔宮曦鎧』を作つて門左衛門にその添削をうけ、又折々その教を受ける事もあつたが、門左衛門の歿後は遂に淨瑠璃作者の霸王となつた。出雲の著作中で著名なものは『蘆屋道滿大内鑑』、『平假名盛衰記』、『菅原傳授手習鑑』、『義經千本櫻』、『假名手本忠臣藏』等である。その中でも『假名手本忠臣藏』は赤穂浪士の義舉を題材とせる淨瑠璃中の最も傑出せるもので、初興行の寛延元年から天明五年に至る三十八年間、三ヶ津の劇場で興行する事四十一度に及んだといふ。以上の諸作は、皆門左衛門が晩年にもせる時代物の體裁に倣つて、専ら意を趣向に用ひ、新奇を競うたのである。作中の人物に個性の認むべきなく、辭品にもまた及ばぬところあるは言をまたぬ。然れども、趣向の新奇であることが能く觀客を誘つて、その作の上場毎に太く喝采を博した。

出雲を叙しては必ずや合作の事を忘るゝを得ぬ。享保十三年(二三八八)『加賀國篠原合戦』に長谷川千四と名を連ねたのを嚆矢とする。この風愈々盛に、場割を定め、受

持を分ち、每場技巧を争ひ、ひたすら人目を驚かす事を企てた。かくて全篇には首尾の一貫なく、秩序の整然たるものなく、支離滅裂に陥り、やがては一幕毎に性格の轉變を見るなど、不自然を極むるに至つた。脚色の巧妙は門左衛門にまさり、舞臺上の効果もまた多いけれど、つひに部分の美をのみ致して、全部に亘つては前後撞着の醜を來さざるを得なかつた。『菅原傳授手習鑑』はその雄篇の一、されどその推稱されるのは全體の構造によるのではなくて、作者等が力を盡して描寫した部分々々の上である。傳ふる所によると、『楠昔嘶』の當り振舞の折、三好松洛が立てた筋により、各鬨引して、松洛は菟屋姫と道真、並木宗輔が白太夫と櫻丸、竹田出雲が松王と小太郎との三様の子別れをうつしたとの事である。これ等の各段は今に誦せらるゝに、他の段の毫も顧られないのは之が爲である。

松田和吉(文耕堂)は出雲・千四・松洛と合作した『御所櫻堀川夜討』『鬼一法眼三略卷』『壇浦兜軍記』等を以て、松洛は出雲・竹田小出雲・近松半二等と合作した、『源平布引瀧』『敵討襪樓錦』『小野道風青柳硯』等を以て、千四は『京土産名所井筒』を以て聞えた。

これよりさき、西澤一風・紀海音・並木宗輔等が出で、大阪豊竹座のために筆を執つた。豊竹座といふのは、筑後豊竹の門弟豊竹若太夫が元禄十五年(二二六)創設したもので、爾來竹本・豊竹の二派に分れ、竹本を西、豊竹を東というて、互に隆盛を争うた。蓋し、門左衛門が靈筆を鼓して以來、淨瑠璃界の氣運大に動き、作者輩出し、音節に、人形に、舞臺道具に、大に力を傾けたため、こゝに二派の對峙となり、二派の競争は却てまた斯界の發展に與つて力あつたのである。

海音(二二三—二四〇)二姓は榎並、狂歌師鯛屋貞柳の弟、はじめ和泉柿本寺の僧侶であつたが、還俗して醫を業とした。また國學を契沖に學んで契周と號し、淨瑠璃作者となつて紀海音と改めた。その初作を『傾城懷子』といふ、元禄十二年の作。名殘の作を『傾城無間鐘』といふ、享保八年の作。二作の間二十五年、著はす所四十餘篇、そが中に『心中二つ腹帯』『鎌倉三代記』等を尤れたものとする。『堺土産心中泪玉井』は若太夫が堺に下つた時に偶然起つた事件をとつて一段物に作つたもの、未だ傑作を以て許し難けれど、豊竹座に於ける心中物として世に知られてゐる。海音の豊竹座にあるや、元禄十六年竹本座に『曾根崎心中』出づれば之に對して翌年『八百屋お七』を出し、寶永二年彼に『用明天皇職人鑑』あれば之に應じて翌年『播州曾根松』を作り、正徳元年『冥途飛脚』あれば直に『油屋お染袂白綾』を以て答ふるなど、顔顔して下ることがなかつた。されど、才識用筆共に門左衛門と比肩する事は出来なかつた。

西澤一風は安田蛙文並木宗輔と合作を出すこと十餘種、『北條時頼記』最も唱すべきものである。並木宗輔は初名田中千柳、葎萱桑門筑紫鞆、『夏祭浪速鑑』、『一谷嫩軍記』等の秀逸の作がある。その門に丈助、永助がある、後多くは演劇脚本の方向に走つた。

第八章 演劇の發展

演劇は徳川時代に於いて發現せる特殊の藝術である。演劇の形式上に於ける設備の多大なると、技藝の鍊磨に長年月を要するとは、太平の時をまち得では此の藝術の發達を求めることが出来なかつたのである。能樂はあつた、狂言はあつた、されどそれは室町時代貴族間に於ける特有の藝術である。この時代に於ける平民の勢力の隆盛は、つひに古典的藝術を棄て、更に新趣味の表現をまつのである。淨瑠璃即ちこれである、演劇またこれである。

予輩はいま元祿時代の花と呼ばれた演劇について述べようとする。それを叙するには、まづその起原に溯り、しばらく筆を前時代に起して阿國歌舞伎から始めねばならぬ。

室町時代の末期、出雲大社の巫女阿國といふもの、京都北野のほとりなる舞臺に、やが子踊といふ一種の念佛踊をはじめた。慶長に入つて阿國が名古屋山三郎と相結ぶに及び、男裝して山三郎所作の歌曲に合せて男舞をなし、また滑稽の動作を混じ、樂器の演奏をも加へた。曲に『猿若大名』があり、『新發知太鼓』があり、『花笠踊』がある、皆能の狂言から脱化したもので、これを歌舞伎と稱した。歌舞伎の流行は、殿上にも諸國にも及び、後には遊女を以て一座するものも出でた。傾城歌舞伎がこれである。その主とする所は歌舞にある、否容色の艶冶にある。遂に寛永六年の禁令によつて停止された。

これに代つて更に進歩の跡を認むべきものは若衆歌舞伎である。技藝は前者と異るところはないが、たゞ三味線の演奏の加はつたこと、女形の創められたこと、を記憶せねばならぬ。當時傾城事が大に行はれた。島原遊廓の實況を演ずる狂言がそれである、さては島原即ち芝居の異名となつた。三都各劇場があり、諸座漸く整頓の域に近づいたが、若衆歌舞伎の主とする所は技藝ではなくて、不倫の媚色を以て觀客を誘うたのである。その風教に害あることが世に認めらるゝに及び、若衆の容色に於いて唯一の生命とたのむ前髪を剃落されて野郎頭となした。野郎歌舞伎はかくて出で來つたのである。

この酷令は却て藝術としての演劇に幸を與へたのであつた。根本たるべき技藝

の發達ははじめて期待せらるゝのであつた。これよりさき、江戸に作者都傳内があり、史劇『今川忍び車』と稱する續狂言をはじめたが、こゝに至り一齣一曲の切狂言は大概續狂言に移つた。寛文四年大阪には福井彌五右衛門の『非人仇討』成り、五年江戸には森田座に於いて曾我の三番續狂言が演せられた。それ等の趣向は單純である、幼稚である、いまだ藝術として取るべき點は少いが、兎に角に時代世話二様の發展を來すに至つた。

わが演劇史はこゝに元祿時代に入つて一段の光彩を放つた。豪華華美の世は劇場をばいつまでも席張小屋たらしめない、その設備大に見るべきものとなつた。江戸に中村市村守田の三座相鼎立し、京に南北兩側の三座があり、大阪には道頓堀の三座及び堀江市の側の一座がある。名優の輩出する事は眞に端倪に違なき程であつた。京阪には坂田藤十郎があり、濡れ事を以て海内無雙と稱せられた。山下京右衛門があり、大和甚兵衛があり、また敵役を以て聞えた片岡仁左衛門があり、折紙道具と呼ばれた芳澤あやめがあつた。江戸には荒事の開山、よく金平物の勇壯の風をうつした市川團十郎があり、その暫不動辨慶等は一代の絶技であつた。また意氣を以て知られた中村七三郎があり、女房の開山水木長之助があり、朝比奈の型を今にとり

た中村傳九郎があつた。この時俳優は各分業を以て特有の技を磨いたのであつた。立役といひ、敵役といひ、親仁方といひ、若衆方といひ、道化方といふ、或は花車方があり、若女方がある。これ實に技藝の進歩に大に與る所あると共に、その性格の表現に於いて一階級一類屬の普遍性を主とするに至り、遂に型に入りはて、生氣なき者ともなつた。當時また劇評大に發達し、技藝の巧拙を論じ、評判記に於いて盛に位附を作つて毀譽褒貶する事となつた。たゞ惜しむらくは、正徳四年大奥の老女江島の事件がはしなくも累を斯界に及ぼして一大打撃をうけた。されど、大勢の歸趨は既に決してゐたのである。群衆は擧つて堵の如く鼠木戸に迫つた。さらば、即ちこれ等演技の基礎たるべき脚本は、果して如何の状態にあつたらうか。

脚本とは、演劇の臺詞を始め、舞臺の模様、俳優の動作、服装等の注意をも記したものをいふのである。脚本もと根本というた。戲財録に

往古は定まりし作者なし。役者の立者寄合ひ筋立して、白は出合より言うて見るをならしといひ、そのうちに定まれるゆゑ、根本といふものなし。

とある如く、記載した脚本なく、また脚本家もなかつた。津山治兵衛は當代狂言作者の雄たるもの、而もなほいうてゐる

もとより作者は役者の氣がねをするが家業にて、皆々の氣に入るやうに作つてやるが即ち作者なり。

げに脚本界は幾多の事情のもとに不幸なる境遇にあつた。當時の劇壇に於いて重せられたのは俳優である。作者は唯々諾々としてその命に應ずるに過ぎなかつた。されば、作者として一かどの見識をそなへ、曲筆に堪へ得ないものは、大方その位地を去らざるを得なかつた。かばかり技藝の發達したに拘らず、脚本の文學上に於いて評價すべきものゝ少なかつたことは、眞に遺憾の極である。

そのはじめは俳優にして作者を兼ねたのであつた。都傳内福井彌五左衛門の如きはそれであつた。延寶八年に俳優富永平兵衛が顔見世の番付に、狂言作りと肩書したのが、とにかくに脚本家の名の起つたはじめである。また金子吉衛門といふがあつて脚本の記載をはじめた。その後、立役にして作者をかねた水島四郎兵衛親仁方にして作者たる福岡彌五四郎道化方にて作者たる吾妻三八といふがあつた。三八の當り狂言に、寶永三年大阪嵐座書卸の『お七歌祭文』といふのが、ある、かれは世話物に最も長じてゐた。

以上は京阪の作者である。されど、江戸も亦俳優兼作者の狀態にあつた。河原崎權之助はすでに曾我狂言の二番續きを作つたが、その後市川團十郎も亦作者として三升屋兵庫とよび不破鳴神の自作があつた。中村七三郎は淺間嶽を自作し、中村傳九郎もモサ詞を創始したといふ。中村傳七はじめ俳優で、後は専門の作者となつた。引き道具・セリ出し・押出し・ブン廻しなどの大道具を以て人目を驚かすことを力めた。

かゝる中に津打治兵衛(二三四四—二四二〇)は起つた。世に江戸作者中興の祖と稱せられた。その作の廣く知られてゐるのは『一心二河白道』に始まる。爾後『式例和曾我』『大角力藤戸源氏』『忠臣いろは軍談』『寶曾我女護島臺』『初髻通曾我』があつた。その作風は大方時代と世話とを折衷混淆するものであつた。門人に二世治兵衛がある、後に鈍通與兵衛と改めた。『矢の根』『帶引』『石橋』等の作がある。

今この節を終はるに臨んで一言せざるを得ないのは、脚本家としての近松門左衛門の事である。延寶五年門左衛門二十五歳の折、京都なる都萬太夫座の作者となつて、藤壺の怨靈藤の花より大蛇と變する趣向を立て、大に喝采を博し得たのであつた。その後、阪田藤十郎のために、『傾城佛原後日』を作つた。元祿元年都萬太夫座で演じた『今源氏六十帖』、同四年の『水木辰之助錢振舞』も亦その作であつた。門左衛門が

脚本家として世に聞えたことは、芝居の看板及び正本にその名を記した事を以ても知る事が出来る。

殊に門左衛門が演劇史上に功績をとゞめたのは、淨瑠璃と相提携せしめた事である。よしそが狂言作者としての期間は短くあつたにせよ、この一事は斷じて忘るべきものでない。嵐三右衛門が喝采を博した丹前狂言に藤内太郎がある、門左衛門は之によつて『雪女五枚羽子板』を作つた。三右衛門所演の丹波與作、亦門左衛門の淨瑠璃『丹波與作』の粉本であつた。『攝津夫婦池』は村山平十郎所演の『傾城石山寺』をさながらに踏襲し、『百合若大臣野守鏡』は竹島幸左衛門所演の『今用百合若』を模倣した。門左衛門が自作『傾城佛ヶ原』の梅房文藏をば、『天鼓』の吳服中將に、さらに『姫山姥』の萩野八重桐に重用した。これ等皆歌舞伎からその題材と趣向とを借り來つたものである。已にして淨瑠璃はいつか歌舞伎にその勢力を分ち始めた。たとへば『國姓爺』は、まづ萬太夫座に於いて、ついで大阪の三劇場に於いて、江戸の三劇場に於いて興行せられた。『曾根崎心中』は、二世團十郎によつて演せられ、後また『女夫星浮名天神』となつた。『心中宵庚申』は江戸に於いて『花毛氈二腹帯』と改題して興行せられた。その他の諸作大方演劇に移植せられたのである。紀海音竹田出雲等の諸作も亦さうであつた。並木宗輔の門流は、はやく淨瑠璃作者から一轉して狂言作者となつたものも多くあつた。後の並木と名乗るものは、大方演劇に關係するものであつた。中にも宗輔の門人正三は最もよく聞えてゐる。されど、その活動時代はこの時代よりもやゝ後れてゐる。

第九章 浮世草紙

浮世草紙とは今様ぶりの草紙の謂である、現代の世相を描寫する小説の謂である。井原西鶴かの假名草紙の後を承けて之を始め、八文字屋物さらに之を承けて流行の絶頂に至らしめたのである。

西鶴(二三〇二—二三五三)は、その傳を詳にする事が出来ぬ。大方大阪の町人であつたらうか。西山宗因に従つて俳諧を學び、その奥儀を究め、談林派錚々の士として談論攻争よく貞門に當り、椎本才麿と共にその振興に努めた。されば、貞門の俳諧『破邪顯正』に於いては、かれを罵つて阿蘭陀西鶴と稱するものあるに至つた。かつて住吉の社頭に於いて一日に二萬三千句を吟じたので、二萬翁また二萬堂の號を得たのは著名なる事實である。

天和二年(二三四一)師の宗因が歿した年、浮世草紙の最始の著たる『好色一代男』の作

があつた。これ西鶴の四十二歳の時で、俳諧の振興者はこゝに一轉して浮世草紙の作者となつたのである。越えて三年、貞享元年に『好色二代男』成り、三年にまた『好色一代女』『好色五人女』當世女容氣『本朝二十不孝』新因果物語の作があつた。この種の流行は一方ならず洛陽の紙價を高うする折に、西鶴の筆はまた一轉した。四年に『男色大鑑』本朝若風俗『武道傳來記』武家義理物語等を出した。蓋し前年好色本に對する禁止の命令があつたからであらう。これ等は大概武門の義理を旨とせる話説か、さなくば情緒纏綿たる男色談であつた。しかも亦いたく時好に投じた。かくて題材は三度革つて町人物となつた、貞享四年の『日本永代藏』元祿五年の『世間胸算用』などがこれである。皆題材を町人の榮枯盛衰にとつたのである。

西鶴はかつて行旅の間に幾星霜を過したのであらうか、そは其の著『一目玉鉾』に於いて、また各浮世草紙に於いて知ることが出来る。されど、それは一向に自然の美を咏歎讚美する芭蕉とはおのづと其の軌を異にしてゐる。その眼はまづ風俗に嚮ひ、更に多く三都及び諸國の遊里に放たれた。その蕙蓄を傾注したのが、即ち好色本である。世相と人情と、とりわけて人間本能の衝動、すなはち性慾に對して、その犀利なる筆鋒の觸れておのづと成つたものが、即ち好色本である。實に好色本は西鶴獨特の壇上である。そが半生の閱歷見聞はすべて之に集中せられたのである。

かく西鶴は觀察家であると共に、また讀書の人であつたらうか。『源氏物語』はその讀破したものでなくとも、當時俳諧家の間に行はれた數多き『源氏』の梗概をば必ず熟覽したのであらう。或はいふ、『好色一代男』は『源氏物語』の模倣であると。

主人公世之助は七歳から戀を知りそめて、そが一生の間に戯れた婦女少年幾千人放縱淫奔の限りを盡したが、六十歳に及び好色の友と共に船路遠く女護島へと向うたのである。げに篇中明に『源氏物語』に類似を求め得らるゝものがある。「口舌の事ぶれ」は源氏の君と空蟬との關係の如く、形見の水櫛は夕顔の物の怪に似かよひ、夢の太刀風は源氏が河原院に於いて變化に逢うたそれに類してゐる。事例なほ之を漁るとすれば多いであらうが、更にまた『源氏物語』と『一代男』との間に大なる別の存することを知らねばならぬ。『源氏物語』は終始一貫せる一部の小説である、『一代男』は關係なき群小話の彙集である、世之助とは畢竟たいそれ等を串貫にするための假設人物に過ぎない。源氏の大将は一方では感情のまにまに行動するもの、他面ではまた道義の一念と苦闘する煩悶がある。世之助は蜜の甘きに酔へる狂蝶の生涯で、些の悔恨もなければ道念もない。かの書には盛者必衰の世相がある、悲痛の極、心身

を腐蝕する「幻」の巻または厭世悲哀の情調の溢れた「宇治十帖」がある。この書には此の地の歡樂になほ飽き足らずして、更に遠く女護島の理想郷に赴くの結末がある。たゞそれ快樂である、耽溺である、沈湎である。二代男の思想もさうである。三代男も亦これに洩れない。

『二代女』は『二代男』にまされる傑作、好色本の髓腦を以て目せられたものである。北山陰に隠遁した老女が、その宮仕へ遊女世間寺の大黒などと移り行く身の上を語るに托して、社會の裏面を描寫してゐる。『五人女』は當時巷談に隠れなかつたお夏清十郎・お七吉三・おさん茂兵衛・樽屋おせん・おまん源五兵衛の情事を叙述したもので、西鶴の著作中最も小説的趣向に富んでゐるものである。これを近松門左衛門の『源五兵衛おまん薩摩歌』『五十年歌念佛』に比較したならば、直に二者の別を知る事が出来る。近松は道義の上に立ち、西鶴は社會の制裁を絶してゐる。痴男痴女の行爲にも同情の涙を惜しまぬのは近松、冷かに文明の闇黒面と人間の罪惡とを抉出するのは西鶴であつた。實に西鶴は奇警の觀察と精透なる眼光とを以て、極端なる寫實の態度に出でたのであつた。

放逸なる時世もやがては緊縮する様に、さきの遊蕩兒は今更めて勤儉ははり、身代のやり繰り、家業の才覚などを記して精緻を極めてゐるに驚かされるが、しかしなほこの種の著作にも西鶴獨特の觀察と筆致とを見る事が出来る。

西鶴はもと俳人であつた故に、その文體も俳諧より出で、雅にも俗にもあらぬ自由奔放の一體を成した。突如として語句の轉變し繼續する所に、適勁の見るべきものがある。たゞその省筆も度を過して、或は文意の朦朧を來すのがある。

西鶴の模倣者は漸くその數を加へ行く中に、よくその風體を傳へて能文の譽を得たものは西澤一風・錦文流・都の錦である。共に寶永享保頃の人。また西鶴の門に北條團水があり、青木鷺水がある。

都の錦は穴戸鐵舟の別號である、事を以て遠島に處せられたが、その京にあるの日、『御前御伽婢子』『元祿會我物語』の著があつた。その『會我物語』は蓋し浮世草紙に傳奇物の趣向を加味したものの先驅である。

一風と文流とは共に長ずる所は淨瑠璃であつて、小説家としては聊か後れた自笑、其積にその名聲を遜つた。されど、小説の脚色を具へ一篇の中に首尾一貫するものは一風・文流に始まつた。この點に於いて自笑等は正しく承繼者の位置に立つのである。一風に『御前義經記』あり、『風流今平家』あり、『町人身の手鑑』がある。文流に『棠

大門屋敷』があり、『熊谷女編笠』がある。後者は寶永三年、京下立賣堀河東へ入る民家に於ける女仇討を骨子としたもので、同年に刊行したのである。當時最近事件に取材する事は漸次行はれ始めた。上に列挙した書は皆一部一條の結構を有せる續き物で、讀本に近き性質と脚色とを具備してゐる。

團水に西鶴の『日本永代藏』を模倣した『日本新永代藏』がある。この種のものに月尋堂の『世間用心記』がある。團水に怪談の書『一夜船』がある。之に類するものに青木鷺水の『お伽百物語』及び『近代因果物語』がある。鷺水にはまた假名草紙の『堪忍記』等の教訓物を踏襲した『本朝新堪忍記』がある。この種に屬するものに林文會堂の『武家堪忍記』があり、月尋堂の『武道真砂日記』がある。かくの如く新著相踵いで出で應接に違なき中に、八文字屋物の聲望ひとり高かつた。

八文字屋は京都の書肆である。店主は安藤八左衛門、自笑と號した。淨瑠璃の正本及び芝居評判記を發刊して世に聞えた。芝居評判記はもと遊女の細見に基き、その位附もまた遊女の位附に模したものであるが、更に遊女の上に轉用して『傾城色三味線』を出した、それは元祿十四年の事であつた。

『色三味線』すべて五冊、島原吉原新町、蘆木町、室津等の遊女の名寄を載せ、それに毎冊五條づゝの小話を附録としたのである。文獻内容共に西鶴の『浮世草紙』に似てゐる。その後三味線の題號甚だ時好に投じて、『曲三味線』、『繼三味線』、『友三味線』、『二挺三味線』、『歌三味線』、『連三味線』など、かの『色三味線』と合せて所謂八文字屋の七三味線相ついで出でた。こゝに於いて、さきの名寄はいつか客となつて、附録の小話が却て主となつた。

花柳の巷話も篇を重ねては陳腐に歸す。されば趣向を一轉して當時行はれた『贅歎記』に附會して『傾城禁短氣』を出した。宗論談義に事よせて、男色女色の優劣を事例をかしく叙述したものである。この書世に行はれて、作者の名も次第に高くなつた。さはれ、自笑は眞の作者ではなかつた。正徳四年に『役者目利講』が書肆江島屋から刊行せらるゝに及び、世人はじめて眞の作家に接したのである。江島其磧がそれであつた。其磧いはく、

この作者其磧、松本治太夫方へ淨瑠璃を作り遣はし、その語り本を八文字屋へ遣はし板行させ候てより、年々の評判本は申すによおはず、傾城色三味線又は曲三味線、禁短氣、傳受紙子、色情あひ雛形、御伽會、我の類なぐさみの書、數年數多遣はし候處に、各々様の御意に、いり、八文字屋八文字屋と是より浮世本評判本の名取の

やうに罷りなり候事、八文字屋の功にて候や、作者其磧のにて候や、此段は、ハかりなから世上の人さま御了簡被下候。

其磧(二三二七—二三九六)通稱は市郎右衛門、放縱のために家産を蕩盡した後、小説に筆を染めて口を糊した。即ち八文字屋物の代作をなしたのである。八文字屋物の名利ともに盛なるに及び、兩人合作の署名をなしたが、後更に利益上の紛擾から、断然八文字屋と断ち、その子に書肆江島屋を出させ、役者目利講に於いて内情を曝露した。自笑は大に狼狽し、『役者色系圖』に於いて抗辯し、爾來刊行書上に於いて論争をつい、更に多田南嶺を聘して代筆させた。其磧また筆を鼓して力めたが、八文字屋の従來の名聲に壓せられた。しかし自笑も勁敵侮り難しと見て相和し、また合作の署名で出版を續けた。その競争の位置に立つこと前後六年。

その競争の期間に於ける八文字屋は、依然たる舊様を守つて野郎遊女の小話をくりかへすに過ぎなかつたが、其磧は常に新趣向を出すにつとめた。その最も注目すべきものは『世間息子氣質』である。これは奇警の觀察を以て浮世草紙に一生面を開いたもので、所謂氣質物の嚆矢である。『世間娘氣質』相ついで出でた。これまた其磧が傑作の一である。

かくて自笑との和成るや、其磧は八文字屋及び其の他の版元の爲に筆を揮うて多作驚くべき者があつた。『風流軍配團』『義経倭軍談』『商人軍配團』『渡世身持談義』等の傑出せるものがある。其磧の歿後自笑は其の子其笑と連署して著述を出した。しかし作は南嶺の手によつて成つたものである。

南嶺(二三五八—二四〇六)名は義俊、壺井鶴翁について有職故實を學び、博識を以て稱せられたが、素行の修らないので非難の的となつた。其磧自笑不和の際に、縦横の奇才を以て八文字屋物の著作に従ひ、輕妙の文辭をなした。その作に『世間母親氣質』『鎌倉諸藝袖日記』が最も聞えてゐる。延享四年に自笑歿し、寛延二年に南嶺が歿してから、八文字屋物つひに寂寥を告げ、たゞ評判記の出版によつて辛うじて命脈を寛政天保に繋いだ。

要するに、八文字屋物は多種多様であつた。或は軍記物・實録物の後を追ひ、淨瑠璃の趣をも加味した時代物の類がある。其磧の『國姓爺明朝太平記』の如きは最も知られたもの、されどこれ未だ深く稱すべきものではない。その特筆すべきものは西鶴の好色物を模倣した種類の作である。『色三味線』の類がそれであるが、文辭に西鶴の適勁なく、内容にその奇警はないが、複雑なる脚色と暢達せる筆路とは却て優れたと

ころがある。これにつぐのは氣質物である。それは嫖客遊女の性格描寫から出で、一般の人物に及ぼしたものだ。西鶴の『當世女容氣』も實は當世婦人の特質を寫したものであつた。今や息子から手代、役者、商人、母親、長者にも及んだ。皆ある階級に屬するものゝ特性を描寫して、その口吻動作を縦横に活躍せしめた。この流行甚だしく、また遙か後にまでも及んだ。

第三期 文運東漸時代

第一章 時代の概観

元祿文學が近松と西鶴とを擁して京阪の地に光彩を放つたことは、最早や昨日の夢と過ぎ去つた。水も動かねば腐るのたとへ、今や京阪の文藝は沈滞し盡して、さきの千紫萬紅の偉觀は杳として其の影を沒した。豊竹、竹本、二座の操も衰微に歸すれば、八文字屋本も舊套陳腐に陥つた。然るに、江戸は新興の文藝を拉して起たうとする。京阪文運の移植に孜孜として力むる事、に數十年、漸く蕪雜粗笨を抛つては、じめて文明の華に接しようとする。洒落本の祖たる『遊子方言』また讀本の祖たる『本朝水滸傳』の刊行も、實に明和安永の際である。而してまた江戸の淨瑠璃界に『福内鬼外』を得て、喝采の聲の高く揚つたのも此の頃である。これ實にこの期をば地理上より見て、文運東漸時代と稱する所以である。

もしそれ、江戸に居を移し、江戸に其の學を講じたる賀茂眞淵に至つては、學統を荷田春滿に受け、その遺志を奉じて國學の基礎を大成した。これ即ち前期の事業を繼承したるもので、更にまた次期に於ける宣長、篤胤のために、その素をなせるものである。かくの如きはたゞ國學の上に於いてのみふべきではない、この期の文藝は一期として之を前期に承けて後期に傳へざるものはなかつた。前期に於いては、ひたすら性理を明にし、彝倫を窮めた漢學の後をついで、各方面に研究を廣め行きて、純文藝としての詩文の學も大に行はれ、支那情調、支那趣味の間に唸唱するの徒も多く出た。彼が詩文を鑑賞するの極、それが稗史小説をも研究し、耽讀し、或は翻譯し、或は翻譯し、更にその趣向と脚色とを我にうつさうとして、こゝに次期に於ける讀本を發生するの因をなした。浮世草紙の奇警なる觀察と、八文字屋本の暢達せる筆致とは、相合してこゝに洒落本の新様を生じ、洒落本は更に次期に於ける人情本に推移しようとする。故に、この期の文藝は、一面よりすると元祿期の完結と見るべく、他面よりすると江戸に於いて發すべき文化文政度の精彩の端を開けるものと見るべきであ

る。この時代の文藝は獨立のものとして見るよりは、寧ろ歴史的價値に於いて優つてゐるものである。随つて、この期に於いては、特筆すべき程の偉大なる文人に接する事の出来ないのを遺憾とせざるを得ぬ。眞淵の如き一二のものを除く外は、たゞ功を陳吳としてとゞむるにあるのみ。これ實にこの期の特色で、また已むを得ざるもの、深く遺憾とするに及ばぬ。寧ろ最も遺憾とするところは却て他に存する、趣味の低落すなはちそれである。

元祿の世は驕奢華美の世であつた、而も國民自覺の世であつた、生々活躍の時代であつた。その剛健明快といふが實に當代の風尙であつた。然るに何事ぞ、明和安永の世は安逸惰弱の世である、輕浮柔婉の世である。纖弱淫靡といふ事がこの時代のすべてに通じて最も著しい特色である。當年の生々活躍たる元氣國民の自覺、今はいづこに於いても之を求め、事が出来ない。

世をあげて茶事插花に心をくだき、豊後節富本節にうき身をやつし、縞縮緬の上着、役者染の下着、衣類對たけの羽織を着こみ、紐をさきに小さく結び、駒下駄の齒にかゝるやうにして下げ、腰のものは落しざしに懷手して、市中をぶらつく文金風の髪を結び、よりや、三日月のやうに細く上下よりすり込みたる頼眉や、さては駄洒落地口、談言葉に意氣揚々たるあさましの姿を見たらば、誰かまた輕妙をこれ尙ぶ、黄表紙、猥雜をいとはぬ、菟菟本、酒脱これ足れりとする川柳狂歌が、鬱然雲の如く興つたことをあやしむ者があらうぞ。また誰か江戸文學に於いて結構複雑にして思想高遠なる大作雄篇を望む者があらうぞ。

それにしても珍らしかつたのは、十八大通の豪遊であつた。十八大通とは多く藏前なる札差者の徒である。旗本御家人の俸祿たる倉米の請取方から賣買を受負ひ、更に祿米を抵當に金を貸して高利を貪り、ために巨萬の富を累ぬるに至つて、遊興三昧、或は意氣と稱し、或は粹と稱して、通人の名聞を争ふに至つた。中にも、その第一人たる大口屋治兵衛が姿こそ、二代目柏筵以來の助六が扮装そのまゝに、大黒を眞向に色ざしの加賀紋にそめさせた黒小袖小口の紋付を着流し、鮫鞘の一腰一印籠、下駄を穿いて大門を入れば、仲の町兩側の茶屋の女房出で、そりやこそ福神様の御出でと、わやわやといふ騒ぎ。これ札差者の、つねに武士に應接するため、自ら品位高く、また江戸前の豪放なる氣風の存して然るものを出したのであらうか。利倉屋庄左衛門は銀の針金元結で藏前本多に髪を結び、文魚は落魄の後も人前飾りて御屋敷に行くふりして丸の内に小便しに行くなど、すべてこれ名聞の沙汰、虚榮の競争、誰かまた

元祿期に於ける紀文奈良茂に比すべきものがあらうぞ。戀愛もまた虚榮の競争、遊戯の沙汰、誰かまた近松に於ける相思纏綿未來を契つて莞爾死に就くの意氣を討ぬべきものがあらうぞ。吉原には揚屋もあらずなり、遊女に太夫の位もあらずなり行き、世には淫靡の風のみひろまり、三笠附冠附の博奕に類する事のみ行はれた。これ等すべて一言にして、いひつくす事が出来る、即ちこれ趣味の墮落、そは實によく當代の俗文學に於いて明に反照せられて居る所である。

學者もまた然うである、迂遠なる理想説を持して堯舜の世を夢みるの徒でなければ、徒に玩物喪志の輩に過ぎなかつた。『梧窓漫筆』のいふ所をきけば、近年は奢侈の餘習にて學者學問して義理を講ずる事は得知らず、唯書畫古器物を好み、筆硯文房の具を集めて、學者の態を装飾し、無學不文にて藝苑に濫入して學者文人の名を冒さうとする。典籍も書畫器物と一様の玩物となり、學問も風流好事となり、今や學者學問を業とせずして、書肆や古物を業とするもの多くなつたと。

風來山人の『飛花落葉』にはまたいふ、孝悌忠信を口に稱し身に行ふ君子ありとも、當世これを稱して野夫といひ、武を知り國家を守る者を人嘲りて新吾左といふ、またこの譏を免れんと思ふたわけは、ぬしと呼び、わつちと稱へ、顔は白きを厭はず、脇差は細きを厭はず、今の浮世に交はらんものこの境を知らねばならずし。

不眞面目なる世、墮落の世、一代趣味の下行は止まる所を知らぬ。さすがに英明主吉宗將軍が節儉自ら奉じ、尙武の氣風の發揚に力め、財政の整理、府庫の充實に意を專にしたので、質素健實の風も大に起つたもの、それも一時の現象に過ぎなかつた。されば吉宗が綱紀の振肅もその功や大に説くに足らず、却て人心の萎靡を來した觀がないでもなかつた。享保七年(二三九二)の御觸書中主要なるものを擧ぐると、すべて五、

自今新板書物之儀、儒書佛書神書醫書歌書すべて書物類、其の筋一通り、事は格別猥りなる儀異説等を取交へ作り出し候儀堅く可爲無用事。

只今まであり來り候板行物のうち、好色本の類は風俗のためにも宜しからざる儀に候間、段々相改め絶板可仕候。

人々家筋先祖の事杯を彼是相違の儀ども、新作の書物に書きあげては世上に流布致候儀有之候、右の段自今御停止に候、若し右之者有之、其の子孫より訴出候に於ては急度御吟味可有之筈に御座候。

何書物によらず、此以後新板のもの、作者、開板元の實名與書に爲致可申事。

權現様の御儀は勿論、總て御當家の御事、板行書本自今無用に可仕候、無據子細有之は奉行所へ訴出で差圖を請け可申事。

これによつて見ると、法令が必ずしも苛酷であるとはいふ事が出来ぬ。當時の淫猥なる幾多の書籍に對しては、寧ろ制裁こそその宜しきを得てゐるともいひ得るのである。しかしながら、事苟も將軍家に關するものは斷じて筆にする事を許されず、或は異說等を取り交へ作り出す事を禁じて思想の自由を拘束するなど、文藝の發達を待つにあらす、趣味の向上を期するにあらす、要は社會の秩序安寧を保たうとするにある。否、その主とする所は、一に爲政者の權威を縮めざらしめようとするのにある。これ實に一代を驅つて固陋に陥らしめたのである。その因循固陋と趣味の墮落とは相合して、當代の文學をして萎靡の狀に至らしめたのである。その墮落より脱し、その固陋を破らうとするも、そこには幕府の壓迫がある、迫害がある、憤懣自ら發して嘲罵の文をなせるわが風來山人の見るに足るものゝあるのもこれがためである。白眼世相を遊戲視して、その滑稽洒落を狂歌に發したるわが蜀山人の稱するに足るものゝあるのもこれがためである。かくの如く見來れば、文運東漸時代の文學も、また決して之を等閑に附すべきものではない。

第二章 詩文の勃興

この期の漢學を叙するには、まづ三事項をあげて説かねばならぬ。三事項とは、學派の紛争と、詩文の勃興と、支那小説の流行とが、即ちそれである。

さしも天下を風靡した徂徠が一度世を棄つるや、護園の徒はつひに朱子學派の論難攻撃の的となつた。而してその二大學派以外にも、新學說の陸續輩出するものがあつた。されども、その多くは見る所を異にして然るにはあらで、たゞ人を以て言ふのみに過ぎぬ。これ井上金蛾がいへるやうに、學問の道同好にして否なるもの、異趣にして佳なる者がある。世人阿黨たゞその已に同じきを稱し、已に同じからざる者は没して説かぬ。甚しきは彼我を譽む、我も亦いかで彼を稱せざらん、彼我を毀る、我も亦いかで彼を議せざらんと云ふに至る。この風一蕩、浮薄日に成り、市井の亡頼のやうに目を瞋らし、擘を攘ひ、喜んで人を罵詈する。士たる者は宜しく之を愧づべきものであつた。しかしその新學派の主なるものには折衷學派がある。片山兼山及び金蛾の首唱する所であつて、更に山本北山、龜田鵬齋、太田錦城によつて完成せられた。兼山(二三九一—二四四二)も徂徠の流を汲んで立つたが、疑難を挾み、古註疏によつて經を説いたが、必ずしも拘泥しなかつた。金蛾(二三九二—二四四四)名は立元、

字は純卿、徂徠の學說、仁齋の學說兩つながらを學んで共に其の意にあはず、別に一派をなした。訓詁は漢唐義理は宋明、また詩は中唐晚唐文は韓柳歐蘇を取つて、大に江戸の學風を正しうした。その經義は朱熹、王陽明、伊藤仁齋、物徂徠の異同を論じ、その長ずる所のすべてをば混じて一家の言をなさうとしたのである。『經義折衷』『匡企錄』『讀學則』説くところ皆それであつた。

また皆川淇園、吉田篁墩の考證學派がある。淇園(二三九四—二四六七)名は愿、字は伯恭、別號は筠齋、京の人。その説く所、字義を明にしないでは、文は作られず、書は解せられぬといふにあつて、象形聲音を研究し、易詩書春秋等を考證して、一新機軸を開いた。その後を繼いで立つたものが篁墩である。篁墩(二四〇五—二四五八)名は坦、字は資坦、はじめ金蛾に學んだが、やがて四子六經を研究し、校勘して、最も精密を極めた。その著に『古文尙書孔傳指要』『論語集解考異』等がある。

その他、『玄語』『贅語』『敢語』の三語を著はし、條理學を説き出して、神儒佛老の以外に一新學說を創めた三浦梅園(二三八三—二四四九)があり、『夢の世』を著はして、宇宙の森羅萬象を説破しようとしたる山片蟠桃(二四〇八—二四八一)があつた。これ等はたゞ考證學派の一端を示すにすぎぬ。その紛争は寛政異學の禁の出づるまでには停止する所を知らなかつたのである。爾來期のはじめに於いて更に説がねばならぬ。學派相わかれ、各其の主張する所を取つて動かす、各方面に於ける研究の進むと共に、詩文の學も大に起つた。木下順庵の門下多士、濟々桃李を以て満された中に、専ら心を詩文繪事に潜めたものは、祇園南海である。

南海(二三四五—二四二一)名は瑜、字は伯玉、紀州侯の士、早く木門にあつて、聲名あり、十七歳の時、自ら其の藝を試みるといつて、春分の日、午時より子の初に至るまでに、五言律詩一百篇を賦して、大に稱せられた。されど之を疑ふ者があつたので、秋分の日、午漏初下より賦しはじめて、夜半に至るまでに百篇をなした、しかも前作と一の同趣同工の者はなかつた。そこで人稱して今の賈生といふに至つた。著書に、『南海詩集』、『詩學逢原』、『詩訣』等がある。その詩に於いて主として唱ふる所は影寫法であつた。順庵門下の會に韻を探り、用字を得て、『擣衣』の詩をなしていふ、『誰家少婦驚秋夢、玉杵夜寒擣練用、夜々鳳城月色高、朝々燕山雪花重』と。座に其の題意を失つてゐることを咎める者があつた。南海いふ、これ顯はさずして擣衣をいふものと。順庵聞いて、これこそ深く鏡華水月の趣を得たのである、よろしく影寫法の赤幟を騷壇に樹てよと。南海が主唱はかくして始まつたのである。南海晚年徂徠の徒が模擬、釘魚風を成す

を見、それを嫌ふの餘りに「詩盜判」を作つた。一生つねに他人の詩句を剽竊するを好める者が、冥府に於いて閻羅王のために訊問せらるゝ、狀を敘して、大に時弊を誚つたものである。

げに此の時に當つては、一世の詩風を擧げて、徂徠一派七子の風格であつた。その弊は剽竊雷同を事とするにあつた。南海の嫌らなかつたのはこれが爲である。しかも七子の詩風即ち明詩の風格の行はるゝのは、その行はるべき理あつて然るのである。されば、南海の如きも唐を宗とはすれど、また明の格調を存して居るのであつた。江村北海その著『日本詩史』に於いていへるやう、明詩の近時に行はるゝは氣運之を然らしめたのである。詩體はつねに氣運に従つて進遷する、而してわが詩史によつて證すれば、我邦の變遷は大方漢土よりおくるゝ事二百年である。わが元祿は明の嘉靖を距ること恰も二百年、七子の詩はまさに行はるべきであつた。されば、さきに那波活所が『備忘録』に於いて、永田善齋が『膾餘雜錄』に於いて、七子に論及せるものがあつたが、氣運未だ熟さず、ただ徂徠の時に至つて熟し、白石、滄浪、蛟巖、南海、大抵徂徠と同時、並に護國の餘勇を買ふものでないが、亦明詩の聲格である。

今や徂徠の後、詩文を以て世に開いた者の多し、中て、南郭、南郭を以て第一に推すべきである。南郭二三三四三二四一九名は元喬、字は子遷、また其、漢館とも號した。京の人、若き頃江戸に下つて徂徠に就いて學び、後に柳澤公に仕へたが、やがて致仕して風流韻事に日を送つた。人の時事を問ふものがあると、晒うていふ、文士迂濶時務を知らないで空談する、塞人の道を謀る類であると。また敢て經義を説く事がなかつた、しかも人は之を信せなかつたのである。南郭はその父元矩の遺風をうけて和歌にも通じ、また繪事にも通じて畫論のきくべきものが少なくなかつた。南郭の詩集四編あり、世は多く詩文共に第一第二を以て未しとし、第三第四を以て佳致に造れりとする。南郭は才の人である。故に其の律聲動もすれば法度を失つたものがあるといへ、その合作に至つては、眞に古人に配するに足るといはれた。

同門中詩を以て稱せらるゝもの、高野蘭亭、安藤東野、梁田蛟巖、秋山玉山がある。蘭亭名は惟馨、字は子式、暗記に精なる警者のならひ、よく唐明大家の作を暗誦した。また自ら作る所も殆ど佳境に入り、南郭と聲譽並び馳せた。東野、名は煥圖、字は東璧、徂徠の一中門に於いて俊才遠く群を抜き、加ふるに刻苦勉勵した故に、名聲大にあがつた。されど、略血の疾に罹り、年僅か三十七歳で歿した。徂徠の悲痛、同門の憂愁は筆紙に盡しがたいものがあつた。蛟巖は、白石及び南海と相並んで三大家の稱があつ

た。嘗て小集に於いて、人の石見國如硯の對を求めた時に、巖嶽直ちに朗吟して、竹生島似笙」というた。その機才は驚くべき者があつた。されば時人は彼れを評して、人はその才の乏しきを憂へ、彼はその才の多きを惜しむといふに至つた。蛻巖またその格調屢變じた、はじめは宋をまなび、中年は唐を取り、更に明を範とし、遂に初唐を以て標準となしたのである。玉山は「八島懷古」獨體行及び「富士山記」を以て世に知られて居た。

先には徂徠、今や南海、南郭の徒の相踵いで起つものがある、太平無事の極、そが謳歌の聲はおのづから發して詩文とならざるを得ぬ。加ふるに、二人共に畫才があり、船載の典籍によつて南宗文人の畫風を趁うて以來、その風また大に盛に、藝苑に立つの士いよ／＼多きを加へた。龍草蘆といふが京にあつて、書畫會を起し、著作會を起し、或は春秋の發會を起した。また嘗て嵯峨の酒舖のために、釀成春夏秋冬酒、醉倒東西南北人の一聯を作つた。この好事の擧からして、娼樓酒舖茶肆などで或は横匾を出し、或は柱聯をがゝげる事が始まつたのである。支那の俗をうつしたのは獨り之のみでない、世の趨勢は自然と幾多の詩社を出すに至つた。その中での聞えたものは、龍草蘆の幽蘭社、江村北海の賜杖堂、高陽谷の瓊浦芙蓉詩社、片山北海の混沌社、安清河が市隱社、また服南郭の芙蓉社等である。その中でもとりわけ混沌社と幽蘭社とが、その名の著はれたるものである。混沌社が嘗て詠史會をなし、一時艶稱して、その警句を傳へ、その題を以てその人を稱すること、例へば岡魯菴が「跡留楊柳路傍水、望入芙蓉峯頂烟」の句あるによつて西行法師の稱を得るが如きものがあつた。幽蘭社には香居敬、大江資衡、蟠君美、李景義等の所謂十才子があつた。

江村北海(二三七三—二四四八)は高祖專齋より、家世々其の美を濟し、相繼いで先業を墮すことなく、毎月十三日諸名士及び門人子姪その賜杖堂に集つて詩を賦すること、專齋の時より北海に至るまで五世、百五十年の久しきに亘つて未斷絶せず、當時賜杖堂詩盟會というて世に誇稱した者である。この時は詩文の流行極まる所を知らぬ、されど倫理をいはず、修養を顧みず、たゞ風流の戯をこれ事として、つひに相率ゐて輕佻浮華に流れやうとした。この北海の如き資性敦厚加ふるに風雅溫藉を以てし、大阪の片山猷、江戸の入江貞と共に三都の三北海を以て稱せられた中の第一に推され、また『日本詩選』正續編『日本詩史』の好著あるけれども、なほ時人は「納錢入選江君錫」というて誚つた。君錫は北海の字である。蓋し北海の『日本詩選』を著はす際、好名の徒が詩稿を携へ行きて其の採擇を請へば、北海は必ず刻費の資にとて若干錢を取り、僅

にその一二首を牧めたので、かくいはれたのである。時人また之に對して「待價作文龍子明」といふ語をなした。子明は草廬の字である。その草廬の傳を見れば、如何に輕佻の風が累をなしたかを見る事が出来る。草廬(二三七五—二四五二)名は元亮といひ、伏見の人でもと商賈の出であるが、簿書計算の暇に宇明霞の誨督を受け、唐明の諸家集を學び志を詩歌にとめた。明霞が草廬の經義を研究せざるのを見て拒絶するに及び、草廬大にこれを憤り、未だ嘗て明霞と相見た事はないと稱した。草廬博識を以て彦根侯に仕へた。その近江にうつる時、諸友が送別の詩を編したものを「縮柳編」といふ。侯に従うて京に上つた時にも亦送別の詩があつて、これを編したものを「晝錦集」といふ。また孔文雄と唱和の詩を録したものを「龍孔損篋集」といふ。是等は皆刊行して公にしたので、心ある者でその誇驕賣名の甚しきを笑はぬものは無かつたといはれてゐる。草廬致仕の後は京に出でた。草廬の所説亦徂徠に左袒すれど、而も時流と異なる所がある。唐にあつては李青蓮の岑嘉州を推し、明に於いては劉青田・謝四溟を尙んで別に一機軸を出した。草廬は人の需に應じて文を作る時は、まづ謝儀の多少を定めて後に起稿した。故に其の速に成る事を欲するものは必ずまづ財幣を贈つた。さればこそ待價作文の時評も起つたのである。されど、晩年には深く其の浮名を懸ちて需に應せず、人を誑めて文墨の頭末に従事するなく、大に意を經術に留めよといふに至つた。

草廬の名世に藉甚せる時、長崎に高陽谷があつた。陽谷(二三七九—二四二六)名は彝、字は君乘、もと釋大潮に就いて詩を學び、詞壇の主盟を期した。陽谷かつて草廬を見て大に其の才を推稱し、草廬また陽谷を當今第一の人と稱美した。これ實は相謀つて互に其の聲價を賣らうとするのであつた。陽谷ますく其の聲譽を大にしやうと思ひ、清商に賂して沈歸愚に書を送り、また吳中七子に詩を贈らうとした。清商沈氏の答書及び七子の和韻を偽造して、陽谷に致した。陽谷欺かれたとは知る由なく、再三拜跪し朝夕展玩して居たが、後數年沈氏詩鈔の舶載するに及び、その事遂に暴露した。この笑ふべき一事は、當時文人の心情のいかに陋劣であり、また自己の聲譽に對して如何に營々としてゐたかを知るに足りる。

かゝる中に於いて、桂山彩巖の如きは大に特筆すべきものである。彩巖(二三三八—二四〇九)名は義樹、又は君華、江戸の人。林整宇の門から出で、幕府に仕へ、御書物奉行となつた。宏覽多識しかも退讓を守つて居た。室鳩巢かつて彩巖を稱して、其の行敦篤、其の材浩濬にして雄峭であるといふた。梁田蛻巖亦彩巖に書を贈つて、其

の門戸を持して文壇の主盟となり、江左の文柄を司るべき事を勧めた。されども彩巖は遂に起たなかつた。その没するに臨み、遺言していふやう、我生きて學に報ゆるなく、また官績もなし、墓碣碑を修むる事なかれと。

詩文の流行は更に進んで小説の講究を促すに至つた。その最も小説稗史に通曉してこれが先鞭を附けたものは岡島冠山である。冠山(二三三四—二三八八)名は璞、字は玉成、長崎の人、華音に通じ、譯士として萩侯に仕へたが、その賤役なるを慙ぢて辭し、専ら性理の學を修めて、その名漸く聞え始め、京に江戸に浪華に帷を垂れて講じ、從遊する者が頗る多くあつた。冠山はじめて稗官の學を唱へたのである。その頃の學を以て知られた者には晁世美あり、陶冕あり、秦熙載があつたけれども、皆冠山の風を追うたのであつた。冠山の著に『唐話纂要』『唐譯便覽』『通俗元明軍記』『通俗明清軍談』『小説讀法』等がある。冠山また羅貫中の『水滸傳』を校定し、國譯を施して世に行はうとしたが、その刻の未だ成らぬ中に歿した。享保十三年(二三九八)その初版が出来上つて、第一回より第十回に至るまで、あつたが、是れ實にわが邦に於いて稗史を刻する事の始である。

岡白駒また冠山について世に知られて居る。白駒(二三五二—二四二七)字は千里、

號は龍洲、はじめ醫を以て立つたが儒にうつり、京に於いてその名を專にした。その著書も甚だおほく、『詩經毛傳補義』『左傳麟』『荀子麟』『史記麟』『小説奇言』『小説粹言』『小説精言』等がある。或はいふ、白駒つねに人後にあるを忌み、みづから詩を以て量るに服部南郭、祇園南海、梁田蛻巖の右に出づることは難いと考へて、また詩を賦する事なかつたといはれる。その『左傳』『荀子』等の麟を著したのは、當時の學界の趨勢を顧みて、大に名を成しやすと思つた故であるといふ。されど、識者は其の臆斷の多きを笑ひ、却て傳奇小説に通ずる事を認めたのである。

この支那小説の講究は俗譯翻案を頻出せしめ、その結果は次ぎの化政時代に就いて讀本の流行を來すに至つた。馬琴が筆硯を以て縦横の才を揮ふことを得たのは、實にこの二人の賜ともいはねばならぬ。

第三章 眞淵と蘆庵

賀茂眞淵(二三五七—二四二九)は遠江國敷智郡岡部郷の人、通稱は莊助、又參四、諱は政信というて、岡部新宮の禰宜の子である。眞淵父の命により、出で、濱松の本陣梅谷甚三郎の家を嗣いだ、併し天成の偉才は、到底空しく一旅舎の主で甘んずることを得しめない。その妻まづ夫の意中を推し、終身の策を決し、名を後代に揚げよと勧め

た。眞淵は遂に意を決して京に奔つた。時は享保十八年三十七歳であつた。眞淵の意を國學に傾くるに至つたのは、敬神の念篤き父と歌の道にくらからぬ母との感化によるとはいへ、またその友たる杉浦國頭及び森暉昌に負ふところが多かつた。二者共に荷田春滿の門弟、眞淵はこの二友を通じて春滿を見、また其の學説を聞くを得たのであつたが、こゝに即ち春滿の門に入つたのである。春滿いちはやくも其の才力の俊秀なるを見、おのれの志を繼がしめるに足るとし、その蘊蓄をあげて之に授けた中にも、禮儀式典に關するものをば養子在滿に傳へると共に、眞淵には『紀』記『萬葉』の研究及び語學に關するすべてを教へた。然るに春滿はやがて世を去つた。眞淵が就いて學んだのはたゞ四年に過ぎぬ。されど、その後年の事業は、實にその間に涵養せられたのである。かくて江戸に出で、村田春道の家にあつて潛心古學の研鑽に力めた。已にして醫師大野古道まづ名簿をおくり、尋いで加藤枝直に知られ、後にはその家に迎へられた。枝直はもと幕府の與力である、眞淵の住所が其の所管内に屬するために行いて其の正邪を探つたが、其の説に服して交情日にまして篤きを加へたのである。かくて眞淵の名は漸く江戸に聞えはじめた。延享三年在滿の推舉によつて田安侯宗武に仕へた。これその雲蒸龍變すべき時の來れるもの、何等後顧

の憂よく、よく眞技倆を發揮する事を得た。幾多の研究はかくの如くにして成る事が出來た。その仕官の年に『祝詞解』成り、寛延二年に『萬葉解』成り、寶曆七年に『冠辭考』成り、十年に『萬葉考』が成つた。その年致仕して閑散の身となり、十三年近畿の旅程に上り、伊勢の松阪に本居宣長を見て師弟の誼を結んだ。あくる年明和元年に濱町に移り住み、自ら縣居と號した。庭を野邊また畑につくり、處もいさゝか片ほとりであるから然かいうたのである。この年に『歌意考』、二年に『國意考』、五年に『祝詞考』、六年に『語意考』成り、その他幾多の著を残して七十三歳の高齡を以て歿した。

眞淵の著書、大方は上代歌謠に關する研究である。げに和歌の復興また古學の興隆は先進の主唱に係るとはいへ、その功を收めたのは一に眞淵の力によるのであつた。されば自らもいうた、契沖はよく開墾せしも樹藝を終へず、わが師の大人春滿は樹藝せられしも、未だ收穫を終へずして逝けりと。收穫の功は蓋しみづからを以て擬したのである。本居宣長また評していうた、この大人の起らざる以前、學問は『古今』以後のみにて、『萬葉集』は心も及ばぬものとして顧みず、然るを其の古言をおのがものとして『萬葉』ぶりの歌を詠み出で、古ぶりの文をさへ書き得るは、専らこの大人の教の功である。

真淵が國學に於いて最も力を傾注したのはわが國民性情の闡明である。漢學は我邦に渡來して既に千有餘年を過ぎた。その所説こそは人爲の極形式を尙ぶ風となつたので、わが國の天地のまに／＼治めようとするのとは全然相反して居る。されば漢學の行はるゝにつけて、雄渾素朴なる風俗は次第々々に輕薄文弱と化し去つたのである。その雄渾なる精神のうせはたてたことが自然に歌の上に現はれて、丈夫ぶりを失つて手弱女ぶりとなつた。和歌の頽廢と漢學思想の傳播とは、相俟つて世は末となつた。あはれ古に歸れ、板の屋根、土の垣、ゆふの麻の衣、黒葛卷の太刀とやうにして、天皇御自ら弓矢を携へて獵し給ふ程にこそあるべけれと。真淵は斯の如くにして、古を以て今に優れりとし、今日の文明を棄て、遠き神世の昔にあこがれたのである。その所説の如何に老莊の言と相似たるの甚しきぞ。また何ぞ徂徠等の古文辭學派のいふ所と吻合することの多きぞ。真淵が未だ郷里にあつた頃、古文辭派の渡邊蒙闇に就いて學んだといふも、多少の所縁がないとも思はれぬ。

わが古道を知り、また支那思想を受けざる古のわが國情を知るには、如何すべき。

これ上古の和歌、就中『紀』『記』『萬葉』の詠によるべきである。古歌に明かなれば隨うて古意は明かである、古歌に明かならうとすれば、まづ古語に通曉すべきである。真淵

が『萬葉考』『祝詞考』などの註疏を出したのはこれが爲である。その著書の大半が上代歌謠の研究にあるのもこの故である。中にも『萬葉』の研究は最もその髓腦に入り、終に『萬葉解』『萬葉考』の大作をなしたのである。真淵が上代和歌を以て古道闡明の手段となしたのは、その獨特の歌論に出でたのである。歌とは人の誠のおのづからに謠ひ出されたもの、その真情の流露と形式の自然とは、上代和歌に於いてのみ見るべきである。かの古今以後の和歌に至つては、技巧を求め、粉黛の美を求めて、詞花言葉の戲となつた。かくの如き意見を有する真淵の詠歌は如何。その高弟たる加藤千蔭のいふ所をきけば、その歌風の變遷は三時期を劃した。「初の程は、物學びたまへる荷田の春満宿禰の歌にかよひて、華やぎ、たよわき様なりしを、中頃より自らの一の姿となりて、雅にして調高く、しかも雄々しきすぢを詠み出され、齡の末に至りては、いたく思ひあがりて、設けず、飾らず、誰も心の及び難き節をのみ作られき」と。即ち第一期は華麗の風體範を『古今』以後に採れるもの、第二期は雄大崇高たとへば

見わたせば天の香山畝傍山争ひ立てる春かすみかな

大比叡や小比叡の雲のめぐり來て夕立すなり粟津野の原

鴉鳥の葛飾早稻の新しぼりくみつゝ居れば月傾きぬ。

の如く、よく『萬葉』の堂に入りて更にまた典雅の加はるものがあつた。第三期に至つては、つひに角を矯めんとして牛を殺すが如く、詞彩の洗煉なく、たゞ古語を綴れるのみ、興味いと々索然たるものが多くあつた。吾人は、徒に大空に雲の梯たて、昇り難きやうに覺ゆる」というた村田春海の言を首肯せざるを得ぬ。

この三期を通じて、眞淵が歌壇に於いて其の覇を稱するに足るは、その長歌を以て雄大なる思想を詠じ出した點である。これ實に他の逐追を許さざる所である。その詠及び文を集めたものに『賀茂翁家集』また『縣居家集』がある。眞淵の門下三百有餘人、その中にも本居宣長、荒木田久老、加藤千蔭、村田春海、加藤美樹、楫取魚彦、村田春郷、栗田士満、小野古道、加藤常樹、日下部高豊、三島自寛、所謂縣門の十二大家、鶴殿よの子進、藤筑波子、油谷倭文子の所謂三才女、世にその名のかくれなきものである。今やこれ等は、その活動最も盛んであつた次期に於いて説くの便に従はう。

さらばこの時、師範家の基礎固き京都の地は如何であつたらう。そこにはさすがに四天王と世に稱せられた者がある。僧澄月、同じく慈延、小澤蘆庵及び伴蒿蹊がそれである。

澄月(二三三五—二四五九)は天台宗の僧、叡山に上つて修學したが、後志を變じて武者小路實岳の門に入つて歌道を究めた。その歌風は二條家の法式を重んじ、『草庵集』を以て和歌中興の龜鑑なりとして之を推揚した。されば『萬葉』の倂偏なる格調はもとよりその意を得ざる所、隨つて萬葉家を論難し、延いて契沖を攻撃して、斯道の魔障『餘材』に過ぎたるはなしと極言するに至つた。著はす所に『澄月千首』『垂雲軒和歌集』がある。

慈延(生死年未詳)は大愚また吐屑庵と號した。はやくから冷泉爲村の門に入つて歌道をまねび、其の堂に入つた。澄月と見る所を同じうし、契沖を罵つて、契沖といふ者出で歌よみの風卑しく悪しざまになりしが歎はし」というた。この二者共に才藻の見るべきはあれど、なほ未だ舊派の系統を脱するに至らぬ。小澤蘆庵に至つては、その詩才といひ、その風骨といひ、而してまた歌壇有數の硬骨漢であるといひ、まこと四天王中の白眉である。これ特筆しなければならぬ所以である。

蘆庵(二三八三—二四六一)は名を玄中といひ、もと尾州成瀬家の臣で、京都の留守居役であつたが、後致仕して洛東岡崎の地に隱遁した。冷泉爲村の門に學んだが、その天品は遂にその法式のもとに躡すべきものでない、嘗て爲村に、君百歳の後には御家の弟子ではないというたが、果然破門せられた。或はいふ、これ爲村がその偉才を察

し、拘束するに忍びず、寧ろ爲よかれとてなしたのであると。かくて、彼は進んで自己の歌論を説き、歌風を詠み出し、いつか四天王の雄と仰がれた。天明八年火災につて太秦にうつり住んだ頃が、その詠の最も圓熟渾成の域に入つた時である。されば、頼山陽は「杜詩以夔州爲上乘、蘆庵翁和歌爲當代第一、而其避災寓太秦時、稱最深妙、故太秦者蘆庵之夔州也」と評した。蘆庵は、其の性行方正嚴肅、而して豪放磊落、赤貧に處して而も金錢を口にせざる、また富豪三井某が禮に戻れるを責めて毫も假す所のなき、或は蒲生君平をその家に宿して優遇いたらざる所のなき、以て其の一斑を知ることが出来る。

蘆庵が歌學の著に『塵ひぢ』『蘆かび』『或問』『古今六義諸説』『ふりわけ髪』『ふりわけ髪自注』がある。その歌學説は、一は師範家の餘弊に對し、一は眞淵派の萬葉家に對する反抗から起つた。師範家の病弊は今事新しく臚列するの煩に堪へぬ。そが和歌の精神本領を没却するを見ては、眞淵は自然を説き眞情を説いた。即ち眞淵は堂上派の歌の輕佻なるを破るに、高古莊大を以て之に代へようとした。蘆庵は堂上派の頑冥を破るに、清新と自由とを以て之に代へようとした。眞淵は『萬葉』の自然眞情を説いて而も耳遠い古語を用ゐた、これその國學よりの見地がこゝに至らざるを得なかつたのである。蘆庵は何等國學の拘束があるのでもない、極力眞淵の播着予盾を難ずるのは其の所である。歌とは如何、蘆庵はいふ、

歌はこの國の自らなる道なれば、詠まむするやう、賢からむとも思はず、げだからむとも思はず、面白からむとも、優しからむとも、珍しからむとも、すべて求めて思はず、たい今思へる事を我いはるゝ詞をもて理の聞ゆる様にいひ出づる、これを歌とはいふ也。

と。げに我がいはるゝ詞、これこそ眞淵の所説と全然相反するものである。人情は古今に通じて一般なりと雖、言語は時世のうつるに従ふ。かく變り行く中に、今古に通じてうつらざる詞あり、また變ずる詞あり、變ずる詞を強ひて死さむとするは、塵塚の中にくさぐさの古物あり、扇の破れたる、笏の折れたる、沓のかけたるなどやうの物、拾ひあげつゝ拭き磨きなどして、あゝ珍しと遊びあへるが如し。古語を末代に傳へむと思ふ心はやさしけれども、傳ふべき古語あり、傳ふべからざる古語あり。

是に於いて、蘆庵はたいごと、歌をとなへ始めた。そは心を求めずして、思へる處を詞を飾らずして詠するのである。

古は大根はじかみにらなすびひるほし瓜も歌にこそよめ
言の葉は人の心の聲なれば思ひをのぶる外なかりけり

詞の雅俗は深く咎むべき所でない、その分つべきは情の雅俗である、その感想をあらはす誠實の有無である。かくの如くにして、その所謂同情新情の説は起り来る。天地はすべて有情、萬物はすべて同情、これ歌のよく人を感せしむる所以である。誠なる人情もて天地萬物の上を思ひやるその聲が、おのづと發して歌となるのである。故に海士の漁り、山人の木樵、田夫の田植、秋田もる身の上、鳥の妻ごひ、草木の花さき、菓實などの上をも思ひやらねばならぬのである。この人情や、東西古今同一軌に出づるもの、されど時々推移あり、流行あり、たとへば百川海に入るは天地わかれて以來のことなれど、その水は古への水にあらざるやうに、決して陳腐に陥るものではない、人情は時々新しきものである。これその新情説である。この同情新情の論とたいこと歌の説とは、やがて後の香川景樹を起たしめた。

この歌論を物せる蘆庵みづからの詠は、これを『六帖詠草』に於いて見るべきである。作らず飾らず、ひたすら誠を現さうとして、題詠は捨て、顧みず、すべて同情の聲、感想の類すべきものがある。宣長は嘗ていへるやうに、歌に蘆庵あり、東に文人、春海あり、到底わが及ぶ所でない。

大井川月と花とのおぼる夜にひとり霞まぬ波の音かな
世に傳へて絶唱とする所である。

伴蒿蹊(二三九三—二四六六)名は資芳、初は有賀長伯に、のち武者小路實岳の門に入つて歌道を究め、やがて一家の風をなした。方外の友の六如上人が贈れる詩にいふ「老來幾部著書成、祇道屏居遂懶情、最是紙田閑不得、長遭筆耒四時耕」と。蒿蹊大に喜び、これぞわが實録であるというて、その語をとつて閑田とも號した。ひとり和歌に巧なるのみならず、また和文にも秀で、『近世畸人傳』『閑田耕筆』『閑田次筆』『閑田遺稿』『閑田文章』等の著がある。その歌論には『國家八論評』及び『國歌或問』がある。真情のままを美しき辭もてつけむは天に背かずと説き、また『古今集』を以て準據とすべき事を説いた。

以上四天王おのゝ其の優れたる所がある。評する者はいふ、澄月は老輩にして先達、蘆庵は才氣秀發、古體今體自由にて詠歌の上手であり、大愚は新しく面白くよみて歌學に漢學を兼ねた、蒿蹊は澹泊を專一にして言外の餘情を志す、高上の風體であ

ると。蓋しその旨を得たる言である。

こゝに四天王を結ぶに臨んで、遂に筆を慈延と蘆庵の師であつた冷泉爲村に及さざるを得ぬ。爲村(二三六二—二四三四)は凡庸なる二條家中に於いて稀に見るの偉才であつて、その高雅なる風姿の唱すべきものも少くなかつた。その歌論の書に『樵夫物語』といふがある。樵夫と老翁との問答に擬して、歌道を説けるものであるが、さのみ新しき意見のあらはれて居るのでもない。しかし、爲村はかつていへるやう、心正しくて詠み出づる歌は正風である、事に、物に、歌に心をよせれば自然に歌三昧になつて、餘念なきものである。心正しければ身の禍もない、歌よむ時ばかり正しくする事ではないと。またいへるやう、己が心より觀念し出だして實意實景より風情を得て、言葉つゞき優美に、心新らしく、たけもある歌の直に聞ゆるを正風といふのであると。さすがに蘆庵の師たるものゝ言たることが肯かるゝ。爲村は門葉頗る廣く、いづれの國にも弟子のない所はないといふ程であつた。その門にさきの二人の外、萩原宗固がある、『一葉抄』といふを著はした。中原廣通がある、『大澤隨筆』の著者である。阿闍梨法師惠日寂明がある、『歌道根源問答』の著者である。

第四章 俳諧の中興

さきに其角によつて起された江戸座は、輕快洒落なる江戸人士の氣風に投じたのであつたが、その風やゝ嵩じて洒落風となり、化鳥風となつた。洒落風は享保に入つて水間沾徳これを率ゐ、化鳥風は之に對抗して起れるもので、立羽不角これを率ゐたのである。また別に五色墨といふがあつた、これ以上の二風に對して起れるもの、中川風葉、松木蓮之、大場咫尺、長谷川素丸、佐久間長水等が互判回吟の歌仙五軸を催したるに創つて、大坂の松木淡々また加はり、大に幽玄の風體を鼓吹しようとするのであつたが、これまた遂に前の二者と同様に、徒に奇智險怪人を驚かさうとするの極、謎に類するものとなつた。

されば、蕉風の骨髓は今は何處に求めるとが出来やう。げに入り易いものは俳諧の道であつて、また到り難いものは俳諧の道である。僅に十七字の小詩形に盛るに、日常鄙近の事を以てするが故に、高遠の思想をいふの要なく、また高雅を要するといふでもない。互爾波を知らぬ者共も、競ふこと愈多くして愈眞の詩の精神を忘れ、本領を逸するのであつた。俳諧運座の催は頻繁であり、添削加點を以て口を糊する宗匠の徒も數は加はり行く。安永の際、江戸に於いて已に二三百を算するに至つた。その輩多くは幫間の徒に過ぎぬ。その説く所の固陋にして、その詠する所の陳套な

るは、また言を俟たぬ所である。

然く俗了し墮落した俳壇の趨勢は、天明にまで及んだ。天明に於いて、六俳客の起つて中興の旗幟を樹つるまで續いた。六俳客とは誰ぞ。三浦樗良、谷口蕪村、大島蓼太、加舎白雄、加藤曉臺、高桑闌更、これである。おもふに、中興の事は蕪村と曉臺と共に京にあり、力を合はせて斯道の廓清を計らうとし、闌更また之に結合し、白雄と蓼太とは江戸にあつて鼓應したのであつた。而して、その風格は蕪村に模するものがあるけれども、まづその運動に先鞭を附けたものは樗良であつた。

樗良(二三八四—二四四〇)はもと伊勢風の出、伊勢風はさきに涼菟に起り、乙由に傳はつたものであるが、その遺響を失つて陳套これ事とした。この時に當つて、樗良は冠附の宗匠から起つて俳諧に名を成し、伊勢に無爲庵を立て、つひに伊勢風の餘弊を一蹴し去つた。さばれ、樗良の句はたゞ一段の清新を認め得るに過ぎなかつた。これもとより蕪村と比肩すべき者ではない。他の五俳客としても、いかでか蕪村と同列中において説くことが出来やう。まづ蕪村に就いて特筆せねばならぬ。

蕪村(二三七六—二四四六)名は寅、字は春星といひ、攝津毛野村に生れ、のち天王寺村に住居した。その姓を與謝と改めたのは、後年丹後與謝の海邊に住ひ、その風光を賞したからであつた。二十歳を過ぐる頃、江戸に出で、俳諧を早野巴人に學んだ。巴人の歿後、東北を行脚し、爾後信濃から奈良、吉野、更に播磨、讃岐、また九州、行跡殆ど全國に遍き程であつた。五十歳に至りはじめて京都に庵を結び、五十五歳なる明和七年に至つて京都の俳諧點者の一人となつた。蕪村また繪畫に長じて居る。所謂文人畫である。その飄逸なる畫才は、池大雅と相並びて下る所がなかつた。蓋し蕪村自身、吾に師なし、古今の名書畫を以て師となすといへるやうに、元明諸大家の畫風を研究して新に一家を成したのである。或はいふ、用筆傳彩全然たる明人である。これその俳句の風體に於いて漢意を見、また漢詩文の句法語格を取ることも多くあつたのと同じ軌であつた。蕪村また俳畫といふものをはじめた、省筆の略畫芭蕉以下の俳人を描きて躍如たる者があつた。その形態を顧みざる、その疎放磊落なる俳風と同一轍に出づるものであつた。

蕪村かつて洛西の別業に於いて、その弟子春泥、舎召、波に會した時、俳諧に就いて説いていふ、俳諧は俗諺を用ひて俗を離るゝを尙ぶ、俗を離れて俗を用ふる、離俗の法最も難き所である。かの白隱禪師が隻手の聲を聞けといふもの、即ち俳諧禪であつて、離俗の則である。またいふ、自然に化して俗を離るゝは詩を語るにある、なほ畫俗